

---

# ヒースキングダム之歌姫～おっかさんの漫遊記～

藤堂阿弥

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

ヒースキングダムの歌姫〜おっかさんの漫遊記〜

### 【Nコード】

N2127U

### 【作者名】

藤堂阿弥

### 【あらすじ】

死後の世界の異世界トリップ。やってきたのは、若かりし頃自分が設定した架空の世界。カミサマが息子って…チート能力も逆ハ〜もご遠慮したいんです。

「オタク」という存在が世に認められ始めた頃の同人誌世代の女性が若い娘の姿となって異世界で生きていこうと頑張ります。

## 前編

憶えているのは一面のヘッドライト。

一方通行の狭い道をスピード出して逆走してくるんじゃないよ！という思考。

そして、気がついたら「ここ」にいた。

「天国？」

「残念、お袋。ここ天国じゃないし」

でも、あれで生きているとは思わないしなあ。

「うん、それは正解。お袋、死んだし」

つさきから聞こえるこの合いの手は何なんだろう。しかも、「お袋」って、わたしや娘しかいないし、あの子たちまだ独身だし。

「やだなあ、母さんったら、俺のこと忘れちゃった？」

…記憶のふちに引っかかるこの口調。音声付は初めてだけど。

「うん、正解。さすが、母さん」

「貴様が、レン」

レン。ミルドレン。私の最初の子供。キャラクター

ふわり、と背中が温かくなる。後ろから抱きすくめられ目の端に映るのは、絹糸のようなさらさらした銀の髪。

重さも温度もある。死後の世界にしては不可解な。

「死後の世界って言ってしまえばそれまでだけど。…どっちかというと、異世界トリップ？」

「はあ？」

重みが倍増する。こいつの体重設定何キロだったっけ？

「やだなあ、母さんったら、カミサマなんだから体重設定も何もないでしょ。っていうか、そんな細かい設定なんて最初から俺にあったっけ？」

「なかつたね」

混乱と理解の外にあることが起こると、感覚がショートして却って冷静になると今、初めて知りましたけどね。

「状況説明を、ヒースキングダムの至高の君」

中学の頃の自分の語彙の無さに改めて頭が痛くなる。と、いつか、その設定で遊びすぎて他の名前がすっかりしなくて、最終的にいつもこれに落ち着いていた気がする。

「そうだね。とりあえず、お茶する？」

音も無く現れるテーブルと椅子にティーセット。お流石カミサマ。辺りを見渡すと一面の野原、記憶にあるような無いような花が咲き乱れる場所。

「神々の庭園？」

「そ。流石、我が創造主」

いたたまれない。こっぴどかしいネーミング。

改めて正面から見ると、確かに『ミルドレン』だ。腰まである銀系の長い髪、角度によっては銀に光る灰色の瞳。

人外の美貌。思い描いていた通りの青年の容姿に思わず見惚れる。

「なに？」

「いやあ、いい男に育ったなあ、と」

「育ったって…最初から、俺はこの姿でしょうが？はい。好きですよ？ダーズリン」

カップは何故かピーターラビットのマグカップ。私の愛用の品。

「事の起こりは、アナタだと思う。創造主殿。貴女の死が…いや、事故が発端だった、としか思えない」

## 後編

「突然目の前に現れたのは、病室で危篤状態にある貴女の映像だった」

正面に座ったレンは優雅な動作でお茶を口に運ぶ。惜しむらくはカップがウエツジウツドのメーカー品ではあるが、ピーターラビットのマグダと言う事だ。

「即死じゃなかったんだ」

あの状況で、と思わず唸ってしまう。痛かったとか、苦しかったという記憶は無いんだけど。

「うん、意識は無かったけどね、生きていた。魂がかろうじて繋がっているのが見えた。姫君たちの泣き叫ぶ声と、お姑さんが、一生懸命掛ける声が響いていた。お舅さんは呆然としてて、義理のお兄さんが一生懸命旦那さんに連絡を取ろうとしていた」

そういえば、パチンコに行くって出かけたんだよね。これで、足を洗うだろうか…無理だろうね。

義父さん、義母さん、ごめんなさい。不出来な娘達を押し付けて先立つ不孝をお許しください。

「…不穏なこと考えてるでしょ。ほんとふざけた性格だよな」

悪かったわね。『オタク』が蔑称だった、その筋の第一世代を舐めるんじゃないわよ。周りの白い目に耐えながら細々と同人誌活動していたんだからね。

「一応『カミサマ』だからね。瞬時に何が起こっているか理解しちやっただよ。で、気がついたら、その魂、こっちに引つ張ってきちゃった。テへ。やってみれば、出来るモンなんだね、異世界召喚」  
ふざけた性格はどっちだよ。テへって何だ？あ、いや、こういう性格に作ったのは私なんだから、こういうのも親の責任っていうんだろっか？

「…もういい、で、私のこの先はどうなっているのかな？カミサマより偉い創造主さまっていうのは御免こうむるけど」

「ん〜。とりあえず、『ここ』での最高神は俺だから、そういうことは無いと思うよ。それに母さん、一応人間としてこっちに来ているし」

「…ちなみに、私の外見どうなっている？」

「え、あ、リーリア？」

「へ？と思わず目を見張る。」

「リーリア？『歌姫リーリア』か？」

「設定はともかく、性格的に一番近いからそうなったんじゃない？お袋自身も言っていたじゃん『自分に一番近いキャラ』だって」  
いや、それはあくまで性格上のことで、容姿とか、付随する能力とか違うし。…チートではないけれど。」

さっきから、母さんだのお袋だの、呼び方コロコロ変わるね、キミも。」

しかし、このヒースキングダム。主要人物の設定だけで、あとは脳内のお遊び世界になっていたから、ストーリーも何も無かったんだよね。」

と、待てよ。

「レギオン」

傍らに気配が現れる。レンが微かに舌打ちをする。これこれ、気持ち解るがおやめなさい。

「お会いできて嬉しゅうございます。母上」

ああ、来たね。レンの仇敵、創造主と対を成す破壊の主。生むものがあれば、壊すものも有ると設定した、漆黒の魔王。

あくまで、初期の頃の設定だけ。

腰を折り、私の髪を一房すくって唇を寄せる。こういう男に一時憧れて作ったけれど、実際やられると鳥肌モンだね。

ビジュアル的にもレンと双璧をなす人外の美貌の持ち主。レンに比べると甘いマスクは、初期設定の名残だろうな。

二人を並んで立たせて、思わず眼福と浸ってしまう。

「お袋」「母上」

異口同音、とは言わないけど意味合いには同じこと。お互い顔を見合わせて嫌そうな顔をする。わははは、設定者が私だからね、根本的に似ているんだよキミたち。

「憶えているだろうけど、お袋自身が設定したこの世界、主権は『人間』だ。神々は傍観者であり、基本手出しはできない事になっている」

「我らは互いの務めを果たすのみ。最終的に母上は我らを天上の神と冥府の神に位置づけられた」



すったもんだの末、それに落ち着いたのは大学の頃。最初は天界の戦士と魔界の戦士だったもんなあ。イメージ的にはミカエルとアスタロト。

「だから、お袋にもここで人間としての一生を全うするしか無いみたいだよ。この世界が一つの世界として確立した理由は良く解らないけど、でも確かに『ここ』にある。それは事実だから」

「この先は我らにも解らぬ。神は万能であつて、万能ではないという相反する設定をされた母上自身ならお分かりだと思つ」

そう、神は万能ではない。

万能に近い能力を持っていても、全てを見通せる事無く。全ての未来を知ることには無い。それが、この世界の支柱となる条件付けだった。

「だから、俺達がお袋に出来ることは極僅かだ。多少の魔力と言葉の疎通」

「基本的な知識と、愛される資質」

「…逆八ー設定はいらない」

「我らは母上を愛しております。男神二人の愛は、充分逆八ーになりませんか？」

言葉にならなかつた、レギオン、冥界の王。決して正位置にはなれない立場に設定したのに、彼はやはり彼だ。

レンが時を経るにつけ腹黒でちゃらんぼらんになっていった反動で、生真面目な男になってしまった。最終的には悪役はどう見てもレン

だと思えるほど、彼は優しく、穏やかだ。  
初期設定の気障でフェミニストというのは最後まで消えなかったけど。

「苦勞する、と解っていても目の前でお袋の命が消えていくのは耐えられなかった。…恨んでくれてもいいから」

…全く、この子達ときたら。

手を伸ばし、息子達の肩を抱く。

「愛しているわよ、私も。…恥ずかしいから二度と言わないけどね」

なんて言いながら、この先私は何度もこの台詞をいつ羽目になる。

こうして、私の第二の人生というものが始まった。

## 後編（後書き）

ご指摘ありがとうございました。  
誤字を修正いたしました。 6 / 20

## 1 (前書き)

始めてしまいました：自粛できなかったのは、ひとえに作者が煮詰まってしまったからです。申し訳ありません。。orz

歌姫リーリア。

容姿的なイメージは『桜』。見飽きない美しさ。

散る、その姿の潔さは兎も角、儂いイメージではない。大地に根を張る『木』としての桜そのもののイメージで作り上げた女性だ。…あくまで、外見と初期設定は。

しかし、遊んでいくうちに性格がだんだん自分に似てき…というより、自分の仮想キャラとして付き合ってたせいか、最終的に残った設定は、外見のイメージと「黄金の光」と称された歌声。

…おつごんのひかり、ってどんな歌声だよ。確かにくすんだ金褐色の髪と琥珀色の瞳は「黄金」だけどさ。

まあ、傾国とまではいかないけど、そこそこの美人さん。好みの問題があるから、ランクとしては上の下、もしくは中の上、という中途半端な外見ってところだ。

特上クラスにならなかったのは、自分の仮想キャラとして位置づけてしまったからだろう。

ゲームとしては兎も角、逆ハ―は、どうも趣味じゃない。周囲にいる男全てが自分に好意を持つって…なんだかねえ。

大事にされるのは嬉しいけど、愛だの恋だのは一人で充分。…まあ、夢見る乙女って年でもないけどね。

ちなみに、リーリアの初期設定は16歳。ってことは、今の自分の年って16なのか？娘よりも年下じゃない。うわ。

息子達に落とされたのは、シエロンという国。「ロウエン」という港町でゲームスタート…もとい、これからの生活の第一歩。

ちなみに、こんな国私は知らない。

私の遊び相手は、レンだったり、レギオンだったり、二人の部下だったりで他の設定はあくまで、大雑把にしかしていなかった。国の設定や抱える情勢にまで目を向けていない。

そんな設定がきちんとされた話は別にある。周囲に内緒でホームページを作って、こっそり活動していた世界がそれだ。

ヒースキングダムとは縁も所縁も…全く無いとはいわない。世界観は似たり寄ったりだから。

でも、そこと「ここ」は違う。

曰く「村人Aにも名前があり、生活がある」だ。確かにそうだ、天界があり、冥界がある。当然人には人の世界がある。

働かざるもの食うべからず。これは実の母に叩き込まれたモノの一つ。樂できるならそれに越したことは無い、と違ってしまうのだけど、いかんせん貧乏性がそれを許さない。

おかーさま、貴女の教育は偉大だ。

ありがたいことに、リーリアにはこの歌声がある。加えて、小遣いと称して、彼らが与えてくれたものは、金貨二枚分の金額。

レギオンが与えてくれた知識によれば、日本円にして、金貨一枚20万円程度。物価水準は当然低いので、贅沢しなければ半年は暮ら

していける金額だ。二枚だから、一年、か。小遣いにしては多すぎる気がするけど、良しとしよう。

この辺りの治安は領主と街の警備をする騎士達が優秀な為、極めて高いらしい。だが、女性の一人旅というのは決して安全とは言いがたい。

基本剣と魔法が跋扈する中世に近い文化水準に設定しているのだ。とはいえ、学生の頃にかじった当時の「色々な」文化に頭を抱え、上下水設備の設定だけはしっかり現代風になっていたりする。

我ながらいい加減な発想だが、暮らす分には衛生的で安全な設定だとおもつ。うん、そういうことって大切よね。

だが、あくまで「それだけ」だ。

自分に許された防衛の為の魔法は、あくまで身を守ることが前提条件で人を傷つけるものではない。

「魔法は我らの管轄。やろうと思えばどこまでも強くなれますが、母上はそれを望んでいらっしやらないでしょう?」

苦笑と共に出されたレギオンの言葉を思い出す。うん、その通りだよ。

「正直俺達としては、強い魔力を持っていてくれたほうが安心なんだけどな…お袋、そういうの嫌いだし、なんかいい保険があったら…」

最後のほうの独り言は殆ど聞こえなかったけど、そこまで過保護にすることは無いと思うけどな。何かあっても自分の責任だし……。

<そりゃ、こっちに引っ張ってきた責任もあるからだと思うぜ?>  
「否定しないけど、分不相応ってものでしょ?」

<一応、この世界の真の創造主さまだから、どれほどの力があっても問題ないと思うけどな>

「重たいものはいらない…って、肩が…え?」

<気付くの遅すぎ。ほんと迂闊な性格してるよな>

「……………ブラン？」

<正解。流石はお袋さま>

ブラン。半魔でレンの使い魔。カミサマが使い魔っていうのも変だけど、最初に浮かんだのが、白い猫を膝の上に乗せてくつろぐレンだったので、この設定にしたのだ。

それ以来、彼の腹心であるヴィダとともにレンの傍らに何時もいる。

肩の上の白い猫は、私の頬に甘えるように体を摺り寄せた。

「なにマーキングしているのよ？っていうか、レンは？」

<ヴィダがついているから心配ねえよ。マーキングなんてしてねえし>

いや、猫って擦り寄って自分の臭い付けするし。

<俺は『半魔』だってば。…深層意識は無理だけど、表層の思考は読めるから考えるだけでいいぞ。でないと、危ない人になっている>  
はっと気づくと周囲の人たちが慌てて視線を逸らす。だろっな、猫相手にぶつぶつ独り言を呟くって、確かに危ない人種だと思われるも否定できない。

あーでも、使い魔扱いなら魔法使いって思われているかな？それはそれでご遠慮したいけど。

<主がお袋さまがこの世界に慣れて、安心できる環境に落ち着くまで傍にいろってさ。まあ、半魔だからある程度魔法は使えるし、ボディガードくらいは出来ると思うぜ>

…本当にあの子達は。

苦笑を浮かべ、肩にいるブランの首を撫でてやる。



( よろしくね。『白虹の炎魔殿』 )

< あははは、俺のふたつ名、よく憶えていたな >

ふふふ、自分のネーミングセンスの在り来たりさに落ち込んだ記憶があるからね。 ふたつ名、か。そういえば。

「漆黒の風魔」

【お呼びか？】

肩で毛を逆立てているブランを宥めつつ、突然足元に現れた大型犬

… もとい、狼を見て笑いかける。

( 久しぶり、って言うのかしらね。シュルツ )

【ご健勝そうで何よりだ。我も主の命を受けまかりこした】

< 来なくていいっ。お袋さまには俺だけで充分だ >

【そなたの指図は受けぬ。我に命じることができるは、主とご母堂のみ】

< お袋さまあゝ >

…面白いから放っておこう。

ちなみに、四大精霊に由来する彼らは、他に「紅蓮の水魔」とか「蒼穹の地魔」とかが居る。

絶対声に出して呼びはしないけれど。

## 2 (前書き)

週一更新のつもりでしたが…とりあえず、詳しくは活動報告にて。

ペット可、っていう宿屋を見つければ部屋に落ち着く。まあ、魔法使いの中には使い魔を連れてくるのも居るし、ペットを連れて旅をする貴族なんかもあるらしいし、騎士の中にも連絡用に鳥を連れてくる人もいるらしいから、そういう宿は少なからずある。

相場よりも弱冠高いけれどね。

一階に食堂を兼ねた酒場があったので、ご主人に聞いてみると歌わせてくれるとの事。出来如何では宿代を免除してその上お金をくれるって話だけど、上手い話には何かあるといけからな、演奏料（っっていいのかな？）は貰うとしても宿泊料はきちんと支払おう。もしくは、ちやらの対価交換。

一応、レンとレギオンの前で歌ったけど、自分の声って良く解らないのが本音だ。いや、自分ではなくリーリアの声なのだけだ。

二人は絶賛してくれたが…マザコン坊やの褒め言葉なんて、どこまで信用していいのやら、だ。

まだ時間的に早いので、軽く腹ごしらえしておく。ここでの初めての料理だけど、食材はどこかで見たとような物…まあ、無理ないか。味付けは薄味。旦那達と違って長女と私は薄味が好きだったから問題は無い。次女や旦那なら耐えられないだろうなあ、とちよつと懐かしく思い出してみる。

床に置く形になるけれど、ブランやシュルツにも食べ物を出してくれる。必要はないけれど食べることは出来ると、彼らも口にする。基本彼らの『食事』は生き物の『気』である。…ここまでは、私の

設定。

『魔』はそれぞれコントロールして『気』を搾取する。自分が存在するに足りる程度で済ませるから、本来なら何の問題も無く共存しているのだが、（人間は、生きていてだけで喜怒哀楽の『気』が駄々漏れなんだもん。とはブランの台詞）中には『気』ではなく、人の血肉を好む『魔』も居るとの話に絶句して、我に返る。

『陰魔』とか『妖魔』と呼ばれる存在。

「作ったわね、確かに。騎士や魔法使いのサーガのネタで」

部屋に戻って思い出して口にする。思考だけの会話って、結構疲れるからね。

初期設定で、放っておいたモノだったけど、生きてたのね、悪い事したかしら。

【必要悪だと主が申ししていた。お気になさることはない】  
必要悪、ねえ。

【左様。この世界はご母堂の手により創られたものではあるが、すでに一人歩きもしている…この世界の時間で言うなら創世記より、すでに多くの歴史が繰り返され、その多くはご母堂のあずかり知らぬこと】

<大概お前も言い方冷てえよな。ま、事実だけどさ。…お袋さま、リーリアと同世代で創った奴が居るだろ？リーリアとは接点が殆どない奴だけど>

リーリアと同世代…？いたっけ、そんな奴…って。あ。

「カーマイン！大国シェードの皇帝」

運と部下に恵まれた皇帝。どう転んだら、国を広げれるかってシユ

## ミレーシヨンの実験材料。

< 現実には、そこまで運に恵まれちゃ居ない。そこそこ実力はあるから領土は多少広げてはいるが、あのシュミレーシヨンみたいに上手くはいかない >

確かに『わらしべ長者』のノリだったから。

< 奴だって、ちゃんと親があつて、その親から譲り受けたものが出发点だ。お袋さまが作ったものが全てじゃない >

それはそうだろう、自分が知らない国、自分が知らない歴史、それから全てがこの世界となっている。

【そもそも、ご母堂がお付けになった『ヒースキングダム』という言葉は、こちらでは神々の世界を意味する言葉だ】

つていうか、この話の主題だったはずなんだよね。あくまで初期の、ちゃんとしたストーリーを作ろうと考えていた中学生の頃の話だけども。

【思い悩まれることはない。ご母堂がご母堂らしく生きていかれれば主たちも喜ぼう】

< 業腹だけど、コイツの言うとおりだぜ？リーリアの形を取ったのも、こいつが何にも縛られない人生を望んでいたからだろう？ >

そう、リーリアと言う少女は出自も何も解らない。旅芸人の一座に拾われ育てられた娘だ。その一座も、団長の体調と花形の引き抜きで解散という形になってからの話だったはず。：挫折したけど。

あ、思い出した。カーマインがリーリアと同世代だった理由。王宮に引き抜きにあつただけど、断るんだよね。縛られるのは嫌だからって。

数年先の話だから、実際起こるかどうかわからない話だけどさ。

「神々でさえ視ることの許されない、いくらでも変える事の出来る未来…これが、この話の初期設定だったわよね。若かったわよね。つくづく思うわ」

しみじみとしてる私に、二匹は複雑そうな顔をしていた。

「とりあえず、ここで暫く様子を見て、次に何処へ行くか決めましょ。目的も何もないから、のんびりと行けばいいわよね。」と笑うと彼らも頷き返してくれる。

「さて、そろそろ頃合かな？下に行つて来るわね」

お留守番よろしく、と出て行った後、彼らがお互いに顔を見合わせ重い息を吐いたことなど私は知らなかった。

この世界は、確かに私の設定したものを「元」にしてはあるは、独立した世界だと身にしみるのは、これより暫く後の話。

基本蚤の心臓なので（誰だよ、そこで笑っている奴）人前で歌ったことなど数えるほどしかない。カラオケだって片手で足りるほどしか行つた事がない。

そんな自分にここで歌えと？

酒場は既に喧騒に包まれていた。港町だから、海の男達が客の殆どだろう。騒がしさも半端じゃない。

呆気にとられている私を、ご主人は面白そうに見ていた。小娘のお手並み拝見、といった所だろう。

…旅の恥は掻き捨て。いや、そうじゃない、これは私であつて私じゃない。

いやいやいや、ここで出来なきゃこの先困るでしょう、自分。食べていかなくちゃいけないんだから。

さつき女将さんをお願いして作ってもらつた、蜂蜜と柑橘系の果汁をぬるま湯で割つたものを口に運ぶ。歌手は喉が命だからね。

袖の間からとりだしたのは、向こうで言う「音叉」。こちらの世界には無いものだけど、レンとレギオンに頼んで「創つて」もらった唯一の魔法。多くの魔力よりもたった一つのこれを私は選んだ。

傍にあるテーブルで叩くと、さほど大きな音ではないが、独特の響きと含まれる超音波がこちらの存在を示す。

視線が集まつた次の瞬間、私…いや、リーリアは歌いだした。

私がリーリアというキャラで遊んだ内容は、彼女のイメージで色々なCDやmp3から曲を拾い出して編集していた事だった。

それこそ、耳に入って、声や歌の内容が彼女のイメージにあえばOK。有体に言ってしまうえば、自分が気に入った音楽を彼女が歌うイメージで遊んでいたのだ。

流石に演歌は無かったけれど、J-popは勿論のこと、アニメやボーカロイドまで色々なジャンルで曲を選び編集しCDに落として、車の中で歌っていたのだ。おかげさまで、レパートリーは広い。

日本語で歌っていても、流石カミサマ特性『万能翻訳機』だ。此方の言葉で一番近い意味合いで詩にしてくれた。

三曲ほど立て続けに歌って、一息つく。すると勝手に周囲から割れるよな拍手と、歓喜の声が沸き起こった。

「すげえぞ、ねえちゃん！」

「聞いたことの無い歌だが、どこのだ?!」

「他にも何か歌ってくれ！」

「景気のいいのをたのむぜ〜」

口々にはやしたてながらも真っ直ぐな賛辞に笑顔が浮かんだ。

ご主人や女将さんに視線を移すと満足そうに笑っていた。…流石だね、リーリア、貴女は一流の歌姫だわ。

おっしゃあ、ならば景気付けに「テイゲキ」でも歌って進ぜよう。

…帝国歌劇団がどう訳されるかは謎だけど、ね。

うわあ、か・い・か・ん。…って、古い?だって仕方が無いでしょう?若かりし頃流行ったんだから。



人前で歌って、それを褒められるのって、すごい嬉しい、っていうか病みつきになるわ。

あれから、もう2曲ほど歌ってお開きにした。あんまり調子に乗りすぎて商売道具駄目にしたくないしね。

途中酔っ払いが絡んできた時、適当に相手してあしらっていたら、助けに来てくれた女将さんに「若いのに慣れてるねえ」って妙な感心のされ方しちゃったけど、すみません、実働年齢アナタよりいつています。

いたんだよね、友達に。性質の悪いのが数人。絡むわ、説教たれるわ、r: ああ、いや、うん。まあ、色々ってね。

「たつのしかつた」

部屋に戻ってベットにダイブ。ブランとシュルツが生暖かい笑顔（の雰囲気ね）で迎えてくれた。

【危惧するような事は無かったようだな】

<まあ、お袋さま世慣れているし>

心配してくれたのかな？なんか、ちょっとばかり引つかかるけど。

【お気になさるな。些細なことだ】

<そうそ、老けるぜ？>

こういう時だけ気が合うのね。

心地よい疲労感の元私はそのまま目を閉じ眠りに落ちた。睡魔に飲み込まれていく中、灯を消す気配と、微かな衣擦れの音と共に布団がかけられる重みを感じていた。

夢を見た。

家の座敷。仏壇の前で、寝ている主人の姿とそれを呆れてみている子供達。ふと気付いたように次女が顔を上げ目を見開いた。それにつられるように長女が顔を向けてくる。

「かーさま」

「お母さん」

おや？と首をかしげ、彼女らを見る「見えてる？」と、声を掛ければ半泣きになって頷く姿。やれやれと苦笑が浮かぶ。

「悪かったわね」

「何が？お母さんは悪く無いじゃん」

惘然とした次女にふっと笑いを浮かべる。泣くのを我慢しているのが解つて、手を差し伸べるが、お約束どおり、というか何というか突き抜けた。

「まあ、声を通じるだけ良しとしますか」

大きく息を吐くと主人を見下ろす。仏壇の前には、真新しい位牌と骨壺の入った箱が置かれていた。それと一升瓶とコップ。うわ、人の「取つとき」を飲んだな、こいつ。まあ、いいけど。

「ずっとこんな感じ？」

「昼間はそうでもない。寝れないって夜はお酒の力を借りてる、みたいなの？来週から仕事に行くって」

長女の言葉にふうん、と相槌を打った。結構打たれ弱いからなあ。大きな図体しているくせに。

「任せてよい？」

「良いも何も、そうするしかないじゃん」

怒ったような次女の口調。苦笑を見せた私に、長女が顔を上げた。

「お兄ちゃんには会えた？」

この世に出る事無くいなくなってしまった存在をこの子達はそう呼ぶ。ご丁寧「和哉」という名までつけて。首を振った私に「そっか」と呟きが返ってきた。

「通帳と印鑑の場所はわかる？」

首が縦に振られる。「かあさまってば、どこまでもリ Arist」と長女が泣き笑いの表情を浮かべた。

「基本名義はあなたたちになっているから問題はないと思うけど」  
そう言つて、寝転んでいる主人の尻の辺りを蹴る。見事にすり抜けちゃったけど…なんか、悔しい。

「代わりにやっておいて上げるよ。とうさまのケツを叩けばいいんでしょ？」

こらこら、年頃の娘さんが「ケツ」なんていうものじゃありません。

「ご飯つくり頑張れ」

「何故に私っ!？」

次女の肩を叩く真似をしながら言うと、慌てた反応が返ってくる。

「だって、キミが一番まとともに作れるんだもん。後は姉に押し付けな」

「ひどおい、かあさま」

ふふっと笑って子供達を見る。いい子に育ったと思う。…オタクだけだ。

実家の母曰く「親を見て育ったのね」……笑って誤魔化すしかない話だ。

何かに呼ばれる気配がした。タイムリミット、かな。

「じゃあね」

え？と顔を上げた娘達に笑顔を見せた。そして、そのままフェードアウト。

眠りから覚醒する中、穏やかで哀しげな青年の笑顔を見た気がした。

何か夢を見た気がするけど、綺麗さっぱり忘れてしまった。ただ、目覚めてみて、何か胸の痞えが落ちたような、心残りが消えたような、そんなさっぱりとした気分になっていた。

昨夜、そのまま寝ちゃったので服がしわくちやだ。レンたちが持たせてくれた荷物を開けると、着替えが一式と、下着が数枚、寝巻き代わりのワンピースのようなすとん、とした服が一枚。

とりあえず、顔を洗って着替える。洗濯は宿泊中なら有料で宿がやってくれる。ホテルのクリーニングサービスみたいなもの。もちろん、自分で洗い場を借りてやることも出来るけど、今回はやっぱりおもうと思いい、下にもって行く。

「おや、やっと起きたね」

食堂へ行くと、女将さんが笑顔で迎えてくれた。「おはようございます」と声を掛けると、「もう、昼だよ」と笑いが返ってきた。

「昨夜はありがとうね。久しぶりにいいもの聴かせてもらったよ」洗濯物を頼んでから、女将さんに言われるままに、食堂で座って待っていたら、スープとパン、サラダが添えられた魚が運ばれてきた。「これは、私からのサービス」

内緒だよ、とウインクされて笑顔で礼を言う。時間外なのに申し訳ないと謝ると、昼の仕込みの最中だから大丈夫だとの事。この宿は、ご主人夫婦の他に、厨房と食堂に人が雇われていた。後、宿にも数人掃除や洗濯をする人たちが居る。

この世界でも、割と大きな宿に属する場所だった。

コンソメ風のスープに、白身の魚は塩コショウで味付けしたシンプルなもの。流石港町、新鮮な魚が美味しい。

ついてきたブランやシュルツも皿に薄く味がつけられたスープに煮込まれたくず肉が浮いたものを出してもらっている。

「さて、で、どうするね？酒場で歌った代金、現金がいいか、宿代として折半がいいか」

ご主人とアバウトな話しかしていなかったからなあ。宿代チャラも魅力的だけど、ここのレベルの宿泊料み見合うかどうか謎だよなえ。てか、実際の経理面は女将さんのね、どこでも財布を握っているのは主婦だって事かしら。

「じゃあ、出演料ください。この町は初めてなので相場がよくわかりませんから、女将さんにお任せします」

「…そりゃあ構わないけど。いいのかい？」

言いたいことは何となく分かる。多分世間知らずだと思われるんだろうな。まあ、確かにこっちの世界の事はよく解っていないのは確かだけど、この女将さんも確認する辺り人がいいと思う。黙って適当に相場以下のお金を支払うって事も可能なのに、それを躊躇うんだもんね。

「大丈夫です。それに宿の信用を落すような真似はなさらないでしよう？」

ちよつとばかり人の悪い笑顔を浮かべてみる。旅の芸人なのだ、それに見合う料金を出さないというのは、その宿の芸人に対する扱いと評価を意味する。下手なことをすれば、これからここで歌ったり演奏する芸人が居なくなる、ということだ。

もしくは、宿のレベルに満たない腕の持ち主しか寄らなくなる。酒場を兼営している宿にとって、そこで落とされる利益は少なからずあるはずだ。人を集める腕の良い芸人が来なくなるというのは、相応の痛手になる。

「若いのに、色々慣れてるねえ」

昨夜と同じような言葉を、別の意味も含まれてしみじみと言われてしまった。…ええ、人生そこそこ歩んでいますから。

「じゃあ、これ。昨夜の分だよ」

予め用意していたのだらう。渡されたのは銀貨が10枚。だいたい、一枚1000円単位換算。こっちの相場としては破格の報酬だと思っ

「契約は10日間。今回のこれは契約金込みの値段だよ。後は一晩銀貨5枚、でどうだい？」

「充分です。っていうか、私のような駆け出しには過ぎた金額だと思いますが」

日本人だな、我ながら。謙遜が美德ってか？柄じゃないけど。

「いいんだよ。あんたのその外見も評価のうちさ。今夜辺り、耳にした若い連中がやってくるだらう。そいつらから元は取らせてもらっ

「あはははは。もう、笑っしかない。オサスガ、しっかりしてらっしゃる。と、銀貨をもう三枚渡された。」

「それで、市場でも回って、営業活動しておいで」

それも込みですか。この商魂の逞しさ。大阪商人レベルですね。…って、結構偏見はいつているけど。

「イツテキマス」

呆れた気配を隠そうともしない「お供」を連れて、宿を後にした。

<途中まではいい勝負だったのにな。惜しかったなお袋さま>  
くつくつと笑いながら言うブランを睨みつけると、器用に肩に飛び乗ってきた。

【言葉が過ぎよう。あの女人にとってご母堂は娘のよな年頃なのだろう。故に自然扱いもそうなる】

娘、ねえ。確かに小遣い渡して「いつてらっしゃい」は良くやったけどさ。

(ここの、成人年齢は?)

<ん、国によって多少の差はあるけど、シエロンは15じゃなかったかな?だから、お袋さまは充分成人だぜ?>

【ちなみに、平均の適齢期は18から25、6だ。安心めされよ】  
何を安心するのかな?シユルツくん?

思考に出さず、笑顔だけで応えると、尻尾がたれて(いや、狼だから垂れているけど)肩を落す様なんか可愛い。

<お袋さま…S?>

否定はしないわね。これもまた、笑顔のみで返すと、慌てて肩から降りていく。わかりやすい奴等。

(舞台衣装でも作ろうかな。でも、高張るのも嫌だしなあ)

服地を扱っている店で立ち止まる。ちなみに裁縫の腕は底辺を張っているので、作ってもらうか既製服を買うしかないんだけどね。決して安くは無いだよな。あくまで、ここの物価基準だけ。



「いらつしやい。おや？昨夜ロイドのところで歌っていたねーちゃんじゃないか？」

ロイド？ひよつとしたら、宿屋のご主人の事かな？聞いてみると。肯定の返事が返ってきた。

「俺も昨夜あそこにいたんだよ。今夜もまた歌うのかい？」

「はい、暫くあそこで歌わせていただきます。よろしかったら、聴きに來てください」

にっこりと笑顔で答えれば、店の親父の鼻の下がみるみる伸びていく。やれやれ、どこの世界も美人の若いねーちゃんには弱い男が多いってことかな？

しかし、それを利用しない手はない。どこかで「悪党」という思考が聞こえるが、あえて知らぬ振りをする。

「舞台衣装を作りたいんです。あまり青張らなくて、質のいい、お値打ちな布はありますか？できれば仕立ててくださる方を紹介してくださいと嬉しいんですが」

スマイルゼロ円。ただより高いものは無い、ですぜ、旦那。

値切ったわけでもないけど、かなりお安く一式用意できたのは、言うまでもない。

「お袋さま」「い」母堂」

この言葉で彼らが自分の子供ではないことが判っていた。キャラ

半魔という存在は、私とレンの脳内の会話で生まれた存在だ。

「魔族」という、姿形はヒトでありながら、はつきりと「ヒト」とは一線を隔す存在。

設定が落ち着いたのは、レギオンが冥府の主となつてから。彼の住む世界の住人としての存在として魔族を位置付けたのだ。

ヒトとは異なる生態系なので、両者の間には子は生し得ないはずなのだが、奇跡のような確立で「彼ら」は生まれる。

それがブランたち「半魔」だ。

彼らの基本設定は「ヒトでもなく魔でもない」ではなく、「ヒトでもあり魔でもある」だった。

それこそ、奇跡のような存在なのだから、どちらの世界でも受け入れられるモノであつてほしい。それだけを願つて設定した。

「けどさ、あんまり完璧な存在だと、狙われて厄介な事になるんじゃないか？」

当時、脳内である意味人格すら持っていたレンが、そうのたまつたので、ある条件付けをしたのが、その魔力。

当然「魔」であるがゆえ、一般の魔力を有するヒトよりは当然強いが、魔族にあつては、一般的な…却つて低いレベルにすらなる、ということだ。

だが、それではあんまりなので付加的な魔力も有する事にした。

魔は基本的に、魔力に対して万能だ。多少の得手不得手はあるが、一通りの魔法は使える。

しかし、彼らはそれができない。その代わりに一つの方向に特出する。

ブランが炎、シュルツが風。他の魔法が使えないのを補うかのように、彼らはその方面では最強を誇る。

彼らが普段取っている猫や狼の姿は、魔族特有の変身能力で、これはオプシオンとしてつけたままにしておいた。

だって、可愛いじゃん。

……いやいやいや。

それは、兎も角、その半魔のなかでも最強といわれた四人のうち、二人が自分の傍にいる。息子達の「命令」だろうが、彼らにも彼らの生活があるのだろうから、早いとここの世界で一人で生きていけるように頑張って二人を解放してあげなくちゃいけない。

そう思って只今ワタクシ、この街の「図書館」にいます。

図書館、っていうのは違うね。ここの「ギルド」の資料室、かな？ 一般に開放されていて、誰でも自由に利用できるようになっていて。しかも、息子達が与えてくれた能力の一つに「読み書きが不自由でないように」というものがあったって、この世界のあらゆる言語が理解できたりする。

ありがたや、ありがたや。…こちら方面では充分チートかも知れないですな。

ちなみに、このギルドシステムもワタクシ無関係でございます。この建物自体が、各ギルドそれぞれの窓口があるいわば、色々な会社の営業所が集まったような場所だった。

もちろん芸人にもギルドがあつて、仕事の斡旋とか、何かトラブルがあつた時に代理人を立ててカタをつけてくれるとか（弁護士みたいだと思つたら、似たような職種があつてびっくりした。「調停人」というのだそうだ）旅をするときに護衛の斡旋もしてくれるらしい。これは、冒険者ギルドと連結していて、個人でそちらに頼むより、色々な決まりを設定してくれているので確かだといえる。

元タリーリアは旅の一座としての登録だったので、改めて個人で登録してもらうことにした。

前に居た一座の名前を挙げると、受付のお姉さんにやたら同情されて（ギルド内では有名な話だつたらしい）親切にしてもらつちやつたりした。そのまま、奥の部屋に入つて、中に居る魔法使いに「オーラ」の色を識別してもらい登録のカードを作ってもらつのだが、その人に「不思議な色をしていらっしゃるじゃいますね」と言われてしまった。

貰つたカードの色は、シルバーグレイ。あの二人の「色」が混じつた色だった。

ちなみに、このオーラ、一人一人微妙に違う色をしているらしくつて、同じ色のものはないそうだ。

勿論、よく似た色はいくらでもあるが、専門家が視たら一目瞭然、なんだそうだ。

十人十色、とはよく言つたものだと思う。

さて、基本的な知識はレギオンに与えてもらったとしても、細かいところは解らない。当然だ、今までの記憶プラスこっちの世界の全知識を与えられたら、パンクしますよ私。そこまで、「脳力」全開じゃありませんもの、はい。

とりあえず、この世界は三つの大きな大陸と大小いくつかの島々で出来ているらしい。

あくまで「らしい」だ。だって、こっちには人工衛星も飛行機もロケットもない。測量技術だっておぼつかない。

知的生命体（と、という言葉を使うのはすごく抵抗がある。昔やったシュミレーションゲームの名残なんだけどね）は、ヒト（一般的に言う「人間」ね）魔族、獣人（おお、ファンタジー）。「妖精とか、精霊とかはいませんよ」とレギオンに言われたけど、近い存在で「神族」がいる。レンしかり、レギオンしかり、彼らの周囲にいる、少数の存在。いわゆる「カミサマ」達だ。

ヒトと魔族、神族の違いは外見ではわからない。とはいえ、神族、魔族は全て人外の美貌を持つ、とはブランの情報。

そして、神々はヒトには不可視の存在らしい。：すみません、一部与えられた特権的（押し付けられた、ともいうけど）能力で、ワタクシ彼らが見えます。

魔族と獣人の一部は見る事が出来るらしい。だから、そこかしこに「神殿」とか「神話」とかがある。

魔族とヒトとの大きな違いは、内包する「魔力」にある。ヒトは魔法を使うたび、消費し（MPだわね）尽きれば当然使えなくなる。勿論体力と一緒に休息すれば回復はするけど、魔族にはそれが無い。

だから、その気になれば、魔族がヒトを隷属させることは容易いが、気質として彼らは集団行動が苦手な面倒を嫌うと、シユルツが教えてくれた。

だから、ヒトを隷属させても持続できないので、やらないそうだ。

自分が関知していないこの世界の法則だけど、結構ご都合主義に近い出来だね。

そう言っただけなら、基本設定者の気質が反映されていると思われる。なんて、言われてしまいました。

言っておくけど、神族、魔族の皆様そろってお顔の造作が素晴らし、なんて設定していませんからね、私。

獣人は呼んで字の如し。彼らは独立した種族で、魔力が全く無い代わりに身体能力が半端無いそうだ。彼らも私の未設定の種族だったりする。

元の動物の身体能力を備えていて、背中から羽を生やして空を飛ぶもの、足が速いもの、色々だそうだ。

彼らとヒトの間の歴史は、やはり隷属するものさせるもの、の時代がある。いまだに奴隷みたいに扱っている国もあれば、場所によって差別の対象になったりしてもいるらしい。

シエロンは早くから、その制度を撤廃して、ヒトと同じ扱いをしているので、多くは騎士や傭兵、冒険者としての職業についているとの事だった。外見的特長で「いかにも」とわかるタイプと、外見では全くわからないタイプがいるとブランたちが教えてくれた。実際街中でも、「おお」と思うヒトもいれば、彼らに教えてもらうまで全く解らないヒトもいる。魔力が強く、オーラが見える者なら解るらしいが、私にそんな能力は無いし、欲しいとも思わないから別に

いらせぬ。

お袋さまらしい、ってどいことかな？ プランくん？ しかも、  
っかりシュルツも同意しているし。…全く。

最近、酒場のお客さんに若い人たちが増えてきたような気がする。家で一旦奥様の料理を食べてから来るオジサマたちと違って、こちららは飲み食いするから、それなりの利益も生んでいるようだ。

貰いすぎの報酬も、これなら良いか、って思ってしまったほど彼らの食べっぷりは素晴らしい。騎士だって肉体労働だもんね。わりと細身のヒトでも、何処に入るんだろって思うくらい食べる。

そう、増えたお客の大半が、騎士のおにーさん達だった。…感覚的には坊や達なんだけど。

酒場で給仕の仕事をしているカレンさん（ないすばでいの美人のおねーさんなんだな）の話じゃ、魔力も大して無いのに使い魔二匹を従えた（美人の）歌姫って噂が街に広まりつつあるらしい。

最初騎士の一部の人たちが、偵察を兼ねて聴きにきていたのが、口コミで広がったとの事。

あー、まあ、いいけどね。女将さんの思惑は半分当たり、って所かな？

ブランとシユルツは街に出るとき極限まで魔力を押さえ込んでいるから「使い魔」に間違えられるんだろうね。まあ、半魔だつてばれるのはもっと問題があるから良いんだけど。

オジサマ達と違って、純粹に（笑）歌を聴きに来てくれているし、騎士さまだからか余り羽目を外す事無くいてくれるので客としては極上の部類に入ると思う。

若いから、たまにお馬鹿さんもいらっしやるが、そういうヒトは周



困にいるお仲間が上手く連れ出したりしていた。  
カレンさん曰く、ここの騎士団は国の海の玄関ともいえる、この港  
町に駐在しているから、かなり質が良いそうだ。

「副隊長が、また良いオトコでねえ〜」

この街を出るまでに、一度お目にかかってみたいですね。

……なんて、考えていたのがいけなかったのか。

ギルドから正式な依頼として来ましたよ。領主館のパーティーで歌う  
仕事だ。

なんでも、耳慣れない異国風の歌を歌う芸人がいるとの噂が、御領  
主さままで届いたらしい。多分、騎士経由での情報だろうなあ。表  
向きは「評判の歌姫云々」だけど、裏にどんな事情が隠されている  
やら。

だって、仕方ないじゃん。こっちの詩なんて知らないんだし。

余談ではありますが、ギルドからの呼び出しの方法はいくつかあつ  
て、滞在場所が届けてあるなら、そこに直接職員が来るのだけど、  
旅の途中の連絡方法に例のカードを使うこともあるらしい。

魔法のことはよく解らないけれど、使い魔にカードのオーラのパタ  
ーンを憶えさせ、痕跡をたどるのだそうだ。

警察犬みたい、と思ってしまうたのは致し方ないと思う、よね？

それは兎も角、そんな場所にきて行く服など無い、と嘆いていたら  
女将さんが、既成の服を扱っている店を紹介してくれた。そこは、  
ドレスもあるらしい。

「まだ、日にちはあるんだから、そこで作ってもらうと良いよ。腕  
は確かだし、その割りに値打ちだからね」

そう、この「お呼び出し」のお陰で、滞在が一週間ほど延びました

よ。いいけどね。

ナタリーさん（本当に女将さんには娘さんがいた。年はリーリアより上で、近所にお嫁に行っていて子供さんもいる）に連れて行ってもらったのは、高級ブティックみたいなお店だった。

リーリアの体型は、この世界では小柄なほうになるけれど、一応標準体型なので、出来合いのドレスを手直ししてもらう事で話が落ち着いた。銀貨三十枚。ドレスとしては充分安上がりだし、女将さんの紹介って事で、かなり勉強してくれたみたいなんだけど、それでも決して安い買い物ではない。

旅の途中って事も考慮して、できるだけ嵩張らないタイプにはしてくれたけど……この先、こんな服が要らないようにしたいなあ、って思うのは、根っこの部分が庶民だからでしょうか？

向こうの世界で若い頃勤めていた先で、たまに政治家にパーティー券を会社が購入することがあって（よくある話だったね。資金集めのパーティー配布）「もつたいないから行くか？」って上司に言われたことがあるけど、丁重にお断り申し上げました。

着ていく服も無いけど、何が楽しくって政治家のパーティーって、皆で話していたもんね。

まあ、招待客に芸能人がいるってことで、ちょっと心が揺れたけど、後で上司に教えてもらったら、ベテランの俳優さんだったり歌手だったりしたそうだ。

いかん、どうも頭が現実逃避しがっている。

最初、この話が来たときに拒否は出来ないって解ってはいたけど、一応断りの方向に持っていこうとしたんだよね。若輩者だから、とか、そういった場所に行ったことが無いから礼儀とか解っていないから、とか。

そうしたら、ちゃんとギルドにいらっしやいました。マナーの講師の方が。

どのギルドでも、そういった不測の事態にあわせて、共同で雇っていらっしやるそうなの。

基本、歌うだけだから、細かい礼儀作法はいらないけど、必要最低限理解して憶えるのに一日かかりました。

なんていうのか、普段使わない筋肉使うものなのね、ってというのが実感です。

領主さまの所に行くのに、いい顔をしなかったのがブランとシュルツ。留守番を命じられた彼らは、一つの腕輪…ミサンガっていった方が近いかな？…を私に渡した。

白と暗褐色の糸で編まれたそれを渡され身につけるように言われ、その通りにすると(だって怖かったんだもん。気配が)結び目が消えて、継ぎ目の無い輪の状態になった。…っていうか、この色って。

<そう、俺達の髪の毛>

当然、彼らの本来の姿は「人型」で、ブランは猫の色合いそのままに白い髪と青い瞳を持ち、シュルツは暗褐色の髪と瞳の色を持っている。

お約束どおり、美形よね。魔族の血は侮れないわ。

しかし、髪の毛って呪いですか？

<あのなあ、いくら俺たちでも、お袋さま相手にそんな真似しねえよ>

どうだかなあ、と思考が駄々漏れなのを良いことに、ちよっとばか

り半眼つぼく相手を見る。

【我等がご母堂を感知するには、体の一部を身に付けていただくのが一番良い】

本当にそれだけだろうか…なんて、ここでは意識の奥に沈めておくけど。

「そんな魔力の強いもの身につけていたら、色々疑われるでしょ？」

【人間の魔法使いに見破られるようなへマはいたさぬ】  
この場合、どういつ反応をすべきでしょう。

<お袋さまが、俺達を早く解放したがっていることはわかっている>  
まあ、ばれているとは思いましたけど。

【我らは縛られてはおらぬが、それがご母堂の意志ならば仕方ないこと】

ごめんね。でも一介の人間には、過ぎた存在なんだよ、キミタチは。だから、それは保険だよ。お袋さまの身に何かあったら、すぐに俺達にわかるように、ってね>

いつの間に仲良しさん？

【ご母堂がいらっしやらなければ、馴れ合いはせぬ】  
<「仲良し」「じゃねーし」>

心底嫌そうな二人に思わず笑みが漏れる。

「ありがとう」

人型に戻った二人の複雑そうな笑みが返って来た。

当日、やたら立派な馬車が迎えに来た。馬車なんて初めてだわ、どつちの世界でも。

心配そうなブランとシュルツを軽くひとなでして、乗り込むと思わず啞然としてしまった。

…なんだ、これは。

馬車の中というより、小型の応接室。

ふかふかのソファにクッション。流石にテーブルはないけど、椅子と椅子の間は充分広く、優に5、6人は座れる造りになっている。

「これに一人で乗れ、と」

着替えや化粧なんかは領主館でやってくれるとの事だったので、着替えが入った包み一つ持ってきただけです。

こんな広いスペースありません。いっその事、騎士さんの馬に同乗する程度で充分です。

広いスペースがあるのに隅っこに座ってしまうのは庶民の気質かもしれない。漸く付いたお屋敷で御者さんが扉を開けてくださったのですが、ちよつと驚いて 次いで一瞬下を向いて肩を震わせたのは気のせいではないと思います。

はっ。言葉使いまで妙な方向に走ってしまいそうになったわ。

裏口、というか勝手口で出迎えてくれたメイドさんに案内されて…案内されなきゃ迷うわね、広すぎて…入った部屋にまたのけぞる。

えーと、えーと、えーと。

案内してくれたメイドさんが去って軽く十数分。ただぼーっと立っているしかありませんでした。

コンコン。  
びくう。

振り返ると、さっきのメイドさんとは別の女の子が私に気が付いて腰を折る。いや、なぜワタクシにっ!?

そのまま、じっとしているからクビを傾げてはっとする、もしや、これはギルドで習った、マナーの一つですかっ!?

「どうぞ、顔を上げてください」

おずおずと声を掛けると、明らかにほっとした様子でメイドさんが顔を上げる。ごめんなさい、あの体勢はきついですね。

「失礼しました歌姫さま。本日お仕度とお世話をさせていただく、エイダと申します」

「リーリアです。よろしくお願いします」

慌てて頭を下げる。すると焦った様子で「どうか、お顔を上げてくださいつ」と返って来た。

思わずお互い顔を見合わせて笑いあう。うん、こんな感じのほうがよっぽど楽だ。

「え、とエイダさん」

「どうぞ、エイダとおよび下さい、リーリアさま」

「そんな、私のような者に尊称をつけないでください」

「いいえ、リーリアさまは御領主さまが招かれたお方、礼をつくすのが当然でございます」

慣れていないんです、しかも娘と年の変わらないお嬢さんに、こんな風に扱ってもらうなんて。いや、それ以前に領主さまのお屋敷で客室担当で働いているのなら、相応の身分だと思っただよね。使用

人の躰が行き届いているんだな、と感心してしまった。どんな立場であれ、ホスト側は招いた相手に最善を尽くす。案内してくれたメイドさんも、ここに連れてきてくれた御者さんも対応がとて丁寧だった事を思い出して納得する。それがこの領主のやり方を表しているのなら私が旅を始めるのに、この地を選んだレンやレギオンの気持ちがよく解る。

行き過ぎた過保護っぷりに母は涙が出てきますよ、息子たちや。兎も角、ここは私が折れるしかないですね。

「あの、エイダ？御領主さまに招かれてはいますが、私はここに歌を歌いに来た者。このような立派なお部屋に通していただけのような身分ではないので、なにかの間違いではないのですか？」

「いいえ、リーリアさまのお部屋はここで間違いありませんわ」  
まだ時間があるからと、軽食とお茶を用意してくれながら、エイダは笑顔を見せた。

そう、この部屋やたら広いのだ。ヘタすれば住んでいた家の一階半分は楽に入るんじゃないかと思うくらい。

ちなみに、二世帯住宅で6LDK+の持ち家だったからね。田舎だから、これくらい普通だったけど、都会からきた友人は「なんつー広い家だ」って感心していたから。

貴賤を問わず、ってやつですか？獣人保護のお国柄だからね、流石っていえば、流石だよな。

とりあえず、仕度に当たってお風呂は一人で入らせてもらいました。いやいや、いくら自分の体じゃないとはいえ、恥ずかしいですよ、はい。

自分の体じゃない…か。

この姿形になって、一番初めに思ったことが、自分が来たことでリーリアという存在をどこかにやってしまったんじゃないかと、いうこと。

でも、それはレンとレギオンによって否定された。

元々、この世界にはリーリアという存在は無かったのだそうだ。それが、私という魂を引っ張り込んだ時点で、それが作り上げられてしまったのだ。

簡単に言ってしまうえば、リーリアという存在はでっち上げられたモノ、だということだ。

旅の一座に拾われ、育てられた彼女は、当然どこの国においても出生証明は無い。これは、芸人にはよくあることで、国によっては「戸籍」なんてものも存在しない場所があるから、不思議でもなんでも無い。

彼女が一人立ちする最大の理由になった一座の解散も、きちんと調べれば、抜けた花形役者も、病気になった親方という存在も無い。

ただ、そういう理由があつて解散した一座が居たという認識のみギルド側にあるだけなのだ。

ギルドもわざわざそんな事実確認はしないし、この世界ではたまに起こっていることなので、誰も不審に思わないらしい。

なんらかの力は働いているんだろうけれど、私も敢えて突っ込むことはしなかった。

そんなことをつらつらと考えている内に仕度が出来上がった。

いやー、エイダさん、貴女はプロです、凄いです。

アクセサリーも何も持たない私に、笑顔で「ご心配なく」と言った通り。



髪には、どこで調達してきたのか、小ぶりの花が挿され、襟元は結った髪の毛の先を片側に下ろすことで寂しさをなくし。

化粧においては、向こうの世界で充分プロとしてやっていきますよ、的な腕前で。

鏡を見て、リーリアってこんな美人キャラだったんだ。と感心してしまった。

こんな風にやってもらって、何かお礼をと言ったら、「仕事ですから」と笑顔で返してくれた後、思い切ったように口にした台詞に私は笑顔を返した。

短くて良いから何か一曲、のリクエストに返したのは天空の城の主題歌。

ノックの音にエイダが我に返る。

慌てて、扉に向おうとした彼女を引き止めるとハンカチを差し出した。

え？という顔をして居る彼女の頬をそつと拭く。

私の歌ごときで泣いてくれるなんて、歌手冥利につきるけど、それで外に出るのは止めて下さい。あらぬ誤解を生み出しそうでイヤです。

自分で驚いていたみたいだったけど、「はい、暫くお待ちください」と、外に声を掛けながら、身づくろいをして、顔を整えると、扉を開ける。

現れたのは一人の美丈夫。彼を見て、少し驚いた表情をした彼女だったがすぐに腰を落す。…それなりの相手なのかな？

私も倣って礼を取った。

「どうか、楽になさってください」

おお、声もお素敵ですね、おにーさん。顔を上げると、略式ながら、騎士の礼をした彼は笑顔を見せた。

「ランスーリン・レックスと申します。本日のエスコート役を仰せつかりました。騎士隊の副隊長を勤めています」

このおにーさんがカレンさんオススメの副隊長さんね。確かにイイトコだわ。…個人的な好みからは外れるけどさ。

しかし、また偉いさんを寄越して下さったものですね。

「お世話をおかけいたします。リーリアと申します。よろしくお願

いたします」

差し出された手に、自分の手を重ねた。すると、後ろから声を掛けられ振り返ると、エイダが興奮した面持ちで近寄ってきた。

「素敵でした！機会があったら、お店に伺いたいです！」

ありがたけれど、それはちよつと辞めておいたほうが良いかと思う。少なくとも若い娘さんが来る場所じゃないしね。

困惑した私に気が付いたのか、副隊長さんも苦笑いを見せると彼女に視線を向ける。

「機会があれば、ロニかりチャードに連れて行ってもらいなさい。

質は悪くないが、女子供が一人で行く場所ではない」

「あ、は、はい。レックス様。失礼いたしました」

その様子を微笑ましく思ってみていると、さりげなく手が腕に回される。廊下に出て扉が閉まる音が聞こえると、物言いたげな視線にぶつかった。

「喉慣らしに付き合っていたいたのです」

にっこり笑顔を見せれば、「ああ」との声と共に、柔らかな笑顔が返ってきた。

「それは、私もご相伴に預かりたかったです」

金髪碧眼。王子様の容貌の持ち主が、そんな笑顔で言えば、たいいていの女性はクラツとくるだろうね。っていうか、自分の顔をちゃんとしていて、どういう風に使えばいいか解って使い分けているタイプだわ。…しつこいようだが、好みじゃないけど。

「ありがとうございます。よろしければ店においでください」

いつまでいるか分からないけどさ。なんて言葉は出さずに営業スマイル。ごめんね、坊やの笑顔に赤面できるほど若くは無いのだよ、おばさんだから。

それに、レンやレギオン、ブランやシユルツを見るからね。美形

さんはもうお腹一杯ってカンジ？

ちよつとブライド傷つけちゃったかな？一瞬眉がよるけど、すぐに綺麗に戻して笑顔を見せる。…上っ面だけの、ね。

いい性格してるよ、おにいさん。流石副隊長さまってね。その黒そんな性格上の子のツボだわ。でも、顔があの子の好みでもないから、残念。

暫く歩くと重厚ないかにも、って扉の前に着いた。両側には騎士さんが控え、副隊長さんに礼を取る。

さて、本番ね。姿勢を正し、前を見る。ふと視線を感じて顔を向けると、副隊長さんの驚いた顔に出合った。えーとなんででしょうか？次に副隊長さんが見せた表情は、私よりも両側の騎士さんたちが固まった。

いや、気持ちは判ります。反則ですよこれは。

「ランスーリン・レックス。歌姫リーリア殿をお連れいたしました」  
良く通る声に、騎士さんたちが我に返って扉をあけた。副隊長さんの表情はすでに真面目な業務顔になっている。…いかん、私も気を引き締めなきゃ。

広間はすでに歓談中の様子だった、言葉と共に自然一部の人たちがわれて、通れるようになる。副隊長さんに手を引かれ進み出る。すぐに離され、私はその場にゆっくりと腰を折った。

「ようこそお出でになった、歌姫殿。顔を上げられよ」

この国の上流階級のマナーの第一は、身分の高い人からしか声を掛けちゃ駄目だということ。礼を取ったときは、相手から許しがあるまでそのままの体勢をしていなきゃいけないということだ。

正直中途半端なこの体勢はなれない身としてはちよつときつい。

「そなたの評判は耳に届いている。異国の歌を歌われるとか。今宵

我らの耳を楽しませてもらいたい」

顔を上げた先はナイスミドルなおじさま。学者風の風貌に穏やかな笑顔。

うん、評判どおりの立派な領主様だ。目下のものにも気遣いを忘れない。上に立つものとして、見習ってもらいたいものです社長。…  
いかん、つい、ね。

「お耳汚しではありますが、楽しんでいただければ幸いです。ごさいます」

猫を被るのは得意さ。御領主さまが微笑んで合図を送られる。軽く腰を折り姿勢をただす。…わりとアットホームなパーティーね。身近な人たちを集めた、気の置けない雰囲気だ。漂っている。

口にのせるは「喜びの歌」。和訳の歌を歌う。正直ドイツ語の原詩の方が好きだけど、どう訳されるか分からないから、これでいいかな。…

しかし、合唱曲をソロで、アカペラで歌うって辛い。…これは、あの迫力で歌うべき歌だ。選曲誤ったかな？

歌い終わって腰を折る。…反応が無い、やっぱり選曲間違ったかな？なんて、思っていたら…。

大きなよめきと共に巻き起こる拍車。え？思わず礼儀を忘れて頭を上げそうになった…やば。

「見事だ歌姫殿」

興奮した声に顔を上げると、満面の笑顔の御領主さま。

「宮廷で多くの歌い手達の歌を聴いたが、このような素晴らしい歌は初めてだ！さあ、次はどのような歌を奏でくれる？」

表裏の無い真っ直ぐな賞賛。本当にいい御領主さまだ。この辺りの人たちは幸せだなあ。

再び礼を取り私は歌い始めた。ちよつと趣を変えて「メモリー」。

子供にねだられて東京まで見に行った劇団「四季」のミュージカル。  
…良かったなあ。

請われるままに10曲ほど歌って、流石に喉に違和感を感じ始めた。喉に手をやる私に気が付いてか、御領主さまが、笑顔でお客様がたへ視線を送った。

「これ以上歌わせては歌姫殿に差し障る。次を最後にしたいが如何かな」

どこか不満そうな気配はあったが、ホストの言葉に異を唱える人も無く、視線で合図され私は腰を折った。

歌うは我が国家。向こうでは賛否両論ある歌だけど、私にとっては小さい頃から馴染みのある歌で嫌いな歌じゃない。

ただ、向こうの自分じゃ、広い音域が取れなくて歌うのに苦労したけれど。

意味の取り扱いが難しい歌だけど、君主制国家なら嫌がられる歌ではない、と踏んで歌う。思った以上に良好な反応でほっとして、最後の挨拶とばかりに腰を折った。

これで、今夜の私の仕事は終了…のはずだった。

「見事であった。今宵集まるは、我が親しき友人ばかりだ、そなたも遠慮せず楽しむがいい」

頭の上から降ってくる御領主さまの言葉に固まる。え？これで終わりじゃなかったの？

目の前の相手が去っていくと同時に、横に気配が現れる。「楽にされよ」この声は副隊長さんだった。相変わらず柔らかな笑顔を貼り付けていらっしやる。

「こちらへ」

差し出された手を無視するわけにもいかず、付いていくと上手く人垣をよけて、隅の料理や飲み物が置いてある場所へと連れて行ってくれた。

「どうぞ。疲れたでしょう？」

差し出された椅子に、頭を下げ腰を降ろした。なれない格好と場所です。思ったよりも疲労を感じていることに座った途端気が付く。

すると目の前に、薄いピンク色の飲み物が差し出された。

「赤蜜柑の果汁を水で割ったものだ。アルコールは入っていない」  
「おや？言葉使いが普通になりましたね。確かにそのほうが楽ですから私としては助かりますけど。」

「ありがとうございます」

「いや、俺こそ良い耳の保養をさせてもらった」

「ありがとうございます」

別の意味を込めて再度礼を言う。：うん、完全に言葉使いくだけてるね。俺だつてさ。一応公式の場所でしょう？いいのかな？」

周囲の女性人がちらちらこちらを見る。気持ちは凄く解るよ。解るから、このお兄さん連れ出してくれと嬉しいのだけど。

そんな私の思惑に気が付いたのか、副隊長さんがくすり、と笑う。何ていうのか、悪戯っ子の笑み。お嬢さんたちの気配がざわつく。きっと彼女達にはフィルター越しの笑顔が映ったに違いない。

「悪いが、暫く軒先を借りる」

「後で宿に物騒なものが届かなければ」

意味を瞬時に理解して思わず返してしまった。うわ、やつちゃったよ自分。時々考えなしに言葉を発して、仲のいい取引先さんに笑われていたからな。あくまで一部限定で、それを許容してくれる相手



にのみ、だっただけだ。

顔を上げると、先程と同じように驚いた表情。次いで笑顔。騎士さん同様、お嬢さんたちも固まっちゃったよ。ホント変なもの届けないでくださいね。

「驚いた。…頭の回転が早いのだな」

こくり、と果汁割りを口にする。あ、美味しい、これ。でも赤蜜柑なんて初めて聞いたな。

「北の国の特産物だ。暑さに弱く、ここまで運ぶと大半が腐ってしまふ。市に出回るほどの量はないから、珍しかろう」

顔に出たのか、副隊長さんが説明してくれた。成る程、流石御領主さまのお屋敷ですね。

「不思議な韻律の歌だな」

「すでに無くなって久しい遠い国の歌です。教えてくれた人も今はヒースキングダムの住人です」

亡くなった人のことをこういう言い回しをすることがある、と教えてくれたのはシュルツだ。似たような言い方ならあちらにもあった。

「そうか。生まれは？」

尋問ですか？旦那。いいですけど。

「父の顔も母の顔も存じません」

「…そうか」

それきり口を閉ざす。騎士隊の副隊長という役職は伊達じゃないね。気遣いもお上手。…だから、さっきから睨んでいるお嬢さんたちのほうに戻ってこないかな？

「雨宿りは、雨がやむまで、もしくは小雨になるまでと相場が決まっている」

「雨脚が緩まなければ、諦めるといふ選択肢もありますが？」

…こいつは。人の猫をはがすのが趣味なのか？

実に楽しそうな笑顔を向けてくれる。いや、心臓に悪いから、その笑顔辞めてくれ。…別の意味で。

気が付くと音楽が流れてきた。三々五々、パートナーが居る人はダンスを踊り始める。いいねえ、宮廷円舞。

「踊れるか？」

「一般庶民にお聞きにならないでください」

もう猫を被るのは諦めました。それより、ちらちら此方を伺うお嬢様たちの元に行ってください、ってば。マナーとして男性からしか誘っちゃ駄目だから、視線で訴えるしかないでしょう？可哀想じゃありませんか。

「鍛えているから、多少踏まれても構わないが？」

…わざとだ。こいつ絶対わざとだ。

「リーライ」

え？と顔を上げる。副隊長さんが礼を取るといふことは相応の人物かな？グラスを置き、腰を折るとくすくすと笑いが返ってきた。

「私にまで礼を取ることには無いよ。ブランとシュルツは元気かな？」

あ、と心の中で呟く。そうか、この方がそうなんだ。

「はい、ご無沙汰しております。フランドル様。二人とも元気になっています」

につこり笑って顔を上げる。視線で副隊長さんにも元に戻るように促して、彼は再び私の方に顔を向けた。

…なんで、この世界には、こつ無駄に美形が多いんだ？

断っておくけど、美形ばかりを周囲に置くのって私の趣味じゃないからね。

フランドル公。カースティア・フランドル。

隣国グランドの宮廷魔道師で、確か伯爵位。表向きのプランとシユルツの飼い主。

シユルツの既知の人物で、魔力のあまり高くない私が二匹もの使い魔を連れている時の言い訳として名前を貸してくれた人だ。

しかし、想像以上に若い。もっとお年を召した方だと思っていたから、正直吃驚だ。

「申し訳ございません。こちらにお出でになつているとは存じませんで、ご挨拶が遅れました」

「構わないよ。私も今日着いたばかりだからね。明日にでも連絡しようと思つていたところだ」

薄い青み掛かった白い髪と、それよりも少し濃い蒼い瞳。美丈夫二人に囲まれるつて、心臓に悪いです。

「リーリイは私が相手をするから問題ないよ。君はお嬢さんたちの相手をして差し上げなさい。先程から視線で焼き殺されそうだ」

結構はつきりとモノをいう人だな。流石に一瞬ひるんだ副隊長さんだったけど、静かに礼を取ると、私に「また後で」と囁いて去つて行った。でも、お嬢さんたちの居る場所ではなく、御領主さまの方に向う辺り…なんだかなあ、つて気がする。

後でつて、確かに案内してもらわなきゃ帰れないけど、別に他の騎士さんでも良いです。つていうか、そつちを希望します。

「あれも融通が利かないねえ」

「そうなんですか？」

首を傾げる私に、フランドル公は苦笑を見せる。

「隊長のアレスに比べると、だね。あの容姿だろう？女性が放っておかないが『氷の貴公子』と呼ばれているよ。部下や侍女達には穏やかな人物と評されているけどね」

「…猫かぶり」

慌てて手で口を覆う。目を見開いた公は、次の瞬間思いつ切り笑い出した。周囲の人たちが何事かとこちらを向く。それに、笑いながらなんでもないと首を振ると、彼は私の方に顔を向けた。

「珍しくシユルツが頼みごとをしてくるから、どんな相手かと思っただが、面白いお嬢さんだ」

「お恥ずかしいです。公の場で失礼しました」

「いやいや、構わないさ」

くすくすと未だ笑いが収まらない彼に、私も苦笑が浮かぶ。と、おや？と目を見開き、私の腕を取った。

「これは、護りの腕輪だね。ご丁寧に魔力を隠す術を施してある。もう片方はブランの髪の毛かな？」

「過保護なんです。私が世間知らずなので」

ふわり、とフランドル公の笑顔が変わった。穏やかで優しい笑み。

「いいんじゃないかな？あれも『主殿』以外はなかなか目を向けない奴だから、キミのような存在が居てくれて私としては嬉しいよ」  
「すみません、その主がらみです。とは流石にいえなくて、曖昧に笑ってみせる。日本人のお家芸だね。」

と、フランドル公が私の腕を持ち上げ、腕輪に軽く唇を落とした。呆気を取られている私と、周囲から「きゃー」と声が聞こえた。何の罰ゲームですか、これ。色々感覚が麻痺して来そうですが。

「これで、シユルツにも私の事が知れたはずだ。ついでに私の護りも付加しておいた。グラウンドに来たら寄りなさい。それを見せれば、王宮はフリーパスだから」

あー、その拒否権は。

「無いね」

誤魔化しもしませんでした。表情呼んで返事をするのもどうかと思いません。

「途中退出は可能でしょうか？」

疲れた、本当に疲れた。早く宿に帰りたいです。

「そうだね。あまり褒められることではないけれど、キミは歌を披露しに来ただけだから…待っていなさい。私が領主に言っ来て上げよう」

「お手数をおかけします」

ぺこり、と頭を下げる。そんな私の頭を「よしよし」と撫でて、公が御領主の方へ向った。えっと、私って幾つに見えますか？

本当は目上のヒトを使い立てるなんて、マナー違反も甚だしいが、この際大目に見てもらおう。

ほう、と息をついて腰を降ろそうとしたら、今まで向こうに居た集団がこっちに向ってくる。…お嬢さんたちの集団じゃなくて良かった、などと不遜なことを考えながら礼を取ると、一番年上の人が楽にするよう声を掛けてくれる。

ありがたいです。ギルドの講師の人の話じゃ、たちの悪い貴族だと話が終わるまでそのままの体勢を取らせる事もあるそう…正直中腰はきついです、はい。

「フランドル公と知り合いかね？」

「はい、以前別荘にお招きいただき、歌を披露させていただきました。その時からのご縁で、グランドへ行くたびにご挨拶させていただいております」

予め決めてあった話を相手にする。遠まわしに、有力者の「お気に入り」と言っておけば、面倒ごとが多少減る、とブランが設定したのだ。当然フランドル公も了承済み。よく、名前や権力を貸してくれたな、と感心していたけど会ってみて解った：面白がっているわ、アノヒト。

「気難しい公のあのようなお顔は初めて見た。よほど親しいと見えるな」

さつきとは別のオジサマが、意味ありげな笑いを浮かべて口にする。周囲が眉をひそめるが止めない辺り、この親父のセクハラ発言は日常茶飯事か。しかも、それなりに地位もある。

「もったいないお話でございます」

しおらしい態度で否定も肯定もしない。おっさんの笑いが下卑たものになる。品位をうたがわれますぜ。いや、もう周囲が諦めているかんじだね。

「ならば、我が屋敷にもぜひ立ち寄ってほしいものだ」

そうきましたか、さてどう断ろうか。

「ご歓談中失礼いたします」

…ひよっとしてタイミング見計らっていましたか？

「歌姫殿を御領主がお呼びです。よろしいでしょうか？」

ホスト側の要請なら断れないよな。腰を折って差し出された腕に手を置くと、流れるような動作で副隊長さんが動きだした。後ろで舌打ちする音が聞こえたけど…いいのか、こんな場所でそんな態度と

つて。

「ありがとうございます。助かりました」

「どうやって切り抜けるか見たくもあつたがな」

この悪党。

御領主から退室の許可を頂いて、公から「また」とのお言葉を頂いて、副隊長さんに案内されて、控え室に戻る。

これで、もう帰れるかな？

「もう、夜も遅い。宿には連絡してあるから、今宵はここで休んでいかれるといい、との御領主のお言葉です」

ずっと控えていてくれたのか、予め連絡が入れてあつたのか、エイダが笑顔で迎えてくれた。

彼女の手前、副隊長さんの言葉使いが余所行きに戻っている。

∴ 正直宿に戻りたいけど、仕方がないですね。

「鍵はきちんとかけて置くように。どこの不埒者が忍んで来るとも限らないからな」

こっそりと耳元で囁かれる言葉に、思わず眉を寄せた。

その不埒者に貴方も込みなら、鍵と同時に結界も施したい気分です。



ようやく戻ってくれましたよ。

あの後何事も無く。… あったとしても、私が知らないだけかもしれない。エイダの話じゃ、廊下側と窓の下に警備の騎士さんが立っていてくれたらしいから。

それが、副隊長さんの指示か、フランドル公のお陰かは解らないけど、無事宿に到着です。

女将さんやご主人が笑顔で迎えてくれました。あーほっとする。でも、あんなおっさんが居る以上、そろそろ去り時かしらねえ。二人の相談すると、すぐに賛同される。

<俺達と一緒になら心配ないと思うけど、別の厄介ごとが起きそうだしな>

【確かに。原因の一端にフランドルがあるなら、あやつに同行して、グラランドに向う手もあるう】

うーん。でも昨日来たばかり、ということは何か別目的があったの事だろうし。ロウエンにある大使館、というか領事館みたいな所にいらっしやるから、そこにお世話になるのもなあ…身の置き場としてはこの上ない安全な場所だろうケド、気詰まりだし。

それに…。

「シェロンの王都っていうのを視てみたいんだよね。玄関口でこれだけしっかりしているなら、王都も一見の価値があると思うのよ」

<シェロンの王都。悪くはないな。ここほどではないけどさ>

おや？とブランをみると、耳を少し伏せている。この姿で、困ったときに彼が良く見せる姿だ。

<大きな街だから、ここほど目が行き届いていないっていうか、当然「影」の部分もあるってことさ。まあ、この大陸のなかじゃ治安はいいほうだから、次の目的地としてはいいと思うぜ？>

最初に一番安全な場所に来たからね。仕方ないといえば仕方ないかな？なんといつても、元居た場所が、治安国家日本。世界でも有数な「安全な」国だったもんね。それでも、裏に回れば色々あったけどさ。

【しかし、その男が中央よりの人物であれば却って危ないのではないか？】

シウルツの懸念ももつともだ。あ、そうだ。

「仕事しなきゃいいのよ。休暇つて事にして。そうしたら、気付かれずに済むじゃん？私としては『王都』を見たいだけだし」

観光しましょう、観光。

<ほんと、ふざけはた性格。でも、まあ、一理あるな>

【左様。ところでブラン、王都に『ツテ』は？】

<あるぜ？レギオンさまもご存知の魔族が一人住んでいる>

【ああ、アレか。私の『ツテ』と同じだな】

…だから、過保護が過ぎるんだけど。あ、そうだ。

「報酬を受け取りにギルドに行ってくる。ついでに護衛雇ってくるわ」

<お袋さま！？> 【ご母堂！？】

「こつちのやり方も学ばなきゃいけないのよ？貴方たちが居る間に、ね」

私の言葉に黙ってしまった二人。思わず勝った！と内心ガツッポーズ。

呆れたような溜息が返って来る。そういえば、表層意識読めるんだっけ。あはは。

<俺達も行く。相手を見定めてから決める。いいよな？>

…拒否権はありそうにないですね。なんだか、こんな展開ばかり。

ギルドに行つて、紹介された護衛は一組のご夫婦だった。丁度彼らも王都に用があつていくので、通常より割り引いてもらえるとの事。それはいいけど…いや、しかし。

「よろしくね。噂は聞いているわ。旅の間に歌を歌つてくれると嬉しい」

そういう奥様は、年はリーリアより7つ上の23歳、だそうだけど見えない…せいぜい変わらないか、下に見える。しかも、すっごく華奢で折れそうなくらいの肢体の持ち主。

それに反比例するかのようにご主人は…一言で言えば「熊さん」。縦にも横にも大きい。そして、奥様と同じ年だそうだ。

ごめんなさい、奥様と別の意味で見えません。ええ、旦那と同じくらいに見えました。親子だといわれても少しも疑いません。

ちなみに、家の旦那（と、いつて良いのか疑問だけど）は、最近50の大台を超えたところだけど、わりと若く見られがちで、40前と思われているらしい。実年齢を言えば「本当ですか？」と結構な確立で尋ねられていた。

私？20を超えた女性に年齢を聞いちゃいけません。とりあえず、今は16ってね。

それよりももつと驚いたのは、こんな華奢な奥様が剣士で、旦那様が魔法使いだってこと。しかも、この奥様、自分の身長ほどの大剣を易々と操るそう。普段はご主人が背負っているの、外見的には彼が剣士に見えるけど。

二人ともランクは特A。冒険者のクラス分けは、こなした依頼の数と難易度によって、特S、SS、S、特A以下同様のパターンでFクラスまである。初心者はこのFから始めるのだけど、それを考えると凄い人たちだ。

しかし、こんな人たちが都合よく王都に行くタイミングで現れるなんて、…まさか、あの馬鹿息子たち、ご都合主義のスキルをカミサマ権限で発動させたんじゃないでしょうね？確かに人間への干渉はできないようになってるけど、それではカミサマとしての存在意義に関わるから、抜け道はいくつか用意してあったりする。「ご都合主義」もその一つだけ。ちらり、とブラン達を横目で見ると、二人とも視線を逸らす…やっぱりか。

「え〜と、あの、問題あり？使い魔なら、私達動物好きだから大丈夫だよ？」

心配そうに声を掛けてくれる奥様。レーエンさんとおっしゃるのだけど、彼女にいいえ、と首を振った。

「こんな高いランクのお二人に、本当にこんな金額で良いのかと…申し訳なくて」

「そんなこと！」と、レーエンさんは目一杯の笑顔で応えてくれた。「丁度王都に戻るタイミングで依頼の話聞いたから問題ないわよ。どっちにしても行く事になっているから、こつちこそ宿代や食事を代わしてもらっただけでも充分だわ。でも、そつちこそ良いのかしら？言っちゃあなんだけど、食費かさむわよ、私もカレも食べるからあー。それは聞いています。冒険者ギルドの担当者さんが事前に説

明してくれました。ええ、確かに、かかる費用はAランク一人雇うのと変わりません。でも、ご夫婦っていうのがポイントです。…でなきゃ、過保護二人が許してくれませんし、なによりスキル発動してまで動いてくれる孝行息子に悪いですから。

「よろしくお願いします。それじゃあ、明日の朝」

「ええ、貴女の宿まで迎えに行くわ、よろしくね」

にっこり笑顔で握手して、ギルドの契約書にサインして。

契約終了。

せつかくだからご挨拶しようとして、渋るブランとシュルツを連れて、グランドの領事館に来ると、丁度視察が終わってフランドル公が戻っていらつしやるとの事。最初は渋っていた門番の人だったが、腕輪を見せた途端、態度が豹変した。…一体どんな魔法をかけたんだ？公。

満面の笑顔で出迎えてくださった公は、お茶を出しに来たメイドさんを下からせると、部屋に結界を張った。気が付くと本来の姿に戻った、ブランとシュルツが私の両側に座っている。

「久しぶりですね、シュルツ。それにブランも元気そうで何よりです」

「どうして、てめーがこんな時期にこの国にいるんだよ」

…あー、一応隣国のお偉いさんだから、言葉使い改めようね。

「構わぬよ、リーリア。彼はフランドルに対していつもこのようなものだ」

そうですか、はい。相変わらず表層意識を読んで答えるのは辞めてください。名前で呼ばれるなんて初めてだわね。まあ、「お袋さま」とか「ご母堂」なんていえないわよね。

茶を口にする。…色と香りで「おや？」と思っただけど、これ、緑茶？

「如何です？リーリイ。わが国特産の『リヨクチャ』です。変わっているでしょう」

「あ、はい。美味しいです」

いい茶葉を使っただけ。出す温度も丁度いい…けど、ティ

「カップですか。あはははは。」

「よろしければお帰りになるときに差し上げますよ?」

「嬉しいです。ありがとうございます」

これは本音。まさか、この世界でお茶を飲めるとは思わなかった。

…日本人よね、我ながら。

「なに、物でリーリアを懐柔しているんだよ?てか、何だよ、そのリーリイって」

「可愛らしいでしょう?」

にこにこにこと笑う公に、良い様に遊ばれているわね、ブラン。シユルツは達観したように黙ってそれを見ている。

「シユルツ、一つ聞いてもいいかな?君達は、何故それほどに彼女に執着する?」

「面白いから、だろうな」

え?はい?はい?!

「見ていて飽きぬ。考え方も独特で面白い。そうは思わぬか?カーステイア」

「……確かに。公の場所で私を大笑いさせたものなど今まで居なかったからね」

そこですか?そこなんですか?

「だろ?おもしろーよな。考えていること丸解りなのに、次に何が飛び出するか、何をしでかすか、わっからねえ」

…こいつら、人が黙って聞いていれば。

「ほう」

我ながら底辺を這う声とはこういうものだと感じる。声は違うが、旦那に対して本気で怒ったときの声音と一緒のモノ。

「皆様、ワタクシのことを、そんな風に思っただらうしやっただらうはつと、三人の視線があつまる。特に、ブランとシュルツは私が懐から取り出した「音叉」を見て顔色を変えた。

「おふ…リーリア、悪い！悪かった！今のは冗談だつて」

「もちろんです、我が貴女をそのように思っているなど…！」

「リーリイ？それは何だね？」

事情を知らないフランドル公が、それを見て不思議そうに首を傾げる。

「ばつ、馬鹿野郎！」

「…ほう、『馬鹿』ですか？」

「いや！違う！今のはフランドルに言った台詞で…つて、おい」  
軽く音叉をテーブルで叩く。唯一の魔法は、微弱な私の魔力でも扱えるように、別の工夫がされていた。

唯一ゆえに、最凶をミルドレンから。最強をレギオンから。…普通逆だと思っけど。

ぴきり、という音と共に、あっけなく結界は消え去り、ブランとシュルツは吹っ飛ばされた。そこに新たに現れた『魔族』によって。

「ヴィダ…」

「戻れ」

「ばちん、と指を鳴らせば、ブランとシュルツの姿が消える。ものすごい音に慌てた人の気配が近づいてくるが、彼は息を吸うのと同じ動作で結界を張りなおし「大事無い。下がれ」とフランドル公の声色で領事館の人たちを下がらせた。



「初めから我を選べば良かったものを」

「それだと被害が大きくなりますでしょう?」

あの二人は、本来の主の前に強制送還。…理由を聞かされこつてり絞られる事でしょう。

「リーリイ…彼は…まさか」

「見えるのは初めてか。フランドル。我が、この娘の本来の守護者、あの二人を使わしたものだ」

ヴィダ。ヴィヴィディダ。創造の時より存在する、最強で最凶の魔族。レンの腹心であり、レギオンの片腕…なんで、こんな設定のまままかり通って存在しているんだろう、こいつ。古いキャラだから、愛着は深いけどね。

しかし、間違つては居ませんけどね。本当の事は言えませんし、ヴィダが私の守護者っていうのも嘘じゃない。けどまさか、最強で最凶の魔族を引き連れて歩くわけにはいかないでしょう?だから、初めにレンに言われたとき、丁重にお断り申し上げたら、折衷案としてレギオンが持ち出したのが、この『音叉』で彼を呼び出す方法。叩き方をいつもと逆にすれば、それが呼び出しの音となる。

ちなみに、近くに叩くものが無ければ指で弾くのも可、だ。私以外には鳴らせないような仕組みにもなっている。

「心せよ、フランドル。この娘には我が付く」

そつといい残すと、彼は現れたときとは真逆に音もなく消えていった。どさり、と音を立てて公がソファに沈み込む。すみませんねえ、お騒がせして。まあ、お陰様で溜飲は下がりましたが。

にっこりと笑顔を見せれば、大きく息を吐いたフランドル公は、気分を落ち着かせるためか、いい加減冷め切ったお茶を一息で飲み干

した。

「勉強させてもらったよ。キミを本気で怒らせてはいけない、とね」  
流石というべきか、訊きたい事は山ほどあるだろうが、それを全て  
呑み込んで彼が言ったのはその一言だけだった。

いえ、私とてそうそう呼び出しませんよ…色々面倒ですもん。

えーと、これはどういう事でしょう。

時間になったので下に降りていったら、酒場は騎士隊のほぼ貸しきり状態でした。しかも、何故かエイダまでいるし。

花を持ってきて近づいてきた彼女は、少し淋しそうに微笑んだ。

「今日が最後だと伺ったので」

花を受け取り礼を言う。…しかし、何故にそこまで情報が早い？決まったのは今日の昼ですよ？

「やあ」

につこり笑顔の男に頭が痛くなる。頬を染めている場合じゃないですよ、カレンさん。この男悪党ですから。

って言うか、情報源はこの男に違いない。直感だけどそう思ったね。

「こんばんわ、副隊長様。ようこそお出でくださいました」  
につこりと極上の笑顔を見せてやる。

「ああ、残念だな。王都に向うときいたが」

…ギルドに守秘義務を進言したくなってきたな。まあ、上層部とのパイプラインがないと色々不便だろうから、こういった情報の流失は仕方ないんだろうけれど…なんか、腹立たしい。

きっちり顔に出たんだろう、副隊長さんはくすくすと楽しそうに笑っている。

「とりあえず、今宵が最後なら我々がここにいたほうが妙なものは届かないだろう？」

あの会話憶えていたんかい！いくらなんでも、昨日の今日でそうそうそんな物騒な話になるわけないだろう！

… なんだか、歌う前から疲れた。

女将さんにいつもの果汁を貰って、定位置のカウンターの傍に立つ。今日は音叉はいらぬみたいだね。姿勢を正した途端、しん、となつた。

最初は「グリーンスリーブス」好きな歌だけど、今日まで歌わずにいたのは何故だろう。… まあ、しんみりする歌でもあるからねえ。

ふふん、今日はサービスだ。今までの「とつとき」を歌ってあげよう。

「雲の遺跡」ボーカロイドの歌だけど、これが一番リーリアのイメージに近い歌だから。

「荒野流転」… アニメの主題歌。いいよねえ。「嘆きの歌」も捨てがたい。… オープニングの方が有名だけど。

「Wings」ゲームの挿入歌。マイナーだけど個人的に好きなんだよね。

どれもこれも、車の中で繰り返し聴いていた歌。対向車が少ないと車の中で歌っていた歌。時には長女が、次女が後部座席で歌った歌。そんな歌を続けざまに歌う。

「少し休まないか？」

コップを差し出され、見覚えのある色合いに目を見開いた。

「さつき女将さんに渡して作ってもらった。賄賂代わりに2、3個差し上げたがな」

赤蜜柑。蜜柑、というよりオレンジに近い… けど、柔らかな甘さがある味。

「ありがとうございます」  
冷えた果汁が喉に優しい。見上げると、副隊長さんの碧い瞳とぶつかった。それが、優しげに細められる。

「王都に行つてどうするんだ？」

「…？観光、ですけど？」

妙に真面目な調子で言う相手に答えると、きよとん、とした反応を返され、次いで盛大に吹き出された。

どっかの誰かと同じパターンだな、これ。

「そうか…ふ、くくっ…観光、か」

人を何だと思つているんだこの人。

「ふつきたいちょー。副隊長ばかり、リーリアさんと話してずるいつすー」

「そうですよー。リーリアは皆の歌姫なんですから、独り占めは良くないですー」

あちこちから、同様の声上がる。そうだね、最後だから皆の所へ…へ？

「今口説いている最中だから、邪魔するな」

腰に手を回され耳元で囁かれる。すぐに、周囲からブーイングが起きるけど、本人は何処吹く風で、私の腰から手を離そうとしない。

…つていうか、いつ口説かれたんです？私。

「ん？今から」

表情、読みましたね。昼間ブランに言われた失礼な言葉を思い出してむっとする。すると、頭の上からくすり、と笑われ心地のいい声が振ってきた。

でも、自分の好みの声ではないのが少し残念。ま、好みじゃ無いのは声だけじゃないですけどね。なんていうか、嫌だこの男。どうしたら、相手により効果を与えることができるのか、どうしたら自分

を良く見せる事ができるか心得ている。ナルシスト、とまでは言わないけど、苦手…いや、好きになれないタイプですな。

「どうだ？悪くはないだろう？」

なにが？と、思わず問い返しそうになって辞めた。なんか、碌でもない答えが返ってきそつだ。

「とりあえず、離していただけませんか？この体勢じゃ、歌いにくいです」

「ランスーリンだ」

へ？と顔だけ振り返れば、予想以上の至近距離に相手の顔があった。「ランスでいい。名前で呼んでくれないか？リーリア」

…殴ろうか、蹴ろうか、それとも果汁をぶっかけようか。

前者二つは、こっちの手や足が痛くなりそうなので辞めた。後者は、高い果物がもつたいないから却下。

気が付くと周囲が固唾を呑んで見守っている。…頭の上は楽しそうな気配。面白がられているのは解るけど、いい加減おねーさん…いや、おばさんも限界に近くなっているよ。

けど、ここでヴィダを呼び出す訳には行かないし…この男と二人つきりなら迷わず、呼び出していただけね。

ふと、ある歌の歌詞が頭を過ぎる。旦那が良く聴いていた、洋楽の男性デュオ。ただ、思い出したのは彼らが歌っていたアレンジ曲ではなく、その原詩。

体勢を少しずらして、につこり微笑むと副隊長さんの頬に手を当てた。驚く顔と、周囲のごくり、と喉を鳴らす声が聞こえ。

そうして、私は、静かに歌を紡ぎ出した。

歌い始めたのは、女王陛下がおわす王国に古くから伝わる歌。メロディラインこそ、かの男性デュオのものだけぞ。

私が歌ったのは英語での原詩。でも、まあ、一般的な和訳で耳に届いたようだ。

実はこの歌、男性パート、というか男性が女性に向けて三つの問いかけをして、その答えの前に女性が男性に三つの問いかけをする、という歌なのだ。

当然、私が歌ったのは女性の方だけ。流石マザーグースって感じの内容の歌である。

それを叶えてくれたら、私は貴方を真実愛するでしょう。って締めるんだけどね。正直叶えてくれても気持ち動かないと思う。

この歌の訳詩を読んだとき思ったのが「なんだ、このかぐや姫」だったんだよね。

「仏の御石の鉢」とか「蓬萊の玉の枝」「火鼠の皮衣」…無理難題を言って、叶えてくれたら相手を愛してあげるって、なんつー上から目線だよ、ってね。あのデュオの柔らかな歌声とは裏腹に、「なかなか」の曲である。遠まわしに断っているとも言つ。正直きっぱりはつきり断りたいけど、一応芸を売る身としては、TPOは心得ていなくちゃねえ、つて。

歌い終わって、につこり。いつの間にか緩んでいた腕からするりと抜けて、数歩離れて一礼。



しーん、となつた酒場に、思わず引かれちゃつたかしらん、と思つていたら、楽しいげな笑い声と共に拍手の音。振り返ると、女将さんが実に楽しそうに手を叩いていた。

「大したもんだよ、リーリア。この国広といえども『氷の貴公子』にそんな事を言うのはアンタだけさ」

すると、次々と拍手と共に「すげーぞ」とか「そつだ、他にも男はいるぞー」とか…まあ、色々声が聞こえてきた。

そして、当のご本人はというと……。

暫くすり抜けた腕を見ながら考え込んでいるようだったが、やがてにっこりと笑顔を見せた。

ナンデスカ、ソノクロサハ。

「よかるう。楽しみに待っているといい」

誰が、『氷の貴公子』ですかっ！？どこが、氷なんですかっ？

どうして、そう私にこだわるかねえ。地位といい、容姿といい、女性に不自由はしていないだろうと思うのにな。身分のない、旅芸人相手になにやっているんだか。

身分差など気にせず、想う相手を手に入れようと、あの手この手で動く主人公…ハーレクインですな。もしくは、王道系、シンデレラストーリー。

王子様とお姫様は幸せに暮らしました。めでたし、めでたし。…な、わけ無いだろうっ！

結婚する前よりしてからのほうが、一般的に人生は長いんだっ！しかも、問題は山積みなんだよお。

っていうか、私の意志は？いや、まあ、無視すればいいんだけどねでも、「待っている」ってナンですか？嫌な予感満載なんですけど。

最後だからと他にも色々歌って。

そろそろやめておいたほうが良いかな？騎士の皆様は明日もお仕事  
だろうからね。

少し考えて、歌ったのは「炎のたからもの」ご存知大怪盗の孫を名  
乗る男と仲間達の漫画原作のアニメーション。その映画の一つのテ  
ーマソング。ヒロインが可愛いんだよねえ。

歌い終わって、ドレスの端を摘み、深々と腰を折る。こっちの作法  
というより向こうの外国映画で見た動きに近い。

一応王族相手に取っていた動きだから、そんなにおかしくは無いは  
ず。

拍手と笑顔と「またこいよー」の声に、不覚にも涙が滲んだ。流石  
に、副隊長さんも何も言わないで、笑顔で拍手してくれた。

いい街だった。

息子達に心からの感謝を込めて、もう一度膝を曲げる。

ありがとう、こんな良い街に連れてきてくれて。ここだからこそ、  
私は家族を失った悲しみに囚われずに済んだ。

ありがとう。

翌朝、いつの間にか戻ってきた（大分憔悴していたけど）ブランヤ

シュルツ、レーエンさんご夫妻と共に、ロウエンを出て、王都に向  
った。

## 14 (後書き)

今回で「ロウエン」編終了です。

いつもより、若干短めですが、キリがよかったです。

## 1 (前書き)

旦那サイドです。

法要の席をそつと抜け出す。

娘達は気が付いたみたいだが、見てみぬ振りをしてくれた。

四十九日の納骨ともなれば、流石に皆落ち着いて、個人を偲びながら（偲んでいるのか、弱冠怪しいのもいるが）和やかな時間を過ごしていた。

ふと、顔を上げると抜けるような青い空。そういえば、季節の移り変わりを空の色で見て、風を感じながら天気を読む奴だったと思いつ出す。

決して出来た女房ではなかったが、俺には過ぎた女だったと思う。文句を言いながらも、子供二人を育て上げ、舅、姑の面倒を見、稼ぎの少ない俺をフォローして勤めにも出ていた。

上の娘の就職も決まり、下も職場になれて、漸く一息つける…そんな時だった。

相手は、無免許の未成年…驚くべきことに中学生だった。

悪戯に親の車に乗り、おかしいと思ったパトカーに追われ、パニックになって一方通行に入つての事故だった。

結構なスピードで走っていたにも拘らず、相手はエアバックと高級車の装甲の強さで助かり、あいつは…死んだ。

だが、少なくとも外見に大きな傷は無かった…内臓はめちやくちやだったらしいが。

パチンコに行っていた俺は、兄貴の電話にも気が付かず、もぬけの殻の家に帰って、首を傾げていた。…携帯を確かめることすらしなかったのだ。

病院に駆けつけたときには、親族の殆どが揃っていて、俺は兄貴に殴られた。

それから葬儀が終わるまでのことは良く憶えていない。

ただ、葬儀屋と義姉の言うままに動き、渡された原稿を読み上げ、ひたすら頭を下げていた。そんな記憶が微かに残っているだけだ。

我に返ったとき、俺の前には小さな骨壺と位牌があるだけだった。

会社側の規定で一週間の忌引きがあった。別に何をするわけでもないが、機械的に通帳の始末をし、あいつが勤めていた会社に挨拶をしに行き私物を受け取って…夜になると眠れないので、あいつ秘蔵の酒を飲んで酔いつぶれるようにして位牌の前で眠った。

朝になると布団がかけてあるので、誰かが掛けてくれたんだろうと、その頭の隅で考えはしたが上手く働かず、事故の後始末は義姉さんが紹介してくれた弁護士と保険屋に任せ、自分は動こうともせず、ただぼんやりと過ごしていたのだ。

幽霊とか見ないくせに、変なところで霊媒体質が遺伝した。と、あいつは苦笑いしていたが、どうやら娘達にもあるらしく、ある日突然「昨夜おかあさんがきたよ」と話し出した。

これといって、何を話したわけでもなかったらしい。「ほんと、い

つも通りのおかあさんだった」と二人は笑った。

そういえば、あの日から子供達の顔をまともに見ていないことが付いた。

「あ、おとうさんのケツ叩いといってさ」

…なんだ、それは。

「あと、人の『取っとき』呑んでって呆れていたよ」

呆れるところだろうか。流石にまずいと思って、位牌の前にコップに注いで置いておいた。まあ、最終的にほとんど俺が呑んでしまったが。

土下座して誤りに来た少年の両親を許しはしませんが「顔を上げてください」と声を掛けることが出来たのは、その話を聞いた後だった。…それまでは、会おうとも思わず、毎日親父が泣いて怒鳴って追い返していたのだった。

「なんだかんだと日常は過ぎていくんだよね」

ふいに声が聞こえ、隣に立っていたあいつは笑っていた。

「まあ、いい加減自分の面倒くらい見えるでしょう？あんまりお義母さんの手を煩わせるんじゃないわよ」

放っておくとまともに食べてない俺を何処から見ていたのか？

「俺より長生きするんじゃないのか？」

「それは、そつちが言っていただけでしょう？実際はこんなものよ」  
全く、と苦笑して法要の会場のほうに視線を移す。「姉さんね、あ



の笑い声」と、目を細めつぶやくように言った。

その視線を俺に向けると、にっこり笑って首を傾げる。

「頑張つてイイオンナ見つけてください」

「馬鹿野郎。お前が探してくれるんじゃないのか？」

「自力でなんとかしろつて、いつも言っていたでしょ」  
「変わらぬ会話。変わらぬ軽口。」

「じゃ、ね」

現れたときと同じように唐突に消えて。

子供達の呼ぶ声に我に返る。

多分、もう二度と会うことは無い。ふいに、そう思った。別れに来たのだと。

「馬鹿野郎」

小さくそう呟いて、俺は子供達のほうへ足を向けた。

…なんというか、凄い。

その一言に尽きた。

よく、漫画やアニメでは見る。あと規模は違うけど大食い選手権とか。

でも、実際に目の前でされると、言葉も無い。

次々と消えてなくなる料理。正比例して積み上げられていく空になった皿や鉢。

けれど、食べ方は綺麗。それは、動きの端々に食事に対する思いと、食材やそれを作った人への感謝を感じられるからだろう。

しかし、レーエンさん。ご主人のエルグさんは兎も角、貴女のその細っこい体のどこに、それだけの食べ物が入るんですかっ!?

大学生の頃、バイト先の先輩とお昼がかち合ったことがあった。混んでいた訳じゃないけど、顔見知り同士、なんとなく相席して一緒に食事を取ったときの衝撃に似ている。

それまで女子校育ちだった上、男兄弟にも縁が無く、兄貴代わりの幼馴染なんて、一緒に食事をする機会なんか無かったし、父も自宅に部下や友人を連れてくるタイプではなかったたので、あまり男性の食事風景を見ることが無かったからだ。

瞬く間に（あくまで印象としてだけ）消えていく料理。ゆづに自分の三倍は食べる相手に呆気に取られた記憶がある。

あまつさえ「それ、食べないのか？」と人の皿の上に乗っていたか

ら揚げを、ひよいとつまんで口にされた。

余談だけど、それがきっかけで付き合いだした。一年半くらい。向こうが就職して、会えない時間が増えていき、自然消滅した。彼の後輩で、同じバイト先の知人がずっと後で、彼女が出来たって事を教えてくれた。

心配してくれた彼女に「仕方ないよ」と笑って見せた。思ったよりシヨックじゃない自分に呆れたと同時に、やっぱりきちんと「キリ」はつけなきゃ、後味が良くないと思い知ったのもこの時だった。

今となっちゃ、いい思い出だね。

ロウエンから王都まで人の足で10日くらい。泊まる宿はお二人が定宿とされているところ。安くて美味しいご飯が食べられるそうだ。主要街道だから、整備がしっかりされているとの事だが、賊が出ないわけではない。

そして今日、初めて二人の「戦い方」を見た。

まあ、お約束通りの盗賊さん? 「さん」を付けるのも我ながらどうよ? と思いはしたけど。

エルグさんを警戒してか、やたら頭数は多い。何人かが、私とレーンさんを見て意味ありげな笑いを浮かべている。

何を考えているか凡そ見当は付いたけど。

数メートル離れた距離で頭数に物を言わせてゆっくりと包围してき

た。ブランは私の肩に乗り、シュルツが足元で威嚇の唸り声を上げる。

と、私とレーエンさんの前にエルグさんが一歩進み出た、同時に無詠唱で起きたのは風による防御の渦。低い竜巻のような風の輪の中心に私達がいる。風の勢いに押されて数人が転んだ。

「ちっ！やっちまえ！」

頭目と思われる男の声と同時に相手が動く。それより早く、レーエンさんが飛んだ。あっという間に、賊の一人の腕が落ちる。いつの間にか、彼女の腕にはさつきまでエルグさんの背中にあつた大剣が握られていた。

「なっ！」

彼女が飛び出したと同時に、エルグさんが私を後ろに庇ったまま、軽く地面を足で叩いた。

<地の防御結界か…しかも、対物理攻撃だと？>

ブランの半ば驚き半ば呆れた「声」が聞こえた。

【先程の風の結界も、威力が半分以下に抑えられていた。恐らくは賊への威嚇と、足止めであろう。本気ならば風を受けたものの殆どが無傷では住むまい】

風の力を有するシュルツには相手の力の出し加減ですら解るらしい。

そうしている間にも、レーエンさんの剣は賊を倒していく。命までは取らない…でも、あれはいつその事一思いに倒してあげたほうが相手のためかもしれない、などと不謹慎にも思ってしまった。

彼女が狙うのは利き腕か、足。完全に切り落としてしまうものもあれば、どうするのか臆の部分の部分を切っていたりもする。動きだけを見れば綺麗だと思ってしまった。舞うように彼女は動く。酷く楽しげに。

「落ち着いているのだな」

ふいに声が聞こえ顔を上げると、エルグさんの視線とぶつかった。  
…っというか、旅を初めて三日目。初めて声を聞きましたよ！

「護っていただいていいる以上、目を逸らすのは失礼に当たります。

…例え、それがどのような姿でも」

それが礼儀だ。平和な日本なら兎も角、日常茶飯事とまではいかな  
くても、これから何度でも目にするだろう。

慣れるべきではない。しかし、自分だけ目を閉じ耳を塞ぐわけには  
いかない。

その動作が、この先一人になった時自分自身を危機に晒すことに成  
りかねないから。

「若いのにたいしたものだ」

お礼を言うのも場違いな気がして曖昧に笑ってみせる。本当に便利  
だよな、日本人的この笑い方。

本音を言えば目を塞いでしまいたい。スプラッタ映画は好きじゃな  
い。いくらエルグさんが気を利かせて、魔法で血の臭いとか防いで  
くれても、生々しさは隠し切れない。

吐かずに居る自分を褒めてやりたい。悪夢には魔されそうだけど。

「いい加減、止めなくてはいかな。これ以上やると後であいつは  
酷く落ち込む」

狂戦士…ふといそんな言葉が頭に浮かんだ。賊の大半は既に戦意ど  
ころか動くことすら出来ないで居る。

私達を結界の中に残したまま、エルグさんが動いた。見ると風魔法を操り、レーエンさんの動きを封じ込めていく。

く呆れた男だ。無詠唱なのも規格はずれだが、その上二種類の魔法を同時に使うとは…知らぬものが見たら魔族と誤解されるぞ>

【あの容姿でか？】

言葉に詰まったブランだったが、今度は別の意味で黙り込んだ。

あーえー…えと、12禁？あ、いやあ、アレは十五禁くらいいくかも。

振り上げられた利き腕を易々と封じ、その後頭部に手をやり引き寄せ…ご夫婦だからね、別に良いんだけど。殺伐としたこの風景には…似合わない光景です。はい。

あー、ごちそうさまでした、まる。

なんだ、これは。

まだ日も高い、真昼間だというのに、この屋敷の周りだけ妙に薄暗く感じるのは何故だろう。

ほら、よく漫画なんかである縄目模様のおどろおどろした…あんな感じだ。

伸び放題の庭の木といい、レンガ造りの家のうらぶれ具合といい…お化け屋敷と言われても否定しないぞ的な要素が盛りだくさんだ。

って、ブランさん、そこ他所のお宅です。勝手に入っちゃいけません…って、あれ？

隙間を上手くすり抜けて中に入ったブランの姿が、本来の人型に戻っているのを見て目を見張る。

「相変わらず、妙な結界魔法使う奴だよな」

【やはり、変化の術はとけるか…仕方あるまい】  
中から門を開けて「どうぞ」的な動作をする相手に、ちよつとばかりためらいを見せてしまう。

と、いうことはナンデスカ？ワタクシの姿も元に戻る、と？

「あー、そりゃあ無い無い」

表層意識を読んで返事はやめて欲しいとお願ひしませんでしたでしょうか？

「申し訳ない。つい、変化のときと同じようにしてしまう。それはそうと、確かにご母堂が元の姿になる事は無い。この世界において、今のリーリアの姿がご母堂の姿だ」

門の中に入った為、やはり人型に戻ったシュルツが言う。しかし、人通りが無くて良かったね。

「ここをわざわざ通る物好きは居ないよ、遠回りしても別の道を通るさ。何が出てくるか解らないからな」

…もういい、好きにして。諦めました。中に入ると結界を抜ける独特の抵抗感がある…けど、あっさりと抜けられた。あれ？

「懸命なご判断だ。さて、我らの傍を離れぬよう…特に屋敷の中ではな」

「そんなにヤバイの？」

「ヤバイっていうか、ここの結界、本来の役目は中のものを外に出さない、だ。ほれ」

パチンと指を鳴らすと数メートルさきで炎が上がる。…って、アレは何？

「肉食系の虫。ヒトや獣人ならちよつと噛まれて血を吸われるくらいだけど、お袋さまに傷が付いたら、俺主に殺される」

あっちでいう「蚊」かなあ。少し位噛まれても問題は無いけど。

「あいつ、目の前で増殖するぜ？」  
へ？

「血を吸うと増える。卵とか産まなくてそうやって増えていくんだ。一度血を吸えば、二度と血は吸わないけど増殖した奴から吸われるからな。…きりが無い」

メスの蚊みたいな奴ね。あれも産卵のために血を吸うし。

「本来高い山の一部にしか居ない。ここにはそういった生き物が主の趣味で集められている」

危ない趣味の人だなあ。

「魔族だけだな。あ、来た」

家の扉を開けた途端、どたどたどたーっと、大きな足音。



「やっぱりブラン、貴方ねっ！アタシの可愛いオーエンスちゃんを焼いたのはっ！」

オーエンスちゃん？

「アレは中に居る虫や生き物一匹一匹に名前を付けている」

あ、名前をつける程度の数なんだ。

「数千は下らぬ。夜行性のもの、地中に居るもの…様々だ。代が変われば名は引き継ぐから代わり映えはせぬが」

玄関口のホール。見上げる螺旋階段。って、どこにこんな高い塔があったんだ？外から見たら、せいぜい二階建てのお屋敷だったわよ？

どたどたとーとやって来た相手を見て思わず目を見開く。美形ぞろいの魔族だつて事は知っているけど、これは、また。

「やってくる度に、アタシの可愛いコ達を焼くのは止めてって言っているでしょう？」

「だって、うぜえもん」

「うざいって、あんた…あら？」

ふわふわの栗色の髪にこぼれるような青い瞳。某乙ゲーの女王陛下二人を足して二で割るとこんな感じになりそうなタイプだ。

「まああああっ！おかあさまっ！？」

あくまで、外見は、だね。

「お初にお目にかかります。通り名キャサリンと申します！お会いできて嬉しゅうございます」

「あ、えと、こちらでは『リーリア』と言います。よろしく、ね？」  
両手を取られての至近距離。きれいな肌だなあ、とぼんやり思っていると、キャサリンは満面の笑顔を向けてきた。

「本当におかあさまですのね。こっちにいらっしやっていると存じていましたが、わざわざ来てくださるなんて。アタシ感激ですっ  
！」

あはははは、ありがとう。

「とんでもございません！まあ、アタシったら、おかあさまを立たせたままで！お待ちください！今仕度を」

「どうもこいつも人の表層意識を読み取って会話なさるのね。」

「ちよいまで、キャシー」

擬音効果があれば「めりめりめり」っと、そんな勢いでブランが彼女を私から引き剥がした。

「お袋さまは、ここではヒト、だ。それを配慮しろ」

「しっつれいな。それくらい心得ているわよ」

「どうだかな」

「って、あんたもいたの？シユルツ」

ふかーく、おもーい息を吐いてシユルツはキャサリンに視線を向ける。

「緘口令を、キャサリン。今王都にいる全ての魔族に。ご母堂を見かけても必要以上に騒ぐのではない、とな」

「ちよっと待って、どういう…ああ。」

「愛される資質、ね。あのマザコン」

「ご母堂、それではあまりにも主が…それ以前に、我ら魔族そのよくな付加が無くともご母堂をお慕いしております」

「うるんな視線を向けると、再びキャサリンが手を握ってきた。」

「勿論ですわ、おかあさま。母を慕わぬ子供が何処におりましよう？」

「私も愛しているわよ。子供達」

「にっこりと笑うと、キャサリンの瞳が潤んでくる。…なんか、某守護聖の方々の気持ちがわかるような気がする。」

「おかあさまがヒトで残念です。魔族でいらっしやるなら、すぐに

真名を捧げましたのに」

彼らの真の名前は同族でしか発音できない。しかも、それは隷属を意味する。その為の通り名だ。ブランもシュルツも。

「何の為に、そんな設定をしたと思っているの？子供の自由を縛るつもりはないわよ」

いや、ホント変な設定していなくてよかったわ。色々な意味で。

気が付くと、跪く三人の魔族の姿があった。∴だから、止めると言っている。

色んな意味で前途多難だわ。やれやれ。

## 1 (後書き)

修正いたしました。

## 2 (前書き)

お気に入り登録：え？600件突破って…うわあああ。

調子に乗って連日投稿です。一応会社休み中のみではありますが、はい。

「説明を、ヴィダ」

流石に、あの屋敷で泊まる度胸は私には無く（当たり前だ、俺だつてイヤだ。とはブランの台詞）王都の中心より少し離れた場所にある宿に泊まることにした。

実は、この宿レーエンさん、エルグさんご夫妻ご推薦の宿屋。なんといつても、料理が美味しい（あのお二人の基準は、まずそこから始まる）ペット可で、レベルの割りに立地のせいも、中心街にある宿よりもお値打ちだということ。

お二人から話を通っていたのか、同じランクでも、一番良いお部屋に案内していただき、ほっと一息ついた。

食事は大変おいしゅうございました。食べきれない量に「あのお二人のご紹介でしたので、つい」とご主人が苦笑いらつしゃつたけど…いくらなんでも、比べる基準が…ねえ？

「母上」

思うんだが、こいつはツンデレか？他の人がいると無表情なくせに、二人でいると急に甘い…いや、甘えたになる。それはレンとレギオンにも言える事だけど、あのお二人は他者の事など気にしない。

「我にも良くは解らぬ。解るのは母上に対する慕わしい気持ちのみ」人に膝枕させて言う台詞ではないと思えますが？ちなみに、ブランとシュルツはヴィダを呼び出すといったら、早々に退散…もとい、一旦帰郷した。

「我ら魔族とて、親兄弟はある。それと同じくらい…多分、それ以

上の思慕を母上に持っている。しかし、それは我が主上に抱く畏敬の念とは全く違うものだ」

まあ、畏敬と思慕を同じにされても困りますが。

「冥界の君がお与えになられたのは、あくまで『好意』悪しき気持ちを抱かぬ程度。それとは別に我らの中には『思慕』がある。多分母上が我らの有様をお決めになられたからであろう」

腰に手をやり…腹に顔を埋めるのか、こいつは。やることが外見とミスマッチなこと。

「イヤ、か？」

あーそんな不安そうな顔をしないでいいのよ、坊や。

よしよしと頭を撫でてやると、嬉しそうな顔を見せた。蕩けるような顔の魔族って、心臓が悪い。まあ、それ以上の息子たちのおかげで耐性はついているけどさ。

「忠誠ではない、基本は思慕だ。母上を犠牲にしようとは思わぬが、母上の犠牲になろうとも思わぬ。親子とはそうであろう？」

ヒトによって違っただろうけどね。嫌いじゃないわよ、その考え方。

まあ、いいわ。私も魔族を敵に回すような事態にはなりたくないしね。…でも、そうすると。

「陰魔や妖魔、は？」

「あれは魔族ではない」

膝の上から聞こえる底冷えのする声。

「…ごめん」

「母上？」

体を起こしてヴィダが私の顔を覗き込む。

「気安い気持ちで彼らを設定した私にも罪はあるわ」

「母上…」

そつと引き寄せられて、私は彼の胸に顔を埋める形になった。

「ちよ、ちよつとヴィダ！」

流石にこういうシユチュエーションは慣れていませんよ。年は重ねていても経験値少ないんですから。

「申したはずだ、あれは『魔族』ではない。魔族の誇りも気概もとうに捨てた存在。己の欲望にのみ忠実なもの。自ら道を外したものの頭に重みが加わり、ヴィダが顔を寄せてきたのが解る。

「道を外すは本人の責任。母上が悩むことは無い」  
全く、本当に、この子達は。

ぐりぐりと彼の肩に顔を押し付けると、微かに笑う気配がした。

「ああ、そうだ。ロウエンの副隊長が職を辞して王都に向った」

……へ？

顔を上げると、笑いを含んだ紅玉の瞳とぶつかる。

「目的はわからぬ。用心召されよ」

唐突に消えて、体のバランスを崩した私は、そのままベッドに倒れこんだ。

「副隊長さんが王都へ？しかも、騎士隊を辞めて？」

思い浮かぶはあの黒さを滲ませた笑顔。嫌な汗が背中を伝う。

「と、とりあえず、王都は広いし、そうそう出会うこともないよね。うん」

まさか、職を辞してまで自分を追いかけてくる、なんてことは無いだろうから、なにか他の目的があったの事だろう、とか。

そうそう、都合よく出会うことなどないだろう、とか。



少しばかり以前と違い美人さんになったとはいえ、自意識過剰じゃない、自分。

そう考えて、納得すると安心して眠りに付いた。

わざわざヴィダが警告してくれた理由とか、副隊長さんの情報網が並ではない事など、すっかりと頭の中から抜け落ちていた。

次の日、食堂で手を振る彼の姿を見て、思わず回れ右、をしたくなかったのは当然だと思いませんか？

この人相手に営業スマイルも出てこない。  
驚いた気配が無いところを見ると、知っていたであろう二人は、何事も無かったかのように後ろを付いてくる。

自分の隣の椅子を引いて、どうぞ、と手を差し出す相手を綺麗に無視して、斜め前の席に腰を降ろす。

「こんにちは、副隊長さん。ご公務ですか？」

「ランス。そう呼んで欲しいと言ったはずだが？それに騎士の職を辞してきたから、役職で呼ばれても困るな」

なんですか、それ？まさかとは思いますが…いやいやいや。

タイミングよく来た給仕の人にパンとスープに果物という軽食を頼む。

「意外と少食なんだな」

誰かのせいで食欲が失せたんです。言葉に出さずになっこりと笑顔で応じると、一瞬怯んだような表情をして苦笑を見せる。

「悪かった。調子に乗ってしまったようだ。機嫌を直してくれないか？」

「別に」

そっけない私の言葉に、相手の目が見開かれる。中途半端な時間帯でよかった。近くに女性が居たら、完全に敵に回していただろうな、と思う。

この容姿だ、女性のほうが放っておかないだろう。だから、私のようなタイプは珍しいだけだと結論つける。離れた別の次元で見てい

る分には目の保養でも、実際傍で相手をしたくはない。

「まあ、それでだ。冒険者ギルドに登録しようと思っただけ」

ご勝手に。心の中で呟きはするが、口に出すほど愚かではない。っていつか、取り合えずまだ沸点には届いていない。

「つれないな。…もし、よかったら雇わないか？今ならサービスしておくが？」

「ご遠慮申し上げます」

昔「結構です」は了承の意味も含む、と聞いた事があった。電話での訳のわからない詐欺行為がやたら流行っていた頃だ。

第一声に『アナタはラッキーです！』その言葉に騙されてのこのこ出て行くと、訳のわからない商品を何十万も出して買う羽目になるという…いかん、話が脱線してしまった。

嫌いな相手には慇懃な態度で接していたのが、向こうでの私だった。実際電話口でその相手が出ると、温度が違つと周囲が笑っていた。慇懃無礼な奴だと昔人に言われたこともある。

極力関わりたくない相手には、悪くないやり方だと思つ。向こうも察してか必要以上に関わつてこようとはしなくなる。

目の前に居る相手もそういう存在だ。間違つても関わりたくないのに、どうして絡んでくるのか。

とはいえ、完全に嫌い、という相手ではない。少なくとも、悪くない…っていつか、『素』を出しても問題はない、と思つた相手だ。

まあ、それが間違いだつたと気づいても後の祭り。

でもねえ、自分の蒔いた種とはいえ、気に入られた責任を負うのは違つと思つ。一方的に気に入られても、此方が迷惑だと思えば立派なストーリーカー行為だ。本人がいじめられていると思つた時点で「い

じめ」は成立する。それと同じ。

なんてことを運ばれてきた食事を食べながらつらつらと考えていた。向こうは何も言わず、黙って目を閉じている。

そうしていなきゃ、じつと見てしまつから、とは本人の弁。迷惑な話だ。

私の気配を察してか、ブランは隣の椅子に座り、シユルツは相手の足元に蹲った。傍から見ていればほのぼのとしている光景かも知れないが、彼らは護りに入っているだけだ。万一向こうが迂闊なまねをしようものなら、実力で止めるだろう。それこそ正体を晒すことも躊躇わずに。

「聞いてもいいか？それほど俺を厭うわけを」

「厭っては居ませんよ」

にっこりと応じてみせる。

「ただ、関わらないで居て欲しいだけです。そして、私も必要以上に貴方に関わりたくない。それだけです」

そう、それだけだ。何かの折、例えば貴族のお屋敷なんかで招かれた側と、芸を披露すべく雇われた側で会う程度の関係。

それなら、相応に応じる。少し親しい間柄で笑って冗談をいえるくらいの関係を築いていける。

だが、常に傍にいて欲しい、傍にいたい相手ではない。誰が好き好んで、こんな疲れる相手の傍にいたいと思うかってえの。

黙り込んでしまった相手に、軽く頭を下げると立ち上がる。曖昧に誤魔化すべき相手ではないと、そう思つて話した。

中途半端は、却つて失礼にあたる。向こうがどう思っているかは兎も角、此方の意思はきちんと伝えるべきだ。それを受け止める度量があると見込んで話したのだ。

< 充分認めているじゃないか。どうして突き放すんだ？ >  
街に出た私に、肩に乗ったブランが不思議そうに尋ねてきた。

【あの男なら、腕も立つ。ご母堂の警護にはうってつけたと思うが？】

… 全くドイツもコイツも、人の話をちゃんと聞いていた？

( 関わりたくないのよ。あんなイケメン。騒ぎと揉め事が向こうからやってくる事位、分らない？ )

【建前はいらぬ】  
仕方ないなあ。別に建前って訳じゃないんだけど。

溜息を一つ吐いて、自分達が一番安全な… 人の耳を気にせず話せる場所… キャサリンの屋敷にお邪魔した。

おかさまあ、と飛んできた相手をよしよし、と撫でてついでに外からも侵入できないように結界を張ってもらう。

「好みじゃない。はつきりきっぱり、ただそれだけ。文句ある？」  
男にとって自信、というのはいくは無いと思う。特にあれだけの人物だ、引く手数多の存在だっただろう。しかし。

「受け答えに常に気を張っていなきゃいけない相手を何故にパートナーに選ばなくちゃいけない？」

それに。と、私は口には出さず表層意識で彼らに語りかける。

リーリアは私という存在のみのために作られた「器」だ。ヒトとして一生を終える、とレンは言った。それは嘘ではないだろう。

ただし、一代限りでだ。

それが解っていないながら、何故にあんな重い存在を背負わなくては

けない？

「そこそこの身分なんですよ？」

キャサリンに向って問いかけると、少し考えるようなそぶりを見せて、頭を縦に動かす。

「ランスーリン・レナード・ツアイ・レックス。一番上の兄上が宰相補佐をしている家柄ですわ。兄上の身分は子爵位。あとの姉君がグランドの貴族に嫁いでいます。なんでも熱烈な恋愛結婚で、彼女のために王家を離れ一貴族に下ったと」

華やかなご家族をお持ちですこと。そんな相手が一介の市制の歌姫の警護つて…笑わせてくれるわ。

しかし、レックス家、かあ。敵に回したくは無いなあ。

大丈夫ですわ

返って来る言葉に、小さく笑う。

「容姿、実力、人柄に家柄…揃いすぎている男は御免こうむるわ」  
過去に受けた痛手は、簡単には拭えない。まあ、痛手ってほどでもないけどね、いい思い出ではないわね。

私の思考に気がついてか、彼らもそれ以上は何も言いはしなかった。

アルベルト・ロツシエ・ツアイ・レックス子爵閣下は、久しぶりに戻ってきた末の弟の意気消沈した姿を、珍しげに見下ろした。

幼い頃から、なんでも卒無くこなす彼は、どちらかというところ冷めた性格で、物事にも動じることは少なかつた。相手や場所によつていかようにも振舞うことができる社交術を持つてはいるが、親しいものには毒舌な、だが気遣いのできる性格であつた。

そんな彼が、家族の前とはいえ、人目も憚らず落ち込んでいるのは、兄にとつてみれば何年ぶりだろうと考えずにはいられぬほど珍しい姿なのである。

ことん、という音と共に自分の目の前に置かれた琥珀色の液体を見て、ランスーリンは顔を上げる。正面のソファに兄が同じ酒の入つたグラスを持つて座るのが目に入った。

「無理にとは言わないが、よかつたら話してみないか？気が楽になるかも知れない」

若くして宰相補佐の身分となつた青年は、弟に穏やかな笑みを見せる。琥珀の液体を口に含み、彼は大きく息を吐いた。

「女性に関わらないで欲しいと言われました」

滅多なことでは表情を崩すことの無いアルベルトであつたが、流石に驚きを隠せなかつた。

親の遺伝子を相応に受け継いだ子供達は、宮中でも評判の美丈夫揃いだ。なかでも、ランスは「みなの良いところ取り」と、生前祖父が笑つたほど整つた容貌をしている。彼が知る限り言い寄られるこ

とは山ほどあるが、自ら動くことは無かったはずだ。

「厭ってはいない、と。偶然に会えば既知の者として挨拶位ならしてくれませう。しかし、俺に対する対応は…礼儀正しいと言うより慇懃な…距離を置く態度しか取ってくれませう」

「お前の気を惹く為ではないのか？」

「気配が既に拒絶しています。…ああ、こうも言われました。自分を求めるのなら、海水と浜辺の間に土地を探し、耕せぬ道具でそこを耕し、一粒の種で土地を満たし、結べぬ紐で満たした作物を結んで来い、と」

眉を寄せて怒りを滲ませた長兄に、彼は首を振って苦笑を見せる。

「勿論、ただの揶揄です。例えそれを叶えたところで自分は貴方の物にはならない、と。笑顔の下の笑わぬ瞳がそう言っていました」

「何者かは知らぬが身の程知らずが。レックスの家のものにそのような暴言を吐くなどと」

「お止めください、兄上。違うのです。彼女は最初に会ったときから一定の距離を持って俺に接していた。それを無理に縮め自分の腕の中に囲おうとしたのは俺です」

大きく息を吐いて、彼はグラスの中身を再び口にする。そのとき初めて、それがアルベルトが特別な時にしか呑まぬ酒だということに気がついた。兄の気遣いに青年は静かに微笑んだ。

「今まで自分の周囲にはいなかった女です。俺は彼女が欲しい。…地位や名誉など彼女に比べれば塵にも等しい」

「そんな相手ならば、奇麗事を言うよりも動け。家を使っても構わない。それとも身分が届かぬほど高いお方か？」

「いえ、市井の歌姫です」

別の意味でアルベルトの眉間に皺がよったが、一瞬にして消してしまっただので、下を向いていた弟が気付くことは無かった。



「会ってみたいものだな。その歌姫とやらに」  
顔を上げるとランスーリンは困ったように微笑んだ。

「ここには観光に来ているので、歌を聞かせることは無いと言っていました。残念です、兄上にもせひ聴いていただきたい。不思議な韻律の歌を歌うのです」

「そうか…」

静かにグラスを傾ける兄に習い、ランスーリンもグラスに口を近づけた。芳醇な味わいをゆつくり口の中で転がす。

胸の丈を言ってしまったからか、気が楽になり、もう一度リーリアと話してみようと思ひ直す。ただの友人としての節度ある距離なら、彼女も受け入れてくれるかもしれない。…事実、そのような事を言ってもいた。

自分の物思いに入り込んだ彼は、軽く目を伏せグラスを傾ける兄の、その瞳の奥に揺らめく暗い炎に気付くことができずにいた。

取り合えず、後に知った他所様のお家事情はこっちにおいて置いて。

さあ、観光だ！

でも、やっぱり足が向くのは市場。しかも食料品関係を扱っている所。我ながら笑っちゃうけど、道の駅なんか行っても一番に覗くのは地元で取れる野菜の直販所だったもんね。習慣って根強い。

うわー安い。うわー新鮮！。

物価基準が低いから、安いのは当然なんだけど、新鮮さも悪くは無  
い。流石王都って感じだね。流通がとてもスムーズ。

内陸だから、魚はどうか？って思ったら、魔法で凍らせて運ぶん  
だって。水と風の魔法の応用だとシユルツが教えてくれた。じゃあ、  
赤蜜柑は？と尋ねたら、かの果実は管理温度がとても難しいのだそ  
うだ。だから凍らせて運ぶことができないらしい。適温でこちらに  
運ぼうとすると、相当数のA以上のランクを持った魔法使いが数人  
要るらしい。そんな事をすればコストがかかりすぎて、今以上にと  
んでもない価格になるとのこと。高価なのに、そこそこの量が供給  
されるなんて、買い手がつかない。むしろ希少性を謳って高価な方  
が需要はそれなりにある、という事なのだろう。

ちなみに、魚を凍らせて運ぶ程度の魔法なら、B級前後の魔法使い  
一人で大丈夫なのだそうだ。しかも、一日1〜2回程度魔法を強化  
すればOKなんだって。

農業にも力を入れている国だから、農作物も豊富だけど…姿かたち  
が微妙に向こうと違うのが笑える。

そんな風にあっちきよろ、こっちよろしていたから隙が生まれた。  
どん、とぶつかられる衝撃とざっくりと何かが切られる音。

よろめく体を誰かが支えてくれた。それと同時にブランとシユルツ  
が逃げた相手に向かって、同時に走り出す。

「いい！大丈夫だからっ」

周囲にいた人たちが一斉に振り返るが、私は二人の方に気を取られ  
てそれ所じゃない。

「いいから、戻って！」

私の声に振り返って、不承不承戻ってくる二人に安心して、ほうつと息を吐く。

「大丈夫か？」

なんです？この腰に響く重低音。あ、いやいやいや。

ここで漸く我に返り、転びかけた体を支えてくれた相手に気づくと、顔を挙げお礼を言おうとして…固まった。

ねーさあああん、ねーさあん。グンがいますっ。リアルグイがここにいますっ。

顔を上げた先にいたのは豹の顔を持った男の人だった。

## 5 (前書き)

お気に入り登録がなんと1000件越え…うわあああ〜ありがとう  
ございます。

と、いう訳で一人感謝祭。三日連続投稿します。

あまりにも有名な豹頭王のサーガは、古い友人の愛読書で、未完のまま作者の方が亡くなった事を酷く嘆いていた。

しかし、その豹頭王がリアルにいらっしやるとは。

惚けていた私に、その人は軽く首をかしげ（かつ、かわええ）人通りの邪魔にならない程度に道の端に移動してくれた。その間中、私はポカンと口を開けたまま、相手の顔を凝視していた。

「大丈夫か？怪我は無いか？」

何と素晴らしい、低い声。うわああ、ど真ん中ですう。…私の場合、姿形よりも、声とか話し方から入っちゃうからね。

え？ああ、好みのタイプってやつ？

みゃーう。

軽い肩への衝撃と共に、すりよる毛並みに、思わず息を吐く。

「よかった、無事？」

すりすりと甘えるように体をこすり付けるブランと、足元にそっと寄り添ってくるシュルツに、体の力が抜けかけた。

「おっと」

腕への力が強くなり、そこで私はようやく現状を思い出して、顔を上げた。

うわ、本物。

ねーさん、貴女がここにいらっしやったら、二人して狂喜乱舞していたことでしょう。いや、実際人目とブランたちが居なかつたら、やっていたかもしれない。

「失礼な態度を取って、申し訳ありません」  
「いかんいかん、いい年したおぼさんの取る行動じゃない。常識的な行動を心がけましょう。」

深々と頭を下げる。お礼と謝罪はきちんと、それがマナーです（なんか、某公共CMみたいになってきたな）。

「助けていただいて、ありがとうございました」

「いや、助けたほどでもない。∴失礼だが、どこかでお会いしたかな？」

いいなあ、この声。ずっと聞いていたいです。

∴いや、いかん、いかん。

軽く首を振ったので、さっきの言葉の否定と思われるみたいだ。

「そうか、俺を見る目が妙に懐かしげだったからな。おかしな事を言って申し訳ない」

「とんでもないです。私の方こそ不躰な態度で申し訳ありません」  
ひたすら頭を下げるけど、ブランとシユルツには表層意識はただ漏れなので、足元と肩から呆れた気配が漂ってくる。

懐かしかったかあ。そうだね、あの話よりも一緒に思い出した友人が、だけど。

「構わない。お嬢さんはきちんと礼節を護り謝罪された。気にすることは無い」

「ありがとうございます」

「いやーよかった、よかった。心の広い方で。ほっと一息つくくと、彼はかがんで顔を覗き込んできた。」

うわあああ〜リアルですっ！近づかないでください〜大型猫科はツ

ボなんです。思わず抱き寄せてかいぐりかいぐりしたいです。なんて、やっていたらぴしり、と頬を叩かれた。…ブランのしっばで。

その様子を見て、豹のおにーさんがくすり、と笑う。…ううう、百面相…見られましたよね。ぐっすん。

表情に大きな変化は無いけれど、笑うと琥珀色の瞳が細められる。

「面白いお嬢さんだ。俺はウォルフという、見ての通りの豹の獣人だ。お嬢さんのお名前をお聞きしてもいいかな？」

ウォルフさん。豹なのに狼さんですか。まあ、あくまで『むこう』の世界の意味合いですが。

礼には礼を、当たり前前的事。うわあ、我ながら母校の方針身につけてるなあ。

「重ね重ね、失礼いたしました。リーリアと申します、歌謡いでございませう」

スカートの端を持って軽く腰を折る。

「ご丁寧にいたみいる。ところで、先程腰のものを盗まれたようだが、大丈夫なのか？」

あー、あれですか。うん、掏ったというより、盗っていったよね。

ナイフ使って切り取って。ただ、妙に感心しちゃったのが、アレだけの雑踏で、ナイフ使って、獲物だけを切り取っていったその腕前なんだよね。

傷どころか、服に傷一つついていない。この状況じゃ、切られても不思議じゃないのに、凄いわ。

ただ、刃物使うなんて掏りとしちや亜流、三流以下なんだよ…って昔読んだ漫画か小説にあった台詞。

「多分、盗んだ人は、確認したら落ち込むか、悔しがるかどつちかだと思えます」

だって、あの中には、雑踏を歩く際に喉を痛めるといけないと思って買った飴と、そのお釣りの銅貨数枚しか入っていないんだもん。惜しいというなら、あの飴よね。薬草が入っているもので、結構イイお値段したから。

それを話すと、ウォルフさんは「そうか」と一言呟いて頷いた。

何かが引つ張る感じがして、見るとシユルツがスカートの裾を引つ張っている。珍しいわね、こうやって動作で意志を伝えようなんて。

「それじゃ、失礼します。本当にありがとうございました」

「ああ、気をつけて」

うーん、首から上以外は、人型なんですね。残念です、おっきな肉球触ってみたかったのに。

<…お袋さま。なんつーか駄々漏れ>

【豹頭王と騒いでおられたが、既知の方か？】

(違うよ。豹頭王っていうのは、向こうの世界の小説の主人公。その姿そのままだから騒いじやった)

まあ、私よりも騒ぐ人はいるけれどね。もう会うことも無い友人を思い出して笑う。彼女なら私の何十倍も騒いだろう。

<けど、豹頭王っていうのも、強ち間違っちゃいねえな。流せば、あつという間に広まってあいつの二つ名が増えるだけだ>

【知っているのか？】

<ああ、といつても俺も直接知っているわけじゃない。豹一族のウォルフ。剣一本で上り詰めた、傭兵ギルドの特Sクラスの兵士だ。>



冒険者ギルドにも登録しているはずだぜ？そつちも確か特Sだ>  
うわ、凄いの一言しかでないわね。二つのギルドの特Sって。ひとつのギルドですら数えるほどしかないってきいたことあるもの。

しかし、剣一本か、ホントリアル豹頭王だわ。

<縁は大事にしるよ、お袋さま。あの男、自分から名乗ることは少ないぜ>

そこで、ふと気がつく…まさかとは思うが。

【ご案じめさるな。神とて続けてのご都合主義は発動できぬ】  
語るにおちたな。まあ、分かっているはいたけれどね。

<それにだ、何もかも早々都合よくは行かない。…いくら、ご都合主義だったって、その後の縁を紡ぐのはヒトだ。こつちがお膳立てしたって、本人同士の気が合わなければ見合いなんて潰れるだろう？それと同じだ>

…あ、そう。しかし、よく「見合い」なんて言葉を知っていたわね。  
<ああ、主に教えてもらった、お袋様向こうじゃ見合い結婚だったんだってな>

全く、あいつは余計な事ばかり。

遙か彼方の子供達が居る場所に向って、「あっかんべー」。

「リーリア」

夕食を食べに一階の食堂に下りてきたら、入り口の方で名前を呼ばれ振り返った。そこに見知った相手を見て自然笑顔になる。レーエンさん、エルグさん…と、後一人、え？

向こうも驚いたのか、琥珀の瞳が見開かれていた。

「こんばんわ、レーエンさん、エルグさん。ウォルフさん」

今度はレーエンさんたちが驚く番だった。「知り合いだったのかい？」の言葉に、小さく首を振る。

「お会いしたのは今日が初めてです。往来で転びそうになったところを支えていただきました」

流石にあの時脳内とはいえ騒ぎすぎたからか、思った以上に冷静で居られるみたいだった。よかった、よかった。あんな醜態はそうそう曝け出したいものじゃない。

「…お前ら邪魔」

ぼそり、と宿のご主人が近づいてきておっしゃる。無理も無いな、エルグさんほどではないけれど、ウォルフさんもいい体つきしていらっしゃる。あつちだと、充分格闘家（いや、本職なんですけど）で通じるくらいだ。ふたり並んでいると、完全に入り口を塞いでいる。

しかし、それ以前に視線を集めている気がする。不思議に思ったけど、すぐに分かった、宿屋の多くがそうであるように、ここも昼は食堂、夜は酒場が併設されている。宿泊客の迷惑にならないよう、防音対策はばっちり、だそうだ。結界魔法の応用でそういった魔法の道具も売っているらしい。そっち方面に発達したくになんだなあ、

と妙に感心していたら、

<自然と人間が共存していくには、中世程度の文化水準が限界、ついている持論を振りかざしている奴がいてさ>

あー、すみません。友人Aの極論を反映させたのは私です。ごめんなさい。

おっと、いけない話が脱線してしまった。

早い話、特Sクラスと特Aクラスが揃っているんだもんね、注目を集めるってものですよ。

「ほれ、こつち」

そう言つて、ご主人が案内してくださつたのは衝立で区切られた半個室みたいな席だった。

6〜8人掛けの席で結構ゆつたりしてる。一枚板のテーブルとベンチみたいになっている椅子にはクッションがおいてあった。

「お前らが揃っているならこのテーブルでも狭いかも知れんが、あいにくここしか開いていないからな。…いつものでいいか？」

確かに。エルグさんとウオルフさんで充分幅取るかも。…宿のご主人がおっしゃつたのは、全く別の意味だつて知つたのは、このすぐ後だつただけだ。

「あ、うん。任せる。リーリアは？何か飲む？」

え？ご一緒してもいいんですかね？一応お伺いを立ててみると「え？一緒に食べないの？」と、逆に聞き返されてしまいました。はい、それじゃ遠慮なく。おばさんは、ずうずうしいのだよ。

「あ、じゃあ、果汁をお願いします」

そう言うと、向かい側に座っていたレーエンさんが「いいこ、いいこ」と頭を撫でてきた。あー、あの、一応私成人していますが。別の視点では、この中で最年長だと思いますが。

「お休み中だつていうのに、喉を大切にするんだねえ。偉い偉い」  
あはははは、アリガトウゴザイマス。

「休み中？確か歌謡いと聞いていたが、ここで歌っているのではないのか？」

これは、私の横に座ったウォルフさんの台詞。当然エルグさんの席はレーエンさんのお隣なので、こういう位置関係になる。

「王都には観光に来たんです。それにこんな大きい場所で歌わせていただけるようなレベルではありませんから」

いいじゃん、死ぬ直前まで休みなしだったんだから。一応会社は土日休みだったけど、主婦に土曜も日曜も無いってね。

「リーリアは上手いよ。何ていうのか、本当に16って思うほど、歌に艶がある」

いやいやいや、実年齢は…わはははは。

「16？成人したばかりだったのか？若いとは思っていたが、世慣れた態度をしていたから、もう少し上だと思っていた」

レーエンさんをちらり、と見てウォルフさんは苦笑する。気持ちは良く解りますとも、はい。

「そうおっしゃるウォルフさんは、お幾つでいらっしゃるんですか？」

うっすらと殺気が漂ってきたので、話を少し軌道修正しようと。

「俺か？いくつに見える？」

アルコールが入ってきたからかな？それとも親しいヒトが傍に居るからか、昼間会ったときよりも、砕けた印象がしますね。

「何言っているんだよ、獣人…特に『変化』している奴の年齢なん

てわかるかよ」

呆れたようにレーエンさんが言う。

「変化」とは、文字通り身体の一部を変えていること。獣人は、その気になればヒトと同じ姿になることが出来る。だから黙って紛れたいれば、魔法使いや訓練された使い魔以外気が付かれない、と言われている。そうはいつでも、勘が鋭いヒトや、経験によって、気がつくヒトもいる。

ちなみに、属する生き物に変わることも可能なんだそうだ。魔族の変身能力は、色々な動物に擬態するのでブランもシウルツも違う生き物に変わる事は可能だ。本人達は、今の姿が気に入っているので、緊急時以外違う生き物の姿になる気は無いと言っているけど。

「30」

「まだ29だっ」

ぼそりと呟いたエルグさんの言葉を、即効で否定なさった。：いや、でも凄い。その若さで特S二つ。

「もうすぐ30」

：なんだろう、とっても古い歌にそうというのがあったような記憶がおっと、いけない、年がばれる。

「お待ちっ」

どどん、という音が相応しい。そんな勢いで目の前に並べられる料理。ああ、そうか、ここはご夫妻の定宿だっけ？今回は別の用事で王都に来ているので、そちらの関係の宿に泊まっているらしいけど。「やっぱり王都に来たら、親父さんのコレを食べないと」

「ああ、我々の王都での数少ない楽しみだ」

凄く嬉しそうにご夫妻はおっしゃるけど…ううん、これは。

「無理はしなくていいぞ。初めての者には視覚的に辛かろう」  
なんておっしゃるウォルフさんもなんだか嬉しそうですね。

「いえ、それは大丈夫ですが…えーと、レーエンさん、お野菜も食べましょうね」

「心配ないよリーリア。ちゃんとこの後に出てくる予定だから」

ああ、そうですか…まあ、私はすでにお腹一杯です。

所狭しと並べられたのは、全て『丸焼き料理』。豚に子牛に鳥に…  
大きさは鯰くらいの、名前を知らない魚も丸焼きになっています。  
狭いって、こういう意味だったのね。しかも、まだ追加料理がくる  
と。このご夫婦、エンゲル係数一体いくつなんだろう。

「惚けていると食いつぱぐれるよ」

ですから、ワタクシはもうお腹一杯ですって。

「今から朝食か？」

頭上から掛けられた言葉に顔を上げる。重低音の耳に響く良いお声つて…え？

「ああ、この姿であうのは初めてか」

反応できずに、一瞬声が出ませんでしたよ。階段を降りてくる相手を呆気に取られて見つめる。

「どうした？俺が解らないか？」

声と瞳の色でもしかしてと思いましたが…。

「おはようございます。ウォルフさん」

あー、びっくりした。確かに獣人の方がヒトの姿に成れるというのは知っていましたし、ロウエンでもブランたちに教えてもらったり騎士隊の中にも何人かいらっしやいましたけどね。

うわ、やばい。この方ヒトの姿でもきつちりクリーンヒットだわ。

基本イケメン苦手な私ではあるが、「見る」分には嫌いではない。好きな俳優さんとか、芸能人はイケメン多かつたからね。でも現実社会において付き合った相手は、一人を除いて殆どが「いかつい」タイプだった。…なんていうか、造りが荒いっていうか、悪くはないけど、お世辞にもイケメン、とは言わないタイプ。

ウォルフさんもそういうタイプ。豹頭のイメージっていうよりライオンや虎？黒いスーツ着てたら、そっち系の方に間違えられそうですね、わはは。

「おはよう、お嬢さん。朝から驚かせて悪かったな」  
いいえ、と首を振る。なんとなく、そのまま一緒に席に座った。流石に朝早いと、食堂に居るのはほとんど宿泊客ばかりだ。席は十分にあるけれど、一人よりも顔見知りと一緒にのほうがいいもんね。

宿のご主人自ら席に来てくださった。それだけウオルフさんが長い付き合いなんだろう。

「おはよう」

「ああ」

「おはようございます」

ご主人が持つてきてくださった水を見て首を傾げる。…この色。

「お嬢さんに。昨夜の歌の礼だ。久しぶりにいいものを聴かせて貰った」

「あ、ありがとうございます」

昨夜レーエンさんにせがまれて（酔っ払いには勝てません）一曲だけ披露した。

小さい頃から、なんとなく口ずさんでいた「おぼろ月夜」。気がついていたら、しーんとしていたので、どうしたのかな？と思ったら、拍手が酒場のほうからしたのでびっくりした。

「もっと歌って欲しい」とのお客さんの言葉には、エルグさんの無言の圧力と、宿屋のご主人の「お客さんだから」で抑えてもらった。

宿のご主人の言葉使いが砕けたものになっていて、ちょっと嬉しく



なってしまった。庶民だからね、ホテルマン？としては当然なんだろうけど、あんまり格式ばった態度は苦手だったりする。…立場を弁えずに砕けすぎるっていうのも問題だけど。

しかし…思わず目の前に置かれたグラスを凝視してしまった。

「どうした？赤蜜柑、嫌いだったか？」

「あ、いえ、好きです。むしろ好物です！…ただ、こんな高いものに見合う歌だったかな、と思ってしまった」

後で向こうの酒場で値段を聞いてびっくりしたもんね。たかが、果汁一杯で、なに、この値段！？って。まあ、それだけ希少性が高いんだろうケドさ。

問題は、過去に赤蜜柑に絡む人物。大人しくしていきると助かるんだけどな。

と、ご主人が私とウォルフさんを見比べて、妙な笑いを浮かべた。

「なんだ？」

別の給仕さんが持ってきてくれた食事に口をつけていた（なんつか、食べる量が違うのは流石肉体派でしょうか？）ウォルフさんが怪訝そうに顔を上げる。

「ああ、悪い。いや、こうやって一緒に居ると髪と瞳の色のせいか兄妹みたいだと思ってな」

そういえば、人型のウォルフさんもリーリアと同じ金褐色の髪と瞳を持っていて。こっちにきて、あんまり外見について考えた事なかったけど（だって、鏡見るたびに違和感、感じまくりなんだもんね）確かに似た色しているねえ。ただ、リーリアに比べると色合いが濃い。同じ「トパーズ」に括られても、向こうは「インペリアル」でこっちが「黄水晶」って感じかな？存在そのものの格の違いもあるだろうけど。…あ、別に黄水晶を貶めているわけじゃないよ？アスはアレで好きな宝石…っていうか、水晶そのものが好きな「鉾石」だもんね。

獣人とヒトとの間には、子供は出来ない。「種」として、全く異なるものなんだとシユルツが教えてくれた。私的不思議なのは、同じ獣人なら、例えばイヌ科とネコ科でも子供は普通に生まれるそうだが、種族的にはどっちかに偏るんだって。例えばライオンの獣人と虎の獣人の間に「ライガー」は生まれない。割合はその時々らしいけど、例えば双子が生まれたら、二人ともどちらかの時もあるし、一人ずつそれぞれの種族だということもある。とはいえ、基本的に一回のお産で生まれるのは一人。双子以上はヒトの出産以上に珍しいそうだ。

話が逸れちゃったね。

ウォルフさんは獣人だから、本来の姿は豹だ。人型や、一部が獣で他は人型とか、色々なパターンで姿が変わえられるらしい。ただ、どうしても個人差があり、完全な人型になるには相当の修練が必要なんだと、昨夜エルグさんが教えてくれた。けれど、街で暮らすには、人型のほうが便利なので此方の姿を取る事が多いらしい。∴これは、シユルツに教えてもらった事。

<でも、たいしたものだと思うぜ？>  
しみじみとした口調でブランが言う。

<『豹のウォルフ』は確かに有名だ。それと同時に狙う奴も多い。けど、わざわざあんな風な姿で街を歩いているって言うことは、牽制も含めているんだろ？ ウォルフと認識すれば、余計な揉め事

に關与する確立は低くなるからな。…ただ、危険度も増えるけどさ。自らの自信なのか、周囲への気遣いなのか微妙な所だろうが、多分両方だろう。

…けど、兄妹、か。

「リーリア？」

不思議そうな響きを含んだ低い声にはっと我に返る。自分の考えに没頭して、食事の手が止まっていたようだ。

前を見ると、すでにウォルフさんの食事は済んでいた。スープがまだ冷めていないところを見ると、そんなに長い時間ぼーっとしていたわけでもなさそうだ。…てか、早っ。

「どうした？故郷の身内でも思い出したか？」

細められた琥珀の瞳に、少しからかうような色が混じる。苦笑いをして首を振ると私は食事を続けた。

ブランもシュルツも大人しく床に置かれた食事を取っている。

そんな穏やかな時間の真っ最中に。

やっぱり、赤蜜柑の果汁には碌でもないことが付随してくるのだと。

…美味しいのに。ちえ。

「歌謡いのリーリアとはお前のことか？」

顔を上げると数人の騎士の人たち。はい、と立ち上がって礼をとる。ここでは彼らのほうが身分は上だ。立とうともしないウオルフさんに不審の目を向けるけど、一応対象者は私らしいので、彼らもあえて咎めだてはしなかった。

おお、割とまともな人たちだ。

「我らと一緒に来てもらおう」

「理由は？」

私の代わりにウオルフさんが口を開いた。騎士の方々が不審そうに見るけど、私たちを見比べて妙に納得したようだった。

あー、さっきの宿のご主人の台詞が思い出される。

「去るお方のご命令だ。妹御はお借りしていく」

ああ、やっぱり。違いますから、それ。…って、さるお方？誰です、それ？あのセクハラ親父じゃないですよ。

「ならば、俺も一緒に行こう」

え？あのですね。

「やましいことが無ければ、付いて行く事に問題は無かるう？この国の近衛騎士ともあるう者が、フランドル公の既知の者に無体を働くとも思えんが、念のためだ」

フランドル公の名前が出てきた途端、騎士の人たちに動揺が走った。と、いうことは知らなかったのね、おにーさんたち（あ、違う、坊や達だわね）。って、ことはセクハラ親父が相手じゃないって事かな？

ところで、どうして公の名前って、ああ、昨夜話の流れで出てきたっけ？レーエンさんたちも護衛の仕事で会った事があるって。ウオルフさんも旧知の間柄らしくって、世間って狭いねーって話をしていたんだ。酒の席の話を良く覚えていたよなー。しかも、あの飲みっぷりで。

そんな事をつらつらと考えていたので、私はウオルフさんの言った「近衛騎士」という単語を見事にすっ飛ばしてしまったのだった。

「第一成人したばかりの世間知らずを、一人きりで行かせれるわけがないだろう？」

にっこり笑って「なあ、リーリア」などと、妹に甘いに「ちゃんを演じていらっしやいます。なんていうか、凄いわコノヒト。」

騎士の人たちの言葉尻に乗っかってはいるけど、自分から肯定も否定もしていない。

万一ばれてしまったとしても「先に誤解をしたのはそちらだろう？それに彼女は自分にとって妹みたいなものだ」って言い訳でも充分通じたりする。

三文芝居のタイトルは…なんだろうね？しかも、成人したばかりでも世間知らずでもないんだけど。確かに、この世界じゃすこーしばかり常識知らず、だけどさ。

「…まあ、いいだろう。別に『他のものを連れてくるな』という指示は受けていないからな」

うわー、詭弁だね、騎士さん。言葉にしていなかったら許容範囲とするって、言い訳の初歩じゃん。そりゃ、ありがたいけどさ。いいんですか？と、アイコンタクトしてみると、笑いを含んだ琥珀の瞳とぶつかった。大丈夫だ、とその瞳が言っている（ような気がする）。

「ただ、使い魔たちは置いていつて貰おう」  
あー成る程ね。魔法使いによっては、使い魔を通信機器的役割に使う者もいる。その目と耳を使って、遠くのものを見、聞くのは、敵側の魔法使いの常套手段だと教えてくれたのは、他ならぬブランドル公だ。だから、ブランドルたちの扱いに気をつけるように、との事だった。

「承りました。宿のご主人に『このコ』達のことを頼んでまいりますので、暫しお時間をいただけますか？」

「よかるう…仕度をする時間くらい与えてやるう」

おお、上から目線。でも、まあ、仕方ないか。王都の騎士さまだもんね。

しかも、これは後で知っただけで、王都勤務の「近衛騎士」って、貴族で編成されているんだそう。制服が、普通の騎士と少し違いらしい。私に解るはずないけどさ。

そう思いながら、後ろから付いて来る相手を見上げた。騎士の人たちの死角に入ると足を止める。

「ありがたいお申し出ですけど、理由をお聞かせいただいてもいいですか？」

絡んでいる、絶対何か絡んでいる。いくら何でも知り合って間が無い相手にここまでするとは思えない。しかも、特Sクラス。絶対に裏がある。…てか、あつたほうが私としても安心なんだよね。

だって、無料タダより高いものは無いっていうでしょ？

やっぱり、そうきたか的な笑みを浮かべて、ウォルフさんは軽く頭

を掻いた。

「ステアに頼まれたから、だな」

ステア：誰です、それ。

「フランドル公だ。カースティア・フランドル。今でこそ親父さんの後を継いでグラントの伯爵なんてやっているが、あいつ若い頃、傭兵ギルドの魔法士に属していたんだ」

ああ、剣士と魔法使い。傭兵ギルドって多種に分かれていましたっけ？

「お嬢さんたちがこつちに来る2、3日前に使い魔が連絡してきてな。知り合いの娘がそちらに行くから、時間があれば様子を見て欲しいとの事だった。あいつには借りが山ほどあるからな。丁度仕事も一段落したから様子くらい見て報告する位構わないと思ったんだ」

あまり時間が無いので、ブランとシュルツを部屋に置くと、ウォルフさんも招き入れる。

「…仕度をするんだらう？大丈夫なのか？」

につこりと笑顔で返事をして差し上げる。呆れたような笑いを浮かべて、ウォルフさんはベットに腰を降ろした。…やっぱり体積あるわ、この方。ベットが妙な音を立ててきしんだ。

衝立を立てて、着替え始める。すみませんねえ、慎みって言葉は何十年…もとい…何年も前にどこかに置いて来てしまいましたよ。

「大事な相手の知り合いだって言っていたからな。お嬢さん、ひよつとして奴の婚約者の縁者か？」

「ロザリアさまのですか？いいえ？お目にかかったことはありませんけど」

フランドル公の婚約者さんには、ロウエンの領事館でお会いした。

すっごい美人の大人しげなお姫様だけど、訳隔てなく誰にでも接するスバラシイお方だ。

あの騒ぎのときは、丁度買い物に行っただけでいらっしやったらしく、ブランドル公が慌てて皆に口止めしていた。

「じゃあ、市場でお会いしたときは、私の事をご存知だったんですか？」

「いや、奴から聞いたのはお嬢さんの名前と歌謡いだって事だけだから、名乗られて正直驚いた」

一応偶然だつて事ですかね？息子がらみには違いないけど。

衝立から出てきた私を見て、ウォルフさんが少し驚いた顔をする。

「女性の仕度はもう少し時間が掛かるものだと思っていたが…」  
悪かったですね。リーリアは若いから、そんなに濃い化粧をしなくてもいいんですよ。社会に出て、何十年のおばさん舐めちゃいけません。

「よろしくお願いいたします。お兄様」

「承知した」

ドレスの端を持って頭を下げると、笑いながら向こうも騎士の礼を返す。ちなみに、今回のドレスは、ロウエンの市場で出会ったオジサマのところで買った、お値打ちドレスだ。

ウォルフさんの笑顔が、柔らかく優しげなものに変わった。

「良く似合っている」

うわわわ、タラシだ。タラシがここに居る。

どこかで、呆れたような二つの溜息が聞こえた気がした。

何度



目だろつね。 幸せが逃げるよ、ムスコタチ

騎士さんに連れられてやってきたのは大きなお屋敷だった。

とはいえ、応接間とかに通されるわけではなく、玄関ホールから一つ中に入った部屋。なんというか、パーティなんかがあると、そこを一旦通って中に入るような、それなりの贅は尽くしてあるけど、主賓系じゃない部屋？って場所だった。

当然、椅子もなければ、テーブルも無い。

騎士の人たちは、一部は外に、位の高そうなヒトは玄関ホールで控えている。中に通してくれた執事のおじさまも礼儀正しくはあったけど、ここに案内しただけで、さっさと下がって行ってしまった。どうやら、ウォルフさんはこの屋敷に心当たりがあるらしく「全く…」と溜息を吐いて黙り込んでしまっている。

すると、向こうの扉からヒトが入ってきた。先程の執事のおじさまが先に入って恭しく扉を支えながら頭を下げていたので、こっちも膝を折ってお出迎え。ウォルフさんも軽く腰を折り、頭を下げる。なんつーか、しっかり宮中の礼儀作法が身についている、ってカンジ？侮れないわ、ほんと。

「楽しみに下さい」

穏やかな、初めて聞く声に「誰だろう？」と思いながら顔を上げる。見たところ、30代後半から40そこそこってカンジのおにーさん。…この国は、美形しかおらんのかい？…あ、いやそういう訳でもないか、と思いつ返す。ブラウンの髪に碧の瞳。…どこかで見た顔立

ちに心の中で首を捻る。

「そなたがリーリアか」

「はい」

声を掛けられ、もう一度軽く礼をとる。向けられた視線はそのまま私の後ろに移った。

「兄が共に来た、と聞いているが、そなたは獣人であろう？何故に偽った？」

微かに香る魔法の残滓。全く魔力がないって訳じゃないから、なんとなく解る。ご教授くださったのはブランとシルツだけだ。

「偽ってはおりませぬ。リーリアは私にとって妹も同然の娘。加えて知人より頼まれし者。お出でになった方々の誤解をあえて解かずにいましたのは、旅において、その方が周囲にあらぬ誤解を抱かせず済む慣習故にございます」

おおお、なんつーか、澁みないっていうか、準備してありました的な言い訳ですねえ。

「…まあ、よい。私が見があるのは、その娘のほうだ。口出しは無用。よいな」

是、とも否、と答えず、ウォルフさんは頭を下げた。…言質とったほうがいいですよ？この方、結構策士ですから。

「娘…何ゆえ、我が弟の申し出を断った」

おとうと…弟、さん？えーと、この方の弟さんって言われても、ねえ。嫌な予感はてんこ盛りですが。

「申し訳ございません、弟君のお名前をお聞かせいただいてもよろしいでしょうか？」

少し驚いた顔のご主人に、後ろに控えていた執事さんが何か耳打ちする。軽く眉を寄せてから、ご主人はもう一度此方を見た。

「我が名は、レックス。アルベルト・ロツシエ・ツアイ・レックスという。この名に聞き覚えはあるか？」

ああ、やっぱり赤蜜柑はジnkクスになりそうでイヤです。

「はい、失礼いたしました。閣下」

もう一度ゆっくりと腰を折る。いい加減疲れたんだけどね。おばさんをあんまり立たせちゃいけません。って、リーリアはまだ16だったっけ。

「では、我が弟も存じておるな？」

「ランスーリン・レナード・ツアイ・レックスさま、ですね。ロウエンでお世話になりました」

「うむ。ならば、もう一度問う。何ゆえ、弟の申し出を断った」

おとーとのごたごた（恋愛沙汰っていうのは、流石に、ねえ？）おにーちゃんが出てくるのかよ？ちつとはまともなお人だと思っただんだけどなあ。がっかりだぜ。

「分不相応でございますので。ランスーリンさまにもそう申し上げました」

嘘は言っていないぞー。思いつ切り湾曲しているけどさ。

「ほう、それにしても、なかなかの苦言を呈したときいているが？」

苦言？そんな事いったかなあ？

首をかしげた私に、レックス子爵は眉を寄せる。それねえ、あんまりやってると皺になって消えなくなりますよ。

「なんでも、不可能を可能にしたら、お前のものになる、と申したそうではないか？」

へ？は？あ、ああ。…やれやれ。

「閣下…少しお時間を頂いてもよろしいでしょうか？」

「ほう、言い訳を聞かせる、と？」

まーさーかー。誰がつ。

けれど、そんな事億尾にも出さないで、執事さんへと視線を移す。

「ご迷惑でなければ、水を一杯頂戴できませんでしょうか？」

視線で主人に問う執事さんに、鷹揚に頷く子爵。ううん、いい主従関係ですわね。

程なく持ってこられた水…っていうか、おお、薄めた紅茶ですか。流石お貴族さまですね。

お礼を言って子爵様に一礼。「お耳汚しではありますが」そう言つて、歌うは「スカポローフェア」フルバージョン。

終わって、頭を下げると、遠慮がちな拍手が聞こえた…い、いつの間。

部屋の周りには使用人の人たちが、集まっていた。子爵さまも少し驚いた表情の後、苦笑交じりの拍手を送ってくださいさる。

「内容はともかく…声と歌は素晴らしいものだった」

「ありがとうございます」

膝を折り頭を下げる。と、向こうのほうから、慌しい足音と扉を開ける音が聞こえ…。

「兄上っ！」

「帰ったか、ランス。早かったな」

おや、お出かけでしたか？副隊長さん。…しかし、早かったなっつて、なんです、それ？

「何事です！兄上！リーリアを屋敷に呼びつけるなど！」

「お前が動こうとしないからだ。ふむ、だがお前が気に入るのもわかるな。悪くはない」

ちよつとまで、断つたぞ、私は断つたんだぞ。

「身分などなんでもなる。それに別に貴族に括る気はないからな」

ヒトの話を受けー　　っ。

えーと、目の前では華麗なる兄弟喧嘩が繰り広げられております。

いくら、美丈夫同士とはいえ、喧嘩は喧嘩、です。口喧嘩だけども、でも、どう考えても頭も口も回りそうなお二人なのに…喧嘩の内容のレベル低いわねえ。

流石に気の毒に思われたのか。執事さんの指示で椅子とテーブルが運ばれてきました。勧められるままに私とウオルフさんは座らせてもらって、あまつさえお茶など出していただいております。

どうやら、副隊長さんはお兄さんに騙されて家を空けていたらしいいや、別にそんなことは、どうでもいいんだけどさ。しかし、さっきから黙って聞いてればなんだ？本人目の前にして、まあ、言ってくれる事。

子爵様は、とりあえず身分には目を瞑るが年齢的にどうだ、とか。縁者はあるのかとかに始まり、どこそこの家の養女にしたらどうだの、副隊長さんは、まだそんな状態ではない、とか何故騎士団を動かしたのか、とか。

すみません、呼び出された理由はわからないわけではないですけど、当事者放っておいて何やっているんですか。

「なあ、お嬢：リーリア、一つ聞いていいか？」

私同様呆れた表情のウォルフさんは、どこで学んできたんですかって、言いたくなるような優雅な動きでお茶を口に運び、私の方を見る。

「お前、レックス殿：弟のほうだが、妻問いをされたのか？」

妻問い？ああ、プロポーズですか？は？プロポーズ！？

「その様子では、違うみたいだな？だが、あの会話は『ソレ』前提に進んでいるぞ」

「そうですね、あのランスが段階を飛ばすなんて考えられませんわ」

…え？

挟まれた言葉に、私たちの視線がそちらに向く。あーえーいつの間

椅子に腰を降ろして、キャサリンが優雅にお茶を飲んでいた。その後ろには、執事さんがワゴンを持って控えている。

いつの間にか、使用人の人たちも周囲から消えていた。

「そちらの方のご質問からですね。失礼、ワタクシはキャサリンと申しますの」

「あ、ああ、名前だけはステアから聞いている。ウォルフだ」

キャサリンが差し出した手に唇を落すまねをする。実際に落としていいのは、相当近い間柄らしい。…とは、ギルドのマナーの先生の受け売り。

「なんだ、お前もやって欲しいのか？」

じっと凝視していた私に、ウォルフさんが笑った。



「あー、いや、いいです」

半眼になった私に、キャサリンが不思議そうに首をかしげた。

「『豹のウオルフ』に礼をとってもらえるなんて事、滅多にありませんのに、おかあ……リーリアってば遠慮深いんですわね」

違います。頼まなくてもやってくれそうな相手を二人ほど知っています。

確かに彼らなら、日常的にやりそうですわね

くすり、と笑ってウインクする彼女に、苦笑を返す。そんな私たちをウオルフさんは不思議そうに眺めていた。

「しかし、妻問いもしていないのに、どうしてあんな会話になるのだ？」

「そうですわね、リーリア、心当たりはありますか？」

心当たり、ねえ。第一副隊長さんと、まともに会話したのって、本当に極僅かだからねえ。スカポロネタは兎も角として。

「ロウエンの騎士隊を辞めて、冒険者ギルドに登録するから、護衛に雇わないか、とは言われましたね」

「は？」

「ほう」

「あと、さっきのあの歌の後半部分だけを歌ったのですが『楽しみにまってる』とも言われましたけど」

「まあ」

「……ふう」

「私個人としては、例え叶えていただいても御免こうむる話ですが……それ以前に、そんな無理難題を言い出す相手が嫌です」

言い出したのは、お前だろうって言われればそれまでだけど、あく

まで酒場の歌謡いとしての仕事だから、いちいち相手にしないでしよう？

「で、どこが『妻問い』なんですか？」

「どこにもないわね」

「しいていえば、歌に対する一言だろうが…酒場での仕事の最中に言われたことならば、真に受けるほうがどうかしているだろうな」

「そうですね…それにしても…」

キヤサリンが半眼を向ける先に、私たちも自然と視線を向ける。

「白熱してますね」

なんか、段々話の趣旨が逸れている気がする。今彼らが論議しているのは、女性の扱い方、だ。内容を聞いていると、二人ともフェミニストだということは解るけど、お兄さんは行動は、弟は…なんていうか、ロマンチスト？自分の中にある的確な女性像に対して妙な執着がある。

「まあ、アレも仕方ありませんわね。幼い頃から周囲の女性たちの目を集めていますから」

「でしようねえ、あの容姿ですから。」

「だが、なんとというか、成る程リーリアに惹かれたのも解るな。アレの理想にとても近い」

「やーめーてーくれー。…と、いつの間に来たのか、ブランとシュルツが私の傍らにいた。」

「ワタクシが連れてきましたのよ、ご心配なく。…さて、と、そろそろアレを止めましょうかしら」

カップを置いて、優雅に立ち上がる。すぐに執事さんがお茶のセツトを下げさせた。と、同時に部屋の外へと出て行く。って、手招きされているようですが。

「いいのか？あちらのほうが安全なようだが。いくら俺でも、魔法攻撃までお前を庇ってかわす自信はないぞ」

「大丈夫です」

にっこり笑顔で答える。膝に乗っているブランも足元に蹲るシユルツも動く気配はない。

「キャサリンが私を傷つけるような事は絶対にありません」

少し驚いたような表情をした彼女が振り返り…とても綺麗な笑顔を見せてくれた。

「そうか。ならば俺もここに居よう」

一度立ち上がった椅子に再び腰を降ろすと、テーブルに肘を着いて、面白そうに視線を送る。流石、特S。落ち着いていらっしやる。

片手を挙げ、キャサリンが魔力を集めていく様が見て取れた。…淡い、紅色ですか、綺麗ですね。

11 (前書き)

週末更新が危ういので。

私のほほん、とした感想とは裏腹に、その魔力を感じたのか、揃って此方を向いた二人の顔は見る見る真っ青になっていった。

「キャ…キャシー？」

「義姉上？」

うふふ、と対するキャサリンは酷く楽しそうだ。あー違うか、あれは怒っていらっしやいますねえ。

ちゅどーん。

漫画にでもあるような擬音と共に、部屋の一角が崩れ落ちた。

<とりあえず、俺がキャシーのところ呼びに行つて、シユルツがお袋さまの後をつけたんだけどよ。正直代わつてもらいたかったぜ> 膝の上でしみじみとブランが言う。向こうの騒ぎなど全く見ない振り、だ。

<シユルツが遠話でこのことを教えたらな、それまで近くに居た虫達が一斉に離れていきやがった>

あー、それは悪いことをしたわね。主に虫さんたちに。

【「母堂…」】

溜息交じりのシユルツに内心苦笑で答えて、顔を上げる…なんていうんだらう、ごごごごご…っていう効果音がとても似合いそうな、キャサリンの気配だ。そして、少しずつ後退りしていくご兄弟。

…まあ、ここまでにしておいて差し上げよう。これ以上、この華美なお部屋が荒れるのは見たくないし、使用人の方々も気の毒だしね。

よっこいしょ、と心の中で勢いをつけ、キャサリンへと向っていく。立ち上がった途端、下に落とされたブランは器用に降り立ち、シュルツも立ち上がった。

「その辺になさってください、奥方さま」

にっこりと笑顔を作って彼女の耳元に一言囁くと、驚いた顔と共に、手の中の魔力が急速に消えて行った。

「ご存知だったんですか？」

小さな、私にしか聞こえない、小さな声に笑いが深くなる。

シエロンの宰相補佐の奥方が、魔族というのは結構有名な話で、ギルドの書庫で調べ物をしているときに知った事だ。王都なのだから、それなりの数の魔族がいるにも関わらず、ブランとシュルツ二人揃っての「ツテ」と言われたときすぐに彼女のことを思い当たったほどである。

まあ、彼女の「ペット」達が理由で、普段はキャサリンだけが別宅に住んでいる、というのはこちらに来て初めて知った話ではあるが。

「キャサリン…その者と知り合いだったのか？」

「『その者』ではございませんことよ。リーリアですわ」

「…すまぬ」

笑いたいのを寸前で堪える。そつと後ろを伺うとウォルフさんも肩を震わせていた。うん、気持ちは良く解ります。

「フランドル公の関係者とワタクシが関わり無いと何故思われます

の？」

え？という顔をして、子爵（いや、もういつか）が私の方を見る。えくちゃんと言いましたよ、お迎えに見えた騎士さんにも。そちらのおぼっちゃんまは直接一緒に居たとき会ったじゃないですか？

「ランスーリンさまはご存知でいらっしやいますか？」

うわあ、我ながら嫌な言い方だねえ。でも、それ位言ってもいいよね。これだけ迷惑かけられているんだから。

今度は自分の弟へと視線を向けるけど、向けられた本人こそ驚いた表情をしている。これなら、私だって読める。兄上はご存じなかったのですか？』だ。

もう一度私の方に視線が向けられる…やれやれ、面倒くさいなあ。

「この使い間たちは、旅の安全にとフランドル公にお貸しいただいている者たちです」

「私もフランドル公に申し付けられ、彼女の傍におります」

…嘘じゃないですけどね、ウォルフさん。あくまで暫定的に、ですが。ほら、副隊長さんが驚いた顔をしているよ。ま、知ったことじゃないけどさ。

「と、いうわけでランスーリンさま」

はっとしたように私を見る。驚きの顔はそのままなのが、ちよつと笑える（失礼なのは充分承知だけどね）。

「護衛のお申し出は大変ありがたいお話ですが、重ねてお断り申し上げます」

全く何にも含んじやいないが、色々含みを持たせて言ってみる。<悪党>と声が聞こえたが、聞こえない振りは得意。

「ご苦労様でしたわね、リーリア。宿に戻ってもよろしくてよ」

「キヤサリン」

「義姉上！」

「黙りなさい」

鶴の一声。うん、素晴らしい。黙り込む、男性陣に笑いが再びこみ上げるが…頑張りました、私。

「お二人には言って聞かせることがございますわ。よろしいですね  
一応、私には後姿しか見えないけど…向こうにいるレックス御兄弟  
の顔色は、青を通り越して、グレーゾーンとなっていた。

ご健闘をお祈りいたします。

お屋敷を出て（その前に、執事さんや使用人の人たちから、口々に  
歌声を褒めていただいた。ありがとうございます）暫く歩いた後、  
ウォルフさんと顔を見合わせて、思わず吹き出した。暫く笑いが止  
まらずに、道の隅に寄って大笑い。

道行く人たちが気味悪そうに見て足早に去っていくけど、気にしち  
やいられない。

「いや、聞きしに勝る力カア天下だ」

「そんなに有名なんですか？」

漸く笑いが収まって、近くの茶店（喫茶店みたいなお店ですオープ  
ンカフェってカンジかな？スイーツ有なので嬉しい）によって、飲  
み物と軽食を頼む。結構時間が立っていたようで、朝、宿を出たの  
に、もうお昼を過ぎていた。

まあ、ウォルフさんの場合、本人は「軽く」のつもりだろうが、私  
視点で「がつつり」昼食なだけだね。

「噂では、子爵殿の百夜通い、とも言われているらしいな。真偽の



ほどは知らんが、ステアから否定の言葉を聞かないから、おおよそ  
事実なんだろう」

馴れ初めは、彼女に命を救われた子爵が（一説には、刺客に立ち向  
かうキヤサリンに子爵が一目惚れしたとの話があるらしい。真偽は  
ご本人たちのみしかわからないけれどね）感謝の意を伝えたときに  
返ってきた笑顔に心を奪われた、とか、何とか。

それが、子爵の行動派の理由なんだろうな。成せば成る、ですか？  
しかし、百夜通いとは、小野小町ですな…悲恋じゃなくて良かった  
と思います。

食べ終わった後、笑ってウォルフさんが手を差し出した。

「観光に着たんだろう？良かったら、案内しよう」  
らっきー

笑顔でその手を取った私に、すでに諦めたのか何も言わず付いて来  
る二人がいた。

11 (後書き)

ちょっと修正しました。お気づきになられた方、申し訳ないです。

12 (前書き)

sideウォルフ

一瞬光に当たった「それ」を持つていたのが、子供だった為反応が鈍った。

軽い紐が切れる音と共に、目の前にいた少女に軽くぶつかりながら走り去っていく姿。結構な勢いだった為、ふらついたその身体を支えた。この都の闇は、あんな子供にまで広がりつつあるのかと胸が痛くなる。

事態に気がついたのか、少女と共にいた使い魔らしい動物が追いかけていこうとするが、それをとっさに停めて息を吐く彼女に声を掛けた。

振り返って口を開こうとした相手の瞳が大きく見開かれる。別に珍しい反応ではない。身体の一部を変化させて歩いていると物珍しげな視線に晒されることが多い。煩わしくはあるが、無益な争いを避ける有効な手段の一つでもあるため、仕方がない。…稀に、この姿故に余計な争いに出会うこともあるが。

しかし、少女の瞳の中に現れたのは、純粹な驚きと何かを堪えるような悲哀に似た色。小さく紡がれた名は、自分の知らぬものであったが、彼女が自分の中に、他の誰かを見たことは確かだった。

口を開けば、キチンとした言葉使いと態度に、見た目より年が上なのかもしれないと思った。実際外見と実年齢が釣り合わない夫婦が友人にいる。この後会う約束をしていたのだが、名を聞いて驚いた。彼女がステアの言っていた相手、歌謡いの「リーリア」偶

然とはいえ、多少出来すぎ勘もあるが、縁などというものは、こんなものかもしれない、と感じ苦笑する。

王都に宿を取っていた俺に、わざわざ使い魔を飛ばしてきた古い友人は、知り合いから預かった相手が近々そちらに行くので、様子を知らせて欲しい、との事だった。

『厄介な相手に目を付けられたようだね』

そう言つて、使い魔の口から出た相手の名を聞いて、さもありません、と思つてしまつた。好色で有名な男の名は、広く知れ渡つている。しかし、そちら方面以外は、それなりに有能な男なので強く言うものも居ない相手だった。

『それにもう一人…害にはならないと思うが、家がちよつとね』

告げられた相手を聞いて首を傾げる。俺の記憶違いで無ければ、少し離れた場所非要職についているはずだ。そんな俺の疑問を見越したように、使い魔はその理由を言葉にした。

「女一人のために辞職する、か。まあ、元々望んで付いた職ではないらしいからな」

『まあ、そつち本人はリーリイが上手くあしらっているから心配な位と思つけどね』

人の思考を読んだ様に（実際読まれているんだろうが）間をおいて言葉を紡ぐ使い魔に苦笑を見せてから、俺は「是」の返事を持たせて、主人の下に戻らせた。

偶然が重なると、「出来すぎ」も倍増だが、自分が泊まっていた宿は、知る人ぞ知る場所で、しかも紹介者がなければなかなか部屋を貸さない所だったので、共通の知り合いが居てもおかしくはない。驚いたのは、この夫婦が：特に警戒心が強いレーエンがやたら、リアを可愛がっていることだった。

外見や口数が少ないところから、夫のエルグの方が慎重派に思われているが、実際はレーエンの方が警戒心が強い。

「もはや、本能」とエルグは苦笑するが、その彼女がリアに対して相当気を許しているのが見ていて解る。エルグも一見わかりにくいのが、気に入っていることが、付き合いがそれなりにある俺には解る。

「目を逸らさない。態度を変えない」

エルグは彼女のことをそう評した。確かに、彼らと行動を共にして初めてでそれを行なったのは驚きだろう。特にレーエンの戦いぶりを見た後は尚更だ。

しかし、彼女は彼らの戦闘から目を逸らす事無く、態度を変える事無く旅を続けたのだ。

ずっと後で、彼女にソレを聞いたときに、心底呆れた口調で「そんな失礼なことするわけ無いじゃないですか」と答えたが。

簡単に出来ることではない。

だから、俺がその提案をしたときに彼らなら賛成をしてくれると、

そう思っていたのだが。

返って来たのは、芳しくない…特にレーエンに至っては、怒りすら滲ませた反応だった。

「百歩譲って」

溜息をつきながらレーエンを宥め、エルグは俺に視線を送る。

「彼女を連れて行くのなら、きちんと理由を話し、理解して同意を得てからだ」

友人の言葉に俺は軽く目をも開く。世の中には知らないほうが幸せなことなどいくらでもある。今回の事など、その最たる部類といつていいだろう。

「きつとあの子の事だもの、何も言わずに協力してくれるでしょうね。でも、私は嫌よ。同じ『利用』するのなら、話して

『協力』を求めべきだわ」

確かに、付き合いの浅い俺ですらわかる。きつとリーリアは、理由を言わない俺達を見て、首を傾げ、苦笑して見せるのだろう。

あの姿に似合わない老成した気配と共に。

そして、言うのだ「いいですよ」と。訊きたい事を全て飲み込み、苦笑を穏やかな笑顔に変えて。

「少し…考えさせてくれ」

「時間は限られているわよ。…っと、ここまでね」

レーエンの向けた視線の先にいた相手に、俺も自然と口元が緩む。

自分達のような存在を前にしても自然体でいてくれる相手というの

は、確かに得がたい。

「こんばんは、レーエンさん、エルグさん。ウォルフさんも先程はありがとうございました」

ペこり、と頭を下げ、俺の横に腰を降ろす。目で問うエルグに観光案内をしてきたことを話すと、レーエンが盛大に笑い出した。

「か…観光。ウォルフが観光って…闘技場以外にこの街を知っていたの？」

「連れて行っていたのだよ、その闘技場ですよ」

あっさりと、答えるリーリアに、二人の動きが止まる。うん？なんだ？闘技場のどこがいけないんだ？歓楽街へ連れて行くわけにもいかないだろっ？

「…リーリア。今度私の時間があるときに一緒に行こう？」

「その方が無難だな」

二人の言葉に俺が慥然とすると、傍らの彼女は可笑しそうにくすくすと笑った。

「ありがとうございます。機会がありましたら、是非」

宿の主人が持つてきた果汁に礼をいいながら、一緒に運ばれて来た「フェルト」という野菜をスティック状に切った物を口に運ぶ。本当に小食だ。それを口に出すと、「ご自分を比較対象にしないでください」と言われた。それもそうだ。それでも、食が細いと思う。この程度の食事で、よくアレだけの声量が維持できるものだ。

そういえば、フェルトの名前を聞いたとき「所変われば、名前も変わるものですね」と笑っていた。自分達は違う呼び方をしていたのだと。

参考にと聞いたなら「きゅうり」だと教えてくれた。俺もレーエンた



ちも初めて聞く呼び方であった。

そして、この夜もまたこのまま宴会に突入したのは言っまでもない。

屍累々。

酔っ払いの皆様が、床に机に撃沈していらっしやる。

「じゃあな」

エルグさんがレーエンさんを抱え上げ、全く危なくない足取りで戻っていかれた。結構飲んでいたと思うんだけど、凄いわ、うん。

そして、ここにも凄い…と、いうか筈が居る。

どうして、こんな事になったかというところ、きつかけは昨夜と似たり寄ったりで、別の酔っ払いが、わざわざ区切つてある私たちの席までやって来て、「歌え」と上から目線の命令口調で言い出したのが事の起こりであった。

なんていうのかなあ、可愛い子供達のおねだりとか、綺麗なおねーちゃんの「お願い」なら聞いてあげてもいいけど、何が楽しくつて、こんなむさいおっさんの命令を聞かなくちゃいけないんでしょうね？

きつちり無視していたら「てめえ」って…ブランとシユルツが立ち上がる前に、男の顔が水浸し…もとい、酒浸しになっていた。グラスの持ち主はレーエンさん。

「勝手なこと言うんじゃないよ。この子はねえ、今休養中なんだ」

「昨夜は歌っていたじゃねえか！」

「アレは特別。アタシの為にだもの。…そうだねえ、アタシと飲み比べして勝てたら、頼んで歌ってもらってあげるよ」

って、レーエンさん。面倒だから、一曲くらい歌ってもいいですよ。そう思っただち立ち上がろうとしたところをエルグさんが軽く肩を押えた。

「もちろん、負けたほうが、ここの代金を払うって事で」  
この時点で、すでにレーエンさんは結構飲んでた。それを見て勝てるかと踏んだのか、男が了承して、気が付いたら酒場に居る人たち殆ど巻き込んで…。

で、冒頭に戻ります。

ちなみに、最後の一人が潰れるのを見届けてから、レーエンさんはいつこり私に笑顔を向けて、「はい、アタシの勝ち」と、勝利宣言をして、そのまま寝てしまいました。

「少し、外に出るか？」

あ、策の存在を少しの間忘れていました。片付けに見えた、宿のご主人は「あいつが来ると何時もコレだから」と苦笑混じりに言ってお代はその辺に転がっている人たちのツケにしておくから心配ない、とも言ってくださいました。

おお、満天の星。

不夜城東京…もとい、現代社会と違って、夜は当たり前前に暗いんですよ。そして、星を遮る街の灯もここにはないから、夜空の星の数が桁違いに凄い。

現代社会の科学で考えれば、この世界にも宇宙があるって証明なんだろうケド、そんなことどうでもいい、って気になるくらい見事な星空だ。

そんな中を男の人と二人きりで歩く（ブランとシユルツは途中でさつさと部屋に戻って行った）。普通に考えればロマンチックなシユチュエーションなんだけど、いかんせん、甘さの欠片もない。

だって、ウォルフさんがね、さつきから何か言おうとしては辞めている、の繰り返し。告白とか愛の言葉とか…なんて勘違いするのは残念ながら、人生経験積みすぎております。だから、黙って向こうから言い出すのを待っていた。

こういったことに、焦りや短期は禁物…とはいえ、娘や旦那相手には、すぐにキレていたけどさ、あは。

「リーリアは」

漸く、搾り出した、と言っつていいような声でウォルフさんが口を開いた。

「もし、俺が何も聞かずに一緒に旅をして欲しい、と言っつたら、行っつてくれるか？」

突然の申し出に一瞬言葉を失う。理由を聞こうとして、ウォルフさんを見上げ、口を閉ざした。

彼ほどの人が、ここまで逡巡して…悩みぬいての申し出だろう。今

はまだ、仮定の域を出ないけれど、最終的に申し出る確率が高い。特Sを二つも持っている人だ、それなりに高い危険度もあるが、護ってもらえるだろう事も容易に想像できた。それくらいの自信がなければ、例え共通の知り合いがいたとしても、面識の浅い私に申し出る事はしないだろう。

それに、彼…彼らは、息子たちが理を無理矢理曲げて、私に「紹介」してくれた人物たちだ。

…この程度の事を、割と早く理解し、頭の中で処理をして、私は「いいですよ」と頷いた。それこそ、少し前にウォルフさんが想像していた通りの表情と動きを見せて。

突然、笑い出した彼に、流石にむっとする。なんですか、それ？ シリアスな話だと思ったら、実はお馬鹿な騙しネタですか？ もしくは酔っ払いの戯言、とか。

「あ、ああ…すまない。余りにも『そのまま』の答えだったから…  
つい、な」  
ナンデスカ、ソレ？ 基本的に私、沸点低いつてご存知ですか？  
…本当に、悪かった。そして、リーリア、感謝する。その答えを導き出してくれたことに」

え、え、えええー！

ナンデスカ、コレ。何の罰ゲームですかあ？

突然、跪いたウォルフさんは、私の手を取って、恭しく唇を落す。

やーめーてー。それ恥ずかしいから。

昔、旦那に冗談でやらせて、その後とんでもない目にあっただか  
ら〜。。

はあはあはあ。

恥ずかしさと、消してしまいたい記憶で、真っ赤になっている私を  
面白そうに見上げて：「やっぱり、からかっていたんですね。：ウオ  
ルフさんは笑いを口に乗せたまま、首を振った。

「からかってなどいない。お前の反応が余りにも可愛くて、つい、  
な」

たらしだー。たらしがいるよー。しくしくしく。私の根っこは日本  
人なんです。こんなシュチュエーションにも、相手の動きにも全く  
慣れていないんです。

そのまま、手を引かれて宿に戻って行ったけど：何も言わない、ブ  
ランやシュルツを不審に思わなくらい、動揺しておりました。そ  
して、そのまま着替えもせず寝てしまった。

翌日、不機嫌丸出しのレーエンさんとエルグさんがウォルフさんと  
共に部屋を訪ねてきた。

いつもと位置が違います。

私たちが今居るのは、この宿の「貴賓室」とも呼べる部屋。我々の世界では、スイート…もしくはインペリアルクラスのお部屋でございます。

一時的にしろ、ここを借り切るのはそれなりにお金がかかりますが、全額ウオルフさんもち、だそうです（レーエンさん談）しかも、ルームサービス付き。流石に、いつもほどの量ではありませんが、朝食と呼ぶには程遠い量の食べ物が並んでいます。

「とりあえず、食べてくれ…リーリア」  
私に振りましたね。確かに朝ごはん前でしたけどね。いいですよ、ここは応えて差し上げましょう。ですが、貸しはきっちり返していただきますからね。

「レーエンさん」

実は私レーエンさんに抱きこまれています。部屋のベットより数段ふかふかのソファに座り、片手を頭に、もう片手を肩にがっちり抱え込まれています。

「ご飯にしませんか？私お腹すきました」

いえ、実はあんまり…というか、ぜんぜん空いてなんか居ませんけどね。この雰囲気で、どうやって、と思うわけですよ。

レーエンさんばかりでなく、エルグさんですら、不機嫌を隠そうともしないんですから。

決して、二日酔いとかではなくて、っていうか、二日酔いって経験

したことはないんだそうです。アレだけ呑んで、なんて羨ましい、鋼鉄の腎臓を持っていらっしやるんでしょう。

某詩人の方がおっしゃっている「天使のバスケットボール」。うふふ、いつか経験していただきたいものです、はい。

「そうだね、『腹が減っては戦は出来ぬ』っていうし」

誰ですか、そんな格言、この世界に持ち込んだのは。とりあえず、離してくれたレーエンさんにほっと一息。いくら細くて小柄でも、流石というか、なんとというか、きつくはないけれど抜け出せない。そんな抱き寄せられ方をされておりました。

レーエンさんに続いて、エルグさんも食べ始めたのを見て、そつとウォルフさんに視線を移すと、「助かった」と口だけ動かして、彼もまた食事に取り掛かり始める。

ふふふ、皆さん朝からお元気ですこと。なあんて見事な食べっぷり。…こっちの食欲まで奪ってくださってありがとうございます。

少し冷めた紅茶でパンを流し込んで、果物を2、3切れ。とりあえず、朝ごはんは取る習慣だから、少しでも食べる様になっているけど、目の前の料理の量を見ると聊かウンザリしてしまう。まあ、ちょこちょこ小分けして食べているから、問題は無いのだけどね。

同じ量なら回数増やして食べたほうが太らないっていうし。

リーリアは未だ成長期だから、無理なダイエットは禁物。まあ、気にする体形じゃないし。

食器を載せたワゴンを片付けてもらって、ウォルフさんが気遣って、果汁と軽いお菓子を取ってくれた。そういえば、旅をしていた最初のころ、ご夫妻が私の食の細さに驚いて、無理やり詰め込もうとし



て体調を崩したことがあったんだよね。それ以来、二人とも私の食事に対しては何も言わなくなった。「ちゃんと自己管理しているから大丈夫」を信じてくれたみたいで。

しかし、ホールド続行ですか？しかも、エルグさんも私の隣に来て…見た目はともかく、過保護なにーちゃん、ねーちゃんに挟まれた末っ子の気分です。実の姉がそういうタイプではなかったから、なんだかこそばゆい。

この先触れることがあるかどうか分からないから、この場を借りて言えば、私の姉って言うのは4つ違いで、会社経営をしている。

いわゆるキャリアウーマンってやつだ。独身。…いや、バツイチ。子供はいないから、うちの娘たちを溺愛しまくりだ。でも、その愛情は私には向いていない。

あ、仲が悪いとかそういうのではない。友人言わせると「他人行儀」。姉妹、というより友人同士…親友とか、すごく仲のいい、というレベルではなく、普通の友人。いや、知人って言われても否定できないかもしれない。

本人曰く、肉親に対する愛情が希薄らしい（姪っ子たちは別格よ！とは、本人の弁）。直接言われたもんね、「あんたが死んでも泣かないだろうけど、内海（姉の会社の副社長で、親友。既婚者の男性）が死んだら、号泣するかも」…内海さんの奥さんも姉の友人なので、二人して抱き合って泣くんだらうなあ、ってこの時ぼんやり思ったんだよね。

きつと、私の葬式の時も、ぼーっとしている旦那を尻目に、先頭きつて仕切っていたんだらうな。目に見えるようだわ。

さて、それは兎も角、現状です。

「約束は守る」

ウォルフさんが静かに口を開いた。これは、レーエンさんやエルグさんに向けての言葉だ。

「リーリアに話して、理解してもらって…共に来てもらう」

「あ、それいいです」

驚きに開かれた三対の視線が集まった。…照れるじゃないか。なんつって。

「説明いりません」

「リーリア？」

だつて、ねえ。

「聞いても聞かなくつても後戻りできないのなら、聞きません」

面倒、じゃん？

「しかし、リーリア。それでは」

最近気が付いたんだけど、エルグさんつて、有る程度気心が知れると結構話すんだよね。とはいっても、必要最低限だけどさ。

「知らないほうが幸せなら、それに越したことはないじゃないですか…それに」

につこりと笑顔。我ながら腹の中グレーだね。…真っ黒だとは思いたくない。

「知らないほうが秘密を守れますから」

おお！なんて我ながら健気な発言。

足元のシュルツとブランの大きなため息が聞こえたのは、気のせい、

だよ  
ね。

「万一の時があったら、足手纏いは私です」

はつとしたようにレーエンさんが顔を上げる。本当にいい子だわ。本気で私の心配をしてくれている。出会って間がないっていうのに、凄く有り難い事だと思う。

「なら、本当に知らないほうが生存率が高いって事もありませんよね」

特Sと特Aクラスが組んでやる仕事だ、半端なものじゃないことくらい想像できる。

「…正直、知っていようがまいが、命を惜しむ相手ではないが、ため息と共に吐き出された言葉に、私は苦笑を浮かべた。危険度MAX、ね。でも、命の保障はどんな立場だってきはしない。それは、「あちら」の世界で思い知った。

「それなら、余計知らないほうがいいです」  
黙り込んでしまった三人に、我知らず笑みが浮かぶ。若いわね。相手のことを心配して、一生懸命になっている。相手がそれでいいって、言っているんだから、妥協するのも一つの道なんだけど、そこまで割り切れないのかな？

ただ単に、知ってしまったたら色々面倒だな、って思っているだけなんだけど。

<…お袋さま>【ご母堂】

完全に呆れた声が聞こえるけどね。だって、仕方ないじゃん。知ったところでどうなるものでもなさそうだし。

まだ考え込んでいる彼らに、やれやれと心の中で嘆息する。しゃー

ないなあ、おねーさんが折衷案を出してあげよう。

<誰がおねーさんだよ>

はい、そこ、余計な突っ込みはいれない。

「ギブアンドテイク」

顔を上げた彼らに、内心の思惑は兎も角、につこり笑顔を見せる。

…しかし、需要と供給って訳されたのは何故だ。

「私は歌謡いです。まだ、多くの世界を知らない為、色々なところを回りたい。ですが、女の一人旅は危険です。護衛を雇うにも相応の金銭がかかる。みなさんに付いて行けば、色々回って、なおかつ護衛代はかからない」

「危険にも首を突っ込むよ?」

「命の保障もできないときがある」

「どこにだって危険は転がっていると思いますが?普通に生きていたって、明日の事は誰にも分かりませんし」

突然、笑い声が聞こえ、そちらを見るとウオルフさんが大爆笑してる。おや、こんな風に笑うことができるんですね、旦那。

「俺たちの負けだ、レーエン、エルグ。お嬢さんは、こっちが思っているよりも大人だ」

…すみません、ばばあで。

「いいだろう、今は話さない」

「ウオルフ!」

怒りを含んだ声を上げたレーエンさんをひと睨みでウオルフさんが黙らせる。うーん、表立って現れない力関係ってやつですか?

「それと…その『半魔』殿達は、ステアの所へ戻っていたどころその言葉に、ブランとシュルツが同時に顔を上げる。

「えっ!?!」

「…半魔だったのか」

良く分かりましたね。フランドル公お墨付きの化けっぷりだったのに。

立ち上がり、私の背後に回ると彼らは元の姿に戻った。振り返るレーエンさんとエルグさんが息を呑む心配がする。まあね、何日も一緒に居て気が付かないほど、彼らは完璧に「使い魔」を演じていたからね、無理もないと思いますけど。

「てめえ、オレ達に戻れとは、どういうことだ」

「よさぬか、ブラン。…理由をお聞かせ願えるか?」

こういう時はシュルツの方が冷静よね。でも、実は本気で怒ると彼のほうが手におえなくなるらしい。ブランからの情報なんだけどね。大人しいタイプほど怒らせたら怖い、って奴ですね。そこまで、詳細な性格設定してませんから、私のせいではありませんよ。

<…お袋さま。駄々漏れだってば>

気が抜けたようなブランに笑ってみせる。

「理由は至って簡単だ。彼女をできるだけ危険から遠ざけるため、だ」

「我らが居らぬ方が安全、と?」

「いかにも」

ウォルフさんの口調が妙なものになっているな。敬意を表した口ぶりだけど、なんだか駄々っ子をなだめる響きがある。

「貴公たちのように力あるものが彼女の傍に居れば、それは十分彼女を狙う理由になる」

「それを防ぐために我らがいるのか？」

しゃべらせることをシュルツに任せたのか、後ろからひよい、とブランが私を抱き上げた。

思わず、足を上げて背もたれを飛び越える…って、何歳児だよ、あたしゃ。

見てくれの割りに力があること、と思わず感心してしまう。…問題は、人を横に立たせて肩に顔を埋めている事だ。…重いし痛いぞ、馬鹿息子。

そんな様子をシュルツばかりでなく、他の皆様も呆れたように見ている。

「随分と懐かれているんだね」

呆れたような笑いを含んだレーエンさんに苦笑を返す。

「確かに彼らが居たほうが戦力的には有利だが」

「でも、逆に言えばこちらを警戒させてしまうことにもなるわね」

「然り」

頷くとウォルフさんは、顔を上げブランとシュルツに視線を向ける。当然真正面から視線を受ける形に私もなるんだけどね。

…うん？

「だとしたら、リーリアを連れて行く意味がない。彼女はいわば、我らの隠れ蓑。力有る存在は彼女を際立たせ仇となる」

<何考えているのかわかんねえけど、策士だよな>

(少しは冷静になったみたいね)

<くん？まあな。悪りい、みつともないとこ見せちまった>

小さく笑うことで気にしていない、と示すと私たちは対峙？しているシュルツとウォルフさんへと視線を向けた。

暫くの沈黙の後、肺の中全ての空気を吐き出すようにシュルツが息を吐いた。

「護れるか？我らが姫を」

だれが『我らが姫』だ。

「命に代えても」

ウォルフさんの言葉に、私は顔をしかめ、シュルツとブランは薄い嗤いを浮かべた。

「我らが姫は、ご自分の為に命を粗末にするものを厭われる。護るとは対象者を生かし、なおかつ自分も生き残ること。そなたにそれができるか？」

「…鋭意努力しよう。できぬ約束はしない主義だ」

鋭意努力、ね。社会人だったとき良く使った逃げ口上だわ。

「…リーリア」

シュルツがこちらを向き、ブランもようやく私の肩から顔を上げる。…楽になったわ、うん。

「命を…でなくては我らは動かぬ」

ほー、責任転嫁ですか？そろって『違う』と聞こえたけど、うん、まあ、そうだよな。もっと馬鹿息子に報告しなくちゃいけないだもんねえ、苦労させて悪いわね。

【誠意がありませんな】

あるわけないじゃん。彼らとの接点を作った張本人だろうが？

<否定はしないな。今回の責任は主にある>

「ならば」

私の声に二人が膝を付く。やめてくれ、その芝居があった仕草。



「主に伝えよ」

ちくしょー、乗ってやるぜ。

「「御意」」

「あ」

格好つけて消えようとした二人を呼び止める。

「これ、外して行って」

腕を突きつけてブレスレットを差し出すと、やれやれと首を振り…

ちよつとまったあっくくく

にやりと笑って向ける人外の美貌二つ。こいつら、嫌がらせに出やがった。

「じゃあ、またな」

「ご健勝で。我が姫」

あ…あいつら。

「愛されてるんだねえ」

ほう、つとため息とともにおっしゃるレーエンさん。エルグさんも苦笑いをしていらつしやる。

よりによって、あの馬鹿息子ども。

人の手首を舐めていきやがったつ。しかも、最後に両頬にキス、というおまけ付きで。

「…篠笛…じゃないケーナ？」

ご夫妻はとりあえず宿にしていらっしゃるところに戻られ、私はといえはウォルフさんの部屋にお邪魔していただきます。

「リーリアの故郷ではそう呼ぶのか？シエロンでは『クラフ』と呼ぶ」

そういつて、吹いてくれた音はやっぱりケーナだった。哀愁をたたえる音。癒しの音楽。

と、曲調が知ったものとなる。驚いて彼を見ると「古い民族音楽だ」と、教えてくれた。すでに題名も忘れられて久しい、音だけが継がれている音楽。

「E l C o n d e r P a s a」

「え？」

にこり、と笑って歌詞を紡ぐ。喉の調整をしていないから、鼻歌程度におさえて。ケーナを使って歌われる、有名な音楽。そういえば、リコーダーでもやったなあ。

「そういう歌詞がついていたのか」  
多分調べていけば、あっちの音楽がいくつかみつかるだろう。でも、それよりも私がいなくてはいけないのは、こちらの音楽を知ることではなくては、隠れ蓑の意味が無い。…まあ、いくつか簡単な向こうの歌を覚えてもらおうとも思っているけどね。

「ああ、そうだ。衣装を揃えなくてはな」

え？一応持っていますよ？二枚だけど。

「移動が馬車になる。だから、増えても問題は無い」

「馬車ですか？」

却って目立たないかな？と、思ったら徒歩のほうが人数的に不自然

だ、といわれた。特Aの護衛を雇えるほどの存在なら、そちらのほうがいい、と。

「それに…多分、これが最大の理由だが。野宿になる確率が高くなると、食材は兎も角、調理道具一式は必要だろう？」

あー、そうですね。お三方の胃袋を満たすには普通の携帯食では難しいでしょうね。

「ところで、リーリア。食事は作れるか？」

「作れますよ？」

主婦暦ウン年、なめるんじゃない、ってね。

「助かった」

ほう、っと心底安心した息を吐いてから、ウォルフさんは説明してくれた。

レーエンさんは食べるだけのヒトだそうだ。エルグさんとウォルフさんは一応作れはするが、切る、ゆでる、焼く、が基本の人たちらしい。

味は二の次、腹さえ満たされればいい。レーエンさんもそれに文句は言わない。なんといつても、冒険者ギルドに所属しているのだ、旅の間はいろいろあつてしかるべきだし、自分が作れないのなら、文句を言うのは筋違いだ、という理由で。

「だが、荒んで来るんだ…戦い方が」

それはもう、見ているほうが辛くなるほど、相手が気の毒になるほどに。

「任せてもいいか？」

「任されるのは構いませんが。お口に合うかどうかは責任は持てませんよ」

この間、市場に行ったとき見た限りでは、調味料やハーブなんか、なんとなく見知ったものが多かった。しかし、自分の設定した世界であるにかかわらず、何故に米や味噌、醤油がないんだ、ちくしょー。なんて思っちゃったけどね。

「よし、そうと決まれば市場に行くぞ。揃えなくてはいけないものが山ほどある」

山ほどですか？じゃあ、お金を持ってこなくては。

「金のことなら心配は要らない。支度金ならちゃんと貰ってあるからな」

待っている、とウオルフさんは言って、私に掌を出すように言う。言われたとおりにして…何考えているんですか？

落ちてきたのは金貨が十数枚。

「とはいえ、流石にリーリアに持たせて外に出るわけにはいかないからな。俺が持っていよう」

そういえば、知り合ったきっかけは揃り騒動でしたね。そんなに前の話じゃないのに、なんだか、遠い日のような気持ちになってしまう。

「ああ、そうだ」

急に思い出したように自分の荷物を探っていたウオルフさんが、お金と引き換えるように掌に載せた物を見て、思わず目を見開く。

「よくお分かりになりましたね」

掌に落とされたのは、あの日鞆ごと掏られたのど飴だった。

「あの薬売りは俺も時々利用するからな。話を聞いてすぐに思い当たったからついでのときに買っておいたんだ」

「ありがとうございます」

「いや、と彼は笑い、目を細めた。

「命には代えぬ、しかし、力及ぶ限りお前を護ろう」

静かに跪くウオルフさんに、小さく頷く。流石に、ここまできて茶  
々をいれるほど空気をよめないわけじゃないもんね。

でも、やっぱり止めてくれ。

## 16 (後書き)

活動報告にも書かせていただきましたが、今後週一の更新とさせていただきます。

(しかも、おっかさんとは限らなかつたりします)  
よろしく願います。

それでは、読んでくださってありがとうございます。

「お袋」

現実世界では会えないから、夢に介入してきたって訳かな？

「だって、こうでもしないと会えないだろ？」

「人の表層意識を呼んでの会話は、緊急時以外やめなさい。口にして初めて『会話』っていうのは成り立つんだから」

「上の姐と旦那には苦労していたもんな、お袋」

旦那は口下手というわけではないのだが、都合の悪いこととなると途端にだんまりを決め込む人だった。その気質を受け継いだ長女もまた、普段はどうでもいい話までするくせに、変なところで口が重いタイプになってしまった。ホント、この二人には苦労させられたわ。

「それで、どうしたの？」

「どうしたじゃねえよ、なんであんな話に関わった？」

「何で？理由がわからないような馬鹿に設定したつもりはないわよ、ミルドレン」

ぐ、と黙り込む息子にわざとらしいため息を吐いてみせ、近づぐ。

「目の前に道があったから進んだだけ。やる、やらないで後悔するなら、やったほうがいい、って主義は知っているでしょう？」

「だいたい、最初に彼らに関わせたのはアンタでしょうが。」

「俺たちは基本人界には関われない。だから、最高の人材に接点を持たせたかったんだ」

こんなことになるなら、関わらせなかった、ね。後悔している気持

ちが手に取るように分かる。…まあ、後で悔やむから「後悔」って  
いうんだけど。

「ヒトの世界じゃ、ヴィダも関わることはできない」

あ、ヴィダで思い出した。

「はい、これ」

差し出した音叉に、レンが眉を寄せる。

「お袋」

「母上」

後ろからも聞こえた声に苦笑を向ける。

「ヒトの世界で生きるために『彼ら』を選んだのは私自身よ。…知  
り合ったきっかけを作ってくれた事は感謝してるわ」

黙り込む息子たちに知らず笑いが深くなってしまふ。全く、本当に  
この子達ときたら。」

ウォルフさん達が何を目的として動くかは知らない。知ろつとも思  
わない。

「最初から世界を回るつもりでいたんだから、いいんじゃない？無  
料で護衛を雇えたんだし。しかも報酬つき」

「母上…お気楽すぎます」

「何を今更」

ため息交じりのレギオンの肩をぽんぽんと叩く。

「こんなものが無くたってヴィダも私の大事な息子の一人だわ。親  
の顔を見るのに、子供に会うのに理由なんて要らないわよ。用があ  
ったらこうやって呼び出して頂戴。あ、ついでに私からも『呼べる』  
ようにしておいてくれると嬉しい」



不承不承、といった顔で音叉を受け取ったレンは、レギオンに向けて放り投げる。受け取ったレギオンの掌の中に、吸い込まれるように音叉はその姿を消していった。

「今回は引いてやるけど、息子達の好意を無碍にするのも大概にしておけよ」

おや、ちよつとばかり本気で怒っていらっしやいますね、ミルドレンくん。

「当たり前だ」

「…口に出した事以外に反応しない」

「我等に御用のお有りの時は、お休みになる前に心の中でお念じく  
ださい」

「ん、ありがとう。レギオン」

「お袋はヒトではあるけれど、この世界では『例外』の存在だ。俺たちもある程度干渉はできるけど」

「断る」

「…即答だもんなあ」

がつくり肩をおとしたレンの頭をよしよしと撫でる。無駄に背が高  
いから体制的にちよつときつい。

「…たく」

視界が高くなった。これじゃ、母と息子っていうより父と娘の構図  
だわね。頭を抱えながら撫でていると、さびしそうなレギオンの視  
線とぶつかった。手を伸ばし移動する。

「こんな事で張り合ってどうするのよ。いい加減こつちが恥ずかし  
いわ、馬鹿息子」

同じように頭を撫でながら、小さく笑う。キャラクターとしての外見だけでいうなら、兄妹とか、下手すりゃ恋人同士よね。

するり、と腕の中をぬけだすと、並んだ二人を見上げる。ほんと、眼福、眼福。

「彼らが護りきれないって時は、誰がいても同じ。手え出すんじゃないわよ」

「出せねえよ。ヒトの生死は不可侵だ。お袋の言うとおり、今の地上で個々にいうのなら、最強の組み合わせだ…あくまで『ヒト』であるならな」

獣人も存在としては「ヒト」なのね。

「母上」

レギオンの声に顔を上げると、困ったような笑顔とぶつかる。

「魔族が母上に寄せる思慕の念を否定なさらないでください」  
含みの有る言い方だね。まあ、いいけど。

「子供たちが寄せてくれる愛情を無碍にするほど非道ではないつもりだけど？」

一応、だけどね。あんまり鬱陶しいと切れるかもしれないけどさ。

やれやれ、という呆れた気配と、少しばかり寂しさを含んだ笑顔がゆっくりフェードアウトしていく。

…某早朝の体操のテーマソングを歌いたくなったわね。



数日後。

お三方曰く、ありとあらゆる「ツテ」を使い、旅支度が整った。驚いたことに私のドレスも数着新しく用意されたのだけど、これは子爵婦人である、キャサリンの口利きがあつたらしい。「権力とはこう使うものですわ」と、にっこり微笑んだ彼女は、海千山千の貴族社会で生き抜いてきた逞しさを持っていた。

そんなある日、宿を訪ねてきた相手に私は苦笑を向けるしかなかった。手にした一通の手紙に目を通したため息をつくとき、宿のご主人に許しを貰って、時間外の食堂の一角に腰を下ろした。

「兄上に聞いた…旅に出る、と」

また、情報が筒抜けですか？ってどうか、どつから洩れた？いや、考えるほどのことでもないですね、やっぱり守秘義務を設定すべきだ、ギルド。

「あの男と一緒にいくのか？」

「はい」

にっこり笑顔で応じる。本当は他にも同行者はいるけど、わざわざ話すことでもないしね。

「愚かだと思うか？引導を渡されたのに、追う俺を？」

ずるい言い方をするとおもう。別に嫌っているわけじゃないから、

こういう問い方をされると答えに困る。ここで「愚か」と言ってしまうには、彼とその周辺に関わりすぎてしまった。

「人が人を思うことを愚かしいとは思いません。与えてくださるお気持ちには感謝をいたします。しかし、私には受け入れる事ができません」

いや、この場合、はっきり「嫌い」と、言ってあげたほうが親切なんでしょうか？

「あの男のせいかな？」

あの男：多分ウォルフさんの事だろうな。まあ、男と旅に出るって言ったら、そっち方向に結びつけるのも無理ないかな？でも冒険者ギルドの規律って結構厳しい。合意の下でなっただとしても、違約金を取られる。勿論双方からだ。言い換えれば、依頼者は、契約金に加えて違約金を取られ、冒険者は報酬を貰えない上、違約金を取られるという、踏んだり蹴つたりの結果になるのだ。

ちなみに、黙っていれば解らない、という考えは持たないほうが身のため、とギルドのおねーさんが意味ありげに笑った事がある。レーエンさんに訊いたら「知らないほうがいいと思うよ…多分」と言われた。

まあ、今回の場合、依頼者は別にいるようで…だから、皆非雇用者側だったりするけどね。

「ロウエンの騎士団にお戻りになられると、キャサリンさまのお手紙には書かれておりますが？」  
とりあえず話を逸らしてみる。

「ああ、一兵卒からやり直して来い、と義姉上から言われた。戻る前にもう一度会って話したかったのだ」

正直一兵卒っていうのは無理な話だろうな、と内心思う。まあ、降格とか何らかの処分はあるだろうけど。

「エイダによるしくお伝えください。騎士団の皆様にも」  
では、と立ち上がって去ろうとして、ふいにその手を捕まれた。

「リーリア」

…いい加減にしろよ。喉まででかかった言葉を飲み込む。こんなイオトコにここまで想われて、何故に？と声が聞こえてきそうだが何とか堪えてそちらに視線を向ける。

ああ、これは思慕の瞳だ。

ふいにそう思った。彼に感じていた違和感。それは恋するものの熱さではない、切なさを含む母を追う瞳。そういえば、幼い頃に両親を亡くし、兄と姉を親代わりに育ててきたとキャサリンが教えてくれたっけ。

だからといって、口説いている相手に向ける視線じゃないわな。本人無自覚だろうけど。

そこで、同時に気が付いてしまった。レンやレギオン、ブランやシユルツ、ヴィダやキャサリン。彼らに対して持っている「母親」としての気持ち<sup>ヒト</sup>が彼に…いや、彼だけじゃないな、きつとウォルフさんにもだろうけど、持てない。獣人は自分が設定した人種<sup>ヒト</sup>じゃないからだろうけど、同族にもとはね。笑えるわ。

このガキが。こうなると音叉を返却したことが悔やまれますな。ヴィダに出張らせれば一発で終わるのに。

「…いい加減になさい」

静かな、というより何か黒いものを背負っているような声が背後から聞こえてきた。振り向いた私の瞳に映ったのは、目の前の存在の義理の姉。

「キャサリン」

助かった。思わず大きく息を吐く。手が離されたことに気が付いて彼女の傍へといった。

「アナタ」

おや？いらしたんですか？閣下。なんて、いい加減私も失礼な奴だな。

『あの事を伝えたら離れなくなっただんですの。ごめんなさい、おかあさま、愚弟がご迷惑をおかけしました』

腕に手を置いて『声』を伝える彼女に小さく笑ってみせた。…やっぱり、この子は可愛いわ。大事な私の娘。

『ありがとうございます。私も大好きですわ、おかあさま』  
きゅ、つと一瞬手を強く握ってキャサリンは笑みを深くした。

「申し上げたはずですわね。リーリアの事は彼女たちが旅立ってから話すように、と。ワタクシの手紙も執事に預けたはず」

「…すまん。だが、キャシー」

「言い訳は結構ですわ。弟が可愛いのは結構ですが、その結果がこれでは、私フランドル公に顔向けができません」

おお、おっしゃいますねえ。この場合、全面的に悪いのは聞き分けの無いおぼっちゃまでしょうに。『そうですわね』と、笑うと彼女の視線は、義理の弟へと向けられた。

「確かに無理に諦める事は無い、と言いましたけどね」

おい、キャシーさん、そんなことをおっしゃったんですか？

「こつも言っただはずですわね。大人になれ、と。彼女を黙って包み

込み護れる男になれ、と」

一生無理なんじゃないっすか？

ちなみにキャサリンとは手を握ったままなので、こっちの思考は洩れまくっておりますが。情けない顔をした彼女を周囲がどうとったのか、子爵閣下が大きく息を吐いて弟を見下ろす。

「キャシーの言う通り、彼女の情報をお前に与えたのは間違いだったようだな」

「兄上」

「お前とて多少魔力を持つ身。彼女の傍に居る者が何者か気づかなかったのか？そこまで目が曇ったか」

へ？と思って辺りを見ると、少し離れたところでウオルフさんが苦笑しているのが目に映った。：旦那、黙って見ていたんですね。お人が悪いですぜ。お礼は後できっちりさせていただきます。ってね。

「ウオルフ殿、だ。豹のウオルフ。名前だけならお前も知っておる」

弾かれた様に、って表現を良く使うけど、きつとこういうことを言うんだ、って動きで、副隊長さんはウオルフさんの方に顔を向けた。それ以前にご存知だったんですね閣下。結構あなどれねえ。

「色々な面で鍛えなおす必要がありそうだな。：迷惑をかけた」  
最後の言葉は私に向けてのものなので、腰を折り、頭を下げた。目下のものに謝る事ができる…素晴らしい美德ですね。



さすが、キャサリンの旦那だわ。

『ありがとうございます』

いえいえ、どういたしまして、ってね。

一瞬、何か言いたげな視線を私に向けて、立ち上がった副隊長さんは軽く頭を下げると宿の外へと出て行った。

「ごめんなさいね、リーリア。…気をつけて」

「はい、キャサリンさまもご自愛ください」

笑って手を取ると、軽く背中に手を回した。

（体を大事にいい子を産んで頂戴）

『はい、おかあさま』

笑顔を見せて、彼女は夫である子爵閣下に連れられ宿を出て行った。

あーやれやれ。

初めての野営。基本的な料理のノウハウは、王都の宿の料理人に教えてもらった。

しかし、目の前に置かれた、彼らが狩ってきたた『もの』を見て、思わず固まってしまった。

：丸ごとの大猪もどき。某アニメ映画に出てこられた大物俳優アテレコの猪さんという勝負の大きさだ。

いかん、現実逃避したがつている。

だって、パック肉の世界の人間ですよワタクシ。自慢じゃありませんが、ウサギどころか、鳥だって捌けません。クリスマスに売られる丸ごとチキンなんて買おうとも思いませんもん。

固まってる私を訝かして、レーエンさんが声を掛けてくれたから、正直に申し上げたら、「なんだ、そんなこと」と笑うとエルグさんの背中にあつた剣を抜いて、あつという間に部位ごとに分けてくれた。途中からは、エルグさんも一緒に。流石というか、何と云うか、見事としか言いようのないお手際です。

これで、料理ができるってモノです。魚はね、捌けるんだよ、一応鰯みたいな大物は無理だけど、鯛程度の大きさなら何とかできますです、はい。

ちなみに、この毛皮結構良いお値段で売れるそうで、エルグさんが水の魔法で綺麗にしていらっしやいました。うーん、生活に根付いた魔法って便利だわ、うん。

自分が作った料理を、笑顔で「美味しい」と食べてもらえるのは嬉しい。そういえば、旦那はそういうことは言わなかったな、と思いつく。子供たちはきちんと言ってくれてたんだけどな。指摘すると「残しちゃいないだろ？」って、なんかねえ。外食した時なんかはあれは旨かっただの、これはいまいちだったとか、よく言っていたのに。

麦はあるので（何故米が無いっ）パンは有る。しかし、携帯用のパンは固い。唸っていた私に料理人さんが教えてくれたパンもどき……いや、むしろ「ナン」だよ、これ。練った小麦を火で熱く焼いた石に貼って焼いたもの。

味噌があつたら、牡丹鍋にしたいところだけど、そういうわけにもいかないから、ハーブを使って、臭みを消し、焼く。生で食べられる野草（と、というか薬草の一種。解毒作用があるんだって）と果物でサラダもどき。…酢はあるから、今度マヨネーズを作ってみよう、とひそかに決意する。

どう考えても（特に肉）10人以上有る料理はきれいさっぱり無くなった。お粗末さまでした。

近くに川があつたので、お皿なんかはそこで洗う。正直、煮沸したお湯とか欲しい所だけど、まあ良しとしましょう。

この世界には「結界石」という物があつて、普通に市場に売られている。魔法使いが魔力を込めて作ったもので、四方に置くとその場を囲うように結界が生じるんだそうだ。作った魔法使いの魔力にも寄るけど、足止めと警報装置を兼ねたカンジ？

エルグさんが、吟味に吟味を重ねて購入したのは、相当強い魔力が込められている物だった。なんか、作ったのがエルグさんの知り合いらしい「呆れた副業だ」と笑っていらしたが…魔道具を見て作り手が分かるなんて、流石です。

それでも、一応交代で火の番。私もやると言ったら、笑顔で皆に却下された。しかも、なんだかとてもなく怖い笑顔だったのは気のせいだろうか？

馬車の中で雑魚寝。幌馬車みたいな形で、中は、部屋みたいなつくりになっている。結構大きいんだよね。体の大きなエルグさんや、ウォルフさんと私たち二人が寝転んでも、十分余裕がある。貴重品以外の荷物は、外側にくくりつけておくんだって。

畳みたい、というか、これは寧ろ畳だよ！偉いぞ自分、日本文化万歳ってな。…なんだろう、今一瞬、レンの呆れ果てた顔が脳裏を過ぎった気がする。ま、いつか。があって、その上に薄地のラグマットみたいなものを敷いている。

本当は、それやると湿度なんかの関係で畳には良くないんだよね。黴も生えるしさ。

馬車は、馬もどきが二頭で運ぶ。

こっちの動物って、向こうの世界の亜種、というか「もどき」なんだよね。獣人の本来の姿が「そのまま」だからかも知れない。

豹に狼、ライオン。流石にキリンとか象とかはいないけど、熊鷹とか白頭鷲、爬虫類も何種類か…お目にかかった事は無い。

一部、体が元の姿の人たちは兎も角、完全に変形していれば、普通のヒトには分かりませんからねえ。

私たちの馬車を運んでくれているのは、大雑把に見れば道産子。北

海道にいる、あの大きな馬、ね。でも蹄じゃない。なんつーか恐竜の足っぽいカンジ。尻尾も毛ではなく、恐竜の尻尾みたいな物で、これで外敵をたたくのだそう。だから、後ろからは決して近づかないように、と言われた。ってか、あつちの世界でも馬の背後から近づく馬鹿は居ないと思うんだけどね。

ちなみに、この馬もどきは非常時に騎獣として使うつもりで選んできたらしい。軍馬としての訓練も受けたことの有るコ達なのだそう。

こういった事を色々鑑みてみると、私という要素が加わった為に、相当散財させている様な気がする。それを口にしたら、レーエンさんに一笑された。

「準備金の額が半端じゃなかったんだよ」

確かに、ウォルフさんに見せてもらった金貨の額は凄かったけど。

「それにね」

意味ありげな笑いを浮かべて、レーエンさんは続けた。

「ウォルフって、ああ見えて金持ちなんだよね」

「ああ見えて…ってレーエンさん」

「家はね、アタシとエルグの食費や道具で使っちゃうけど…アイツ独り身でしょう？使い道が限られるんだよね。あんまり使うタイプでもないしさ。でも、特Sふたつ持っているから、報酬も半端じゃない。仕事をやらなくても、十分遊んで暮らせるくらいは持っているはずだ」

それは凄い。と私が笑うと「だから」と彼女は言う。

「貢げる相手が見つかって、少しは働き甲斐が出たってものさ」

貢げるって…用法間違っていますか？そう言つと、少し首を傾げ、振る。

「いや、貢げる相手さ」

否定要素も、誤解要素も山ほど有るけど、止めておいた。迂闊な事

を言っ て墓穴を掘らないとも限らないし、この様子じゃ、何を言っ  
ても、言い訳にしか聞いてもらえなさそうだったから。

余談ではありますが、始めてあつたところに比べると、レーエンさん  
の言葉使いが、砕けたものになっています。ご本人曰く「化けの皮  
が剥がれてきただけさ」だ、そうですね、なんだか嬉しいと思っ  
てしまふんですね、これが。

旅の間のトイレ事情は聞かなくてください。多分、ご想像の範疇だ  
と思いますです。

今まで触れてこなかったけど、一応シエロンにも季節は有る。それ  
なりの大きさの国なので地域によって環境は異なるけどね。

ぶっちゃけ、地球と大差ないと思っ てください。すみませんね、設  
定者がアバウトなんで。

今の季節は、初夏。王都の周辺は気候が日本と似ているかな？王都  
と違っ て、小さな村や町は、下水は兎も角、水道は普及していない  
から、基本井戸水。でも、ここは科学の変わりに魔法が発達した世  
界だから、そこかしこで、そういった道具が活躍している。

一般世界の細かい設定なんかしていなかったの、びっくりするこ  
とが沢山だ。井戸水も、くみ上げて大きな瓶に溜めておくのだけど、  
水を浄化する魔道具があつて、いつも綺麗に保たれているのだそう  
だ。自分の考えた外枠に沿っ て、世界が発達すると、こうなるんだ、  
と感心を通り越して感動してしまう。

ここはもう、私の考えた「ヒースキングダム」ではなく、ひとつの  
独立した世界だと。

子供の親離れを見ているような寂寥感と喜びと。

そんな思いで旅を続けている。

## 2 (前書き)

流血表現があります。ご注意ください。



最初に気がついたのはウォルフさんだった。軽く眉を寄せた後、豹頭へと姿を変える。レーエンさんが剣を取り、エルグさんが立ち上がる動作の流れで大地に手を着く。ウォルフさんが耳を動かす。どうやら、人型よりもこちらのほうが耳が良いらしい…不思議だ。

旅を始めて二週間余り。幸い天気にも恵まれたし、野宿にも慣れた。そんなある夜のこと。

「結界石が壊された」  
静かな声でエルグさんが言うと、ウォルフさんが頷く。その視線は、ある一点から動かない。

相変わらず無詠唱で結界を張ると、私を馬の背に乗せる。  
旅に出るにあたって、私は彼らにひとつの条件を出した。それは、有事の際優先すべきは、それぞれ自分の命だと言う事。渋る、というより拒否する彼らに私は首を振った。

最終的に足手纏いになるのは私だ。お互い助かれば良いが、自分を助けるために相手が犠牲になるなんて真っ平ごめんだ。

自分が犠牲になるつもりもないけれど。

「後先構ってられない状態っていうのは、本当にぎりぎりの局面

だと思っんです。だから、自分の命を最優先してください、ってだけのことです」  
それでも、となお食い下がるレーエンさんに「じゃあ、馬にでも乗せておいて、万ーの場合はお尻たたいて逃がしてください」：「なんて言ったのがまずかつたんだろっなあ。この状況。  
言っておくが、私は馬なんか乗ったことが無い。：いや、全く無いわけではないけど、インストラクターが最初から最後まで付いてくれた体験教室での話だから、初心者といっても問題は無いと思う。」

けれど。

何かを察知した馬を落ち着かせる為に、軽く鬣を撫でながら、考える。

そんな事態になったのならば、自分も生きては居まい、と。

次の瞬間、すごい勢いで結界が破られ、皆の視線の先にあらわれたのは、妖艶な美女だった。

「やはり妖魔か」

もう一度、今度は私の周囲を重点的にエルグさんが結界を張る。

妖魔。

設定はしたものの、その姿を見るのは初めてだ。外見は魔族特有の美しさをもっているが、その瞳はどろりと白く濁っている。

それが妖魔や陰魔の特徴だと教えてくれたのはブランだった。

にやり、とその紅い唇を歪めて妖魔が嗤う。

レーエンさんが剣を構え動く、ざしゅり、と嫌な音を立てて妖魔の体に赤い線が走り、そこから血があふれ出す、全く気にした様子も泣く、ゆらゆらとした動きで近づいてくる。

イタイ。

「くっ」

エルグさんが、手を広げると風が唸りを上げ渦を巻く。そこから真空の、いわゆる鎌鼬が発生して妖魔の服を切り裂くが、それを瞬きひとつの動作で沈めてしまう。

「やはり、魔法攻撃は効かないか」

間合いをつめウォルフさんが剣を振るうが、今度はあっさり魔法防御ではじかれてしまう。その隙を狙って、レーエンさんが飛び掛るが、風が邪魔をして近づくことができない。

イタイノハイヤ。

強い。魔族一人をどうにかしようと思ったら、一個師団が必要となる、というのは決して誇張された言葉じゃないことがわかる。

意を決したように、ウォルフさんが剣を右から左に持ち替えた。それと同時に、レーエンさんとエルグさんが動いた。

何が起こったのかよくわからなかった。袈裟懸けに切られた妖魔がどう、っという音を立てて地面に倒れこんだのが目に映り次いで、止めを刺すべくウォルフさんが剣を垂直に構えたのが目に入った。

ヒトガイタイノハ、モットイヤ。

後になって何度思い返しても、自分自身何が起こったのか、どうしてあんなふうに動けたのか解らない。

気が付いたら、私は体ごと妖魔を抱き抱えていたのだ。

「リーリアー!」

寸前で剣をとめたウォルフさんが驚きに目を見開いて私に叫ぶ。  
「どけ！まだ『ソレ』は生きて…リーリア！」  
魔法を発動しようとしたエルグさんの体が、金縛りにあつたように止まり、レーエンさんも驚愕の表情を浮かべている。  
ちり、とした痛みは首筋にあるものの、その牙は私の喉に食い込んではいなかった。

『……………ま？』

微かに震える「声」。魔族と私をつなぐホットラインのような表層意識の疎通。

剣の位置を動かさず、ウォルフさんの動きも止まる。

彼女の瞳が、どんよりとした白い色から本来の色に戻っている。

(綺麗なブルー。空の瞳の色なんだね)

膝に頭を乗せて、彼女の髪を梳く。ばさばさになってしまっているが、元は綺麗な赤い髪だったのだろう。

『一緒にいたかったの。彼と一緒に痛かったの』  
容姿に似合わぬたどたどしい口調で彼女は言う。

『だから、私の中に彼を入れたの。彼の全てを私の中に閉じ込めたの』

遠い昔に読んだ話の一説を思い出した。鬼にとって究極の愛情表現は「喰らう」ことだと。生きる時間が違うゆえに、愛した者を自分の一部とするために喰らうのだと。

『解っていたの。ちゃんと解っていたから、遠い山の中で、一人、

時間が私に追いつくのを待っていたの…なのにつ！」  
ふいに脳裏に浮かぶ映像。魔力を奪う拘束具を持った数人の男たち。真っ黒な袋に入れられ、どこかに連れて来られ、無理矢理何かの肉らしきものを食べさせられ…。

『逃げたの。自分が自分じゃなくなる前に。でも、そのうち意識がなくなつて…気が付いたら、血溜まりの中に居て…わたしっ』  
そつと頭を撫でてやる。彼女の瞳の色が戻ったことで、とりあえずレーエンさんは剣を収めたけど、ウォルフさんは構えたままだ。

周囲から見れば、瀕死の妖魔を膝に抱いて最後を看取ろうという姿にしか見えないだろう。こうして触れ合っていれば、表層意識の疎通は、基本他者には気づかれぬ。魔族の上位者ならば、会話を漏れ聞くことくらいできるかも知れないが。

『ごめんなさい、おかあさま』  
涙をためていう彼女に、私は首を振る。

『…お願い、聞いてくれる？』  
震える腕で、彼女が動く。ぴくり、と背後のウォルフさんが反応した。そんな彼に視線を移し、再び私へと向き直る。腕を伸ばし、私の顔を引き寄せた。

「…お、ねが…い。彼の元へ」  
「マーサッ」

彼女の名前を読んだ私に、彼らの視線が集まる。「知り合いだっただのか？」と、レーエンさんの呟く様な声が耳に入った。

『お願い、おかあさま』  
唇をかみ締める。此の仮生き延びたところで、彼女の未来は閉ざさ

れている。

「…ウォルフさん」

顔を上げ、琥珀色の瞳を見つめる。それだけで、全てを察した彼は、首をひとつ縦に動かすと垂直に構えた剣を上に向けた。

『おかあさま』

(なあに?)

無理矢理笑顔を作る。できれば笑って送ってあげたい。

「だあいすき」

それは、子供が母親に向ける純粹な思慕の声。

「私もよ、マーサ」

どしゆり。

花が綻ぶような笑顔のまま彼女は愛しい男の元へと旅立った。

### 3 (前書き)

多少15禁的な表現を含みます。

正直、ここからの記憶はひどく曖昧で。

覚えているのは、動けずに居た自分を抱き上げる浮遊感と、鳥肌が立つほどの快感と、切り裂かれるような痛み。

気遣う、低い声。

気が付くとベットの中に居ました。シーツの肌触りから、素肌に直接接触していることが解る。そして、自分の体に起きたことも解る。

ある意味経験者だからね。

起き上がるうとして…立てませんでした。向こうと違ってこっちの体は初心者なんだ。節々が痛んで起き上がれないって…体中がべとついているからお風呂に入りたいんですけど、しくしくしく。いかん、現実逃避したがつている。と、いうか混乱している。あきらめてもう一度ベットに横になる。そこで、初めて気が付いた。こっつて、スイートもとい、貴賓室クラスの部屋じゃないですかっ！？

と、突然隣からくつくつと可笑しそうな笑い声が聞こえて、胡乱な視線を向けると、半身を起こしたウォルフさんが笑っていた。笑ってはいるけど、視線はどこか心配そうな気遣うものがあった。豹頭の時と同じ物言う視線。



どうでもいいけど、やっぱり良い体してますね、おにーさん。鍛え上げた筋肉がまぶしいです。写真や映像では見たことありますけど、割れた腹筋なんて初めてナマで拝見させていただきましたよ。

「なんですか？」

ち、喉が痛い。どこまで啼かされたんだ？歌い手にとって喉は生命線なんだぜ？

ひやり、と冷たい感触が頬に当たって、冷水を入れたコップが差し出された。サービスいいですね、おにーさん。

礼を言つて受け取る。赤蜜柑、は流石に入っていないけど、柑橘系が入った水が美味しい。そうか、貴賓室だと水までワンランク上なんだ。

「いや、思ったより落ち着いていると思ってな。半ば強引に事に及んだから、もつとパニックを起こすものと思っていた」

まあ、別の意味で慌てていたようだがな、と余計な一言を付け加えてくださいました。

初心者を相手にしたからですか？いいですけどね、貞操観念薄いですし。それに、相手が誰だったか位、薄々気づいていましたから。

…旦那の顔が浮かばなかった、といえば嘘になるけど。

「繋ぎ止めてくださつたつて理解していますから。…ありがとうございます」

「礼を言われるのも妙だが…まあ、お互い様、としておこう。大丈夫か？」

この場合の「大丈夫」は何を指して言うんだろう。体だよな？この会話から察するに体だと思っていよいよね。だったら答えはひとつ。

「大丈夫、じゃないです。筋肉痛です。そして、お風呂入りたいです」

ふむ。少し考えるようなそぶりを見せたウォルフさんだったが、立ち上がって（おお、良いお体！）私をそのまま抱き上げる。これは王道「お姫様抱っこ」ですね。流石に旦那にもやってもらったことないです。（どこからか、『無理言っんじゃない。自分の体重を考  
えろ』って声が聞こえた気がするけど）

お風呂はすでにお湯が張ってありました。…違う、これ温泉？微かに硫黄の臭いがする。

ゆっくりと湯船に沈めてくれたウォルフさんに礼を言うと、笑って「出たくなったら呼べ」と言われました。

お風呂だ〜しかも、温泉だあ。

暫く入っていると、筋肉が解れて、体が軽くなってきたのが解る。温泉ぶらばー！。

腰の様子を探してみると、まだ痛いけど動けないほどではない。ゆっくりと立ち上がり、洗い場に出ると髪を洗う。いい部屋だと石鹸も上物ですね。普通の宿に比べ香りが全然違う。アメニティグッズなら遠慮なく貰っていくけど、この世界では石鹸も貴重品。ゆるゆると泡立てて、髪と体を洗う。

うーさっぱり。石鹸の質もいいです。髪の毛がごわごわしません。今度市場で探そうかな。多少高くても、こっちのほうが良いもんね。

もう一度湯船に入り、自分の両手を見る。腕の中で消えてしまった命、この喪失感は初めてじゃないけれど、痛む心には変わりはない。

向こうの世界で身内を何人が亡くしているけど、泣いた事はなかつ

た。：泣いたのは和哉を失ったあの時だけだ。全てを知っていた姉は、慰めの言葉など何一つ言わなかった。その代わり、罵倒も何もせず黙って一人にさせてくれた。あの時もホルの最上級の部屋のバスタブで一人泣いた。泣く事は、気持ち浄化させることだと良く聞くけど、否定できないと思ったのもその時。痛む心は自分で飲み込むしかない。時間が経てば忘れるとか、そういうのではなく、自分で折り合いをつけ、この先もやっていくしかない。そう思ったのだ。

ヒトや獣人と違い、基本生きることと血肉を必要としない魔族は、死んだら何も残さない。全てが大気に溶けてしまうのだとレギオンが言っていたのを思い出す。これは、母上の設定ではありませんねと、苦笑を滲ませて。

不思議な事に、身につけていた服や装飾品ですら消えてなくなってしまう。

流す血は赤いのに。

ついた血すら消えて無くなってしまふ。全てが還るのだと、レンは言う。だから、また逢えるのだと。

「だけど」

小さく呟いた言葉は、思いのほか響いた。

「この先、同じようなことが起きれば、危険に晒されるのは私じゃない」

意識せずに動いてしまっ、などと始末の悪い行動なら尚のこと。

「レンにでも言っ術を掛けてもらっしかないかなあ」

エルグさんに頼むのも一つの手だな、と考えて、よっこらしよ、と立ち上がる。結構長風呂しちったかな、と息を吐いた。

しかし、どう見ても和風の木の風呂桶に、どこからとも無く湧き出る温泉。どういう造りになっているのか気にならない訳ではないけど、説明されても理解できないだろうな、と思う。ほら、あれ、テレビがどうして映るのか。説明されても解らないのと同じだ。

広めの洗い場兼脱衣所。こっちの世界のお風呂って、大きさに差異はあるけど全体的にそんな感じ。

備え付けの布で髪と体を拭いた。流石にタオルなんて存在はないけれど、ある程度洗い晒した布は吸水性もそれなりにあったりする。

魔法で（ドライヤー効果の魔法は便利だから付けて貰った。風魔法の一種だそうだ）大雑把に乾かしてから、バスタオルサイズを体に巻きつけ外に出た。

お風呂から上がった私が思わず頭を抱えなくなったのは、おそらくルームサービスで取ったであろう山のような料理を前に、ウォルフさんばかりでなく、レーエンさんやエルグさんも居たことだった。

… お願いですから、そういつときはせめて着替えだけでも脱衣所に  
おいて置いてください。

この世代、というか年齢のお嬢さんなら、ここで「きゃー」とか、反応してバスルームに戻るところなんだろうけど、やれやれとため息ひとつ零して、「おはようございます」と頭を下げると、彼らの横を通り抜け、寝室に移動する。

いくら、さつきまで裸のお付き合いをしていたヒトとか、ご夫婦とはいえ、若い男のヒトがいる場所をいわばバスタオル一枚の姿で通り抜けるなんて若い娘のやることじゃないわな。なんて、思いながら入ると、先程までの惨状の気配は全くなく、シーツは新しい物に取り替えられ、ベットはきちんと整えられていた。部屋の隅においてある洗濯物専用の籠に無造作にいられたあるシーツを見て大きく息を吐いてしまった。…思わず自分で洗おうかと思って止めて置く。ギルドで調べ物をしたときに宿泊のシステムも読んだのだけど、スイートクラスの部屋になると、こういったサービスも料金の中に含まれていると書かれてあった。なら、遠慮なく使わせていただこう。恥ずかしいって言えば恥ずかしいけどね。

巻いていた布をそこに入れ、服を取り出し身につけていく。

しかし、このシーツ取り替えたのウォルフさんなんだろうな…別の意味で居たたまれません。旦那みたいにやりっぱなしで居てくれた方が良かったかも…ああ、いやいや、そんな罰当たりなことを考えたいけませんな。

ゆるく髪を編んで彼らが居た部屋に戻ると…うん、解ってはいたことだけで綺麗さっぱり山積みのお食料は消えて、私の分と思われるサンドイツチみたいな物と、果物に果汁が置いてあった。

「いただきます」と手を合わせ、食べ始める。彼らは何も言わない。あらかじめ話は付けてあるのだろう。なら、私が藪を突く事はない。ピタパンみたいな物に、野菜や肉が挟んである。うん、美味しい。そんな私の表情を読んだのか、隣や前から安心したような気配が漂ってきた。

「ごめんなさい。ご迷惑をおかけしました」

「まったくだ」

ため息をついてウォルフさんが口を開く。睨みつけるレーエンさんを意にも介せず、彼は私の頭を軽く小突いた。

「口に出して何か言えば、動きはするが反応は遅い、すぐにぼーっとあらぬ方向を見る。…傍で見ていて心臓に悪い」

「すみません」

そう言いながら、ああ、と目頭が熱くなった。私の迂闊な行動を容認して、他事に摩り替えてくれている彼らに感謝するしかない。

「あ、そうだリーリア」

もう、おしまい、と明るく言うと、レーエンさんが傍らにあった袋を差し出した。

「朝一で市場を回ってきたんだ。お土産」

礼を言つて受け取ると中身を見る。王都にもあった焼き菓子だった。王都まで一緒に旅をしていた時、食欲が無くて、これ位はと食べ

ていたのを覚えてくれていたみたいで、思わず笑顔で礼を言う。返されたレーエンさんの笑顔を見て、本当に心配をしてくれていたのだと解り、申し訳なくなる。一枚取り出して口にする。薄焼きクッキーに似た味と食感のそれは、今まで食べた中で一番甘く…苦かった。

果汁を飲んで一息つく。どこまで話すべきかの整理はお風呂でつけてきた。さあ、ここからは猫かぶり…違うな二枚舌…これも違う気がする。丸つきり嘘を言うつもりもないけれど、話せないことも山ほどあるからね。辻褄を合わせるための作為はやむを得ない…なんちゃって。

「私の魔力がたいしたことないのはお気づきだと思います」

話し始めた私に、三対の視線が集まる。うーん、緊張するなあ。若いころ社内のシステムについてとか、講習の一環にプレゼンがあつて所属の課に関係なくやらされたとき以上だわ。…まあ、一緒に組んだ営業が考え出したことを発表したただけなんだけど。

「ただ、生まれ持った能力で魔族とあるラインを共有することができます」

「ライン？」

首を傾げるレーエンさんに頷きを返す。

「相手が望めば、その光景を私も見ることができます。とはいえ、お互いに接触していなくてはいけません。ここですけど」

ここで言葉を切る、表向きはどう伝えようか迷った振りを。実際は、辻褄があっているか、相手が不審に思っていないか、確認する為に。



「マーサが最後に見せてくれた映像は、一人死を待っていた彼女を襲った複数のヒトでした」

飲まず食わずでただ一人、恐ろしいほどの飢餓感と戦っていた彼女を襲った複数の人物。意識が朦朧としていたせいか、はつきりと顔を見ることはできなかったけど、気配でヒトと解った。その為反応が遅れ、彼女は捕まったのだ。

余計なことは言わない。自分の主観も、マーサの事情も口にはしない。今はただ、事実を話すのみ。

「一度妖魔と化した魔族が、自我を取り戻す事は非常に稀だ」  
私の話に反応したのは、意外にもエルグさんだった。

「対峙する魔法使いの魔法が相手を凌駕し、ほんの一瞬ではあるが自我を取り戻すことがある、と聞いたことがある。…その殆どがその場で自ら命を絶つことが多いそうだ。もしくは、対峙した相手に殺してくれと願うかだ、今回のようにな」

遠い目をして話すエルグさんに何かが引つかかる。聞いた話、として語ってはいるけど…でも、それは私が口を出す事じゃない。

「極めて親しい相手が、心の琴線に触れてもそうなる、か。だが、いくら親しい相手でも、今回のような奇跡が起きるとは思っていないのだから？」

首を縦に動かした私に、ウォルフさんが大きく息を吐く。うつ…呆れられてしまいましたかね。ごめんなさい。

「少なくとも次からは、馬に乗せるんじゃないやなくて、縛り付けて置くべきだな。知った魔族なら同じ事をやりかねん」

すみません。できるだけ自重しますが、自信ありません。

「それに、問題もある。あの時オレはリーリアの周囲に結界を張っ

たんだ。迂闊に飛び出さないように。だが、それを易々越えて来たんだ」

へ？確かに結界が張られていたのは知っていましたが。対防御用じゃなかったんですか？

「気が付いていなかったのか？」

こくこくと頷く私に、エルグさんが大きく息を吐いた。いや、そんな疲れきったようなため息をお吐きにならなくても。

「無意識に妖魔が消したんじゃないの？リーリアに傍に来て欲しくって」

レーエンさんの言葉にエルグさんは首を振った。

「今まで意識したことも、その必要も無かったんだろう。結構対魔法の属性があるぞ。掛けられた魔法に対して無効、とまでは言わないが耐性が強い」

エルグさん曰く、私を抱き上げて馬車に乗せるときに防御魔法がかかったままだということに気が付いた、との事。妖魔が消してしまったものだと思い込んでいたから、自分自身が一番驚いたのだそう

チート能力は要らない、と言ったはずだぞ息子たち。

色々話し合う必要があるそうだわね。

## 5 (前書き)

色々飛びます。まとまりの無い話で申し訳ございません。

暇だ。

相変わらずの貴賓室暮らし。支度金が半端無い、というレーエンさんの言葉を裏付けるようだ。ちなみに、ご夫妻も準じたお部屋に泊まっていらっしやるとのこと。…一泊いくらするんだらう。

私が話したモーサの事は、どうやら彼らの受けた「依頼」と関わっていたようで、その連絡やら何やらで暫くこの街に逗留することになった。その為、他の皆様は忙しく動き回っていらっしやる。私だけ、蚊帳の外、とはいっても自分で望んだ事だから、文句は無いんだけど。

モーサと出会ったのは偶然か作為か。

あの子たちが私を危険に晒すとは思わないから、偶然、だらうね。もしくは彼女を使ってウオルフさんたちを始末しよう、と考えている人たちがいるとか。危険度MAXだしね。

…止めよう、余計なことを考えるのは…でも、暇なんだよね。

何が起こるか分からないから、と半ば軟禁状態です。でも、彼らが関わっている一件に妖魔が絡んでいるのなら意味無いと思うんだけどね。まあ、少なくとも迂闊な行動で彼らの邪魔になるような事はしないだらう、そう前向きに考える事にする。

開けた窓から風が入る。

ここの風は、私に応えてはくれない。

妄想：ある程度想像力豊かな子供時代を過ごされた方なら、誰しも経験はあるだろう。人形やぬいぐるみを、まるで生きているかのよう話し相手にしたことが。それが高じて、さも相手が生きているかのように振舞って「会話」することが。私の場合、その相手が「風」だったのだ。客観的にみれば、結構イタい性格だけど、それを声にするほど世間知らずではなかったから、あくまで心の中だけで。

よく旦那が冗談半分で私の事を「風を読む奴」と笑って言っていたが、子供の頃から、有る意味風を観察していたようなものなので、風に含まれている湿度や風向きで、天気を予測するのは難しいことではなかった。

的中率、70%程度は悪くない結果だと思う。

風と会話しているつもり、はやがて人格を持ち、一つのキャラクターを作り上げた。そういう意味ではレンたちよりも古いキャラだと言えないこともないが、私にとって彼らはキャラクターではなく友人だった。

だから、この世界に降り立ったとき最初にしたことは風に語りかける事だった。

結果は…応えはなかった。それだけだ。

確かに、向こうでも声に出して応えてくれる、とかテレパシーみたいに『語って』くれたわけではない。

自分の中の妄想で創った相手なら、世界を別にしようと思えてくれるのが道理。それが無い、ということは、あちらの世界でのみ存在する「何か」だったのかもしれない。幽霊は見たことはないけれど、妙なところで霊媒体質があったせいかな、そっち方面を否定することはなかったからね。

ただ、無性に彼ら 子供の頃に読んだ児童文学の影響か、なぜか気が付いたら男性キャラだったけど 会いたいと、そう思った。…やっぱり、暇なんだよね、うん。

「ウォルフで良かったの？」

あんまり暇なので、以前市場に行った時見かけた物をレーエンさんに頼んで買ってきてもらった。

編み棒と毛糸、じゃないですね。太い綿糸のようなもの。手芸一般は壊滅的な腕だけど、唯一編み物だけは得意だったんだよね。あんまり複雑な模様編みは、途中で妙な具合になるけれど。季節柄サマ―セーターでも編もうかな、うん。

突然言われた台詞に、思わず顔を上げると、レーエンさんの困ったような笑い顔とぶつかった。

「いや、初めてだったと思うから…あの男より、レックス家の弟君の方が良かったんじゃないのかって」

なんで、そこで副隊長さんが…まあ、いいですけどね。ちなみに、ウォルフさんと肌を合わせたのは、あの時だけ。

キングサイズのベットは殆ど私が独り占め状態だったりする。…朝方戻ってくるウォルフさんから、ほのかに香る香水にだいたいどこへ行っているかは想像がつくので黙っている…別に私はどっちでも気にしないんだけどね。ただ、いくらお金持ちだからって、毎晩もつたいないなあ、とは思ったりする。いつそのこと自前で別の部屋を取ろうかな、と考えても居たりするんだよね。

「ウォルフさんで良かったです。正直、副隊長さんのような方は苦手なので」

軽く見開かれた目に、今度は私が苦笑する。確かにね、普通に考えれば副隊長さんの方が優良物件だろうね、容姿も身分も性格的にもそして何よりこっちを想っていてくれる、その気持ちの大きさも。

「…以前、よく似た人を好きになったことがありました」  
そっと外に目をやる。レーエンさんは黙って聞く体制に入ってくれた。

「優しくて、見た目も素敵な人で、家柄も良くて…一生、その人と生きるんだと、そう思っていました」

小さな歯車の食い違いは、やがて全てを巻き込んでいった。  
選ぶべき選択を私にゆだねたのは、彼なりの思いやりだったと思う。人に任せるのではなく、自身で掴み取れ、と。家柄の違いや周囲の思惑、自分たちの置かれた環境全て。その気になれば乗り越えられ

ない事ではなかった：そういう時代ではなかったはずなのに。それでも、人の中に格差は残っていた。そういう世界だった。

「結局、負けちゃったんだと思うんです。周囲に、というより自身に：ひよっとしたら、全てを乗り越える力になるほど、彼のことを想っていないかったのかもしれない」

結果として、彼は去り、そして、私は「あの子」を喪った。

「それに…」

くすりと小さく笑う。…いや、「嗤う」だ。

「『歌姫』などと呼ばれていても、私は『姫君』じゃないので騎士はいらないです」

首を傾げるレーエンさん。うわ、可愛い。こういう姿を見ると、本当に年齢疑いたくなるなあ。

「護られて喜ぶ、ってわけじゃ無いって事です。護って死なれるより、見捨ててくれたほうがいいです。そうしたら、どちらかの生存率が高くなる…って、どうか只の自己満足です。自分が罪悪感にまみれて生き残りたくない、って奴ですから」

「ああ、それ何となく解るよ。アタシもエルグに護られて生き残るより、一緒に死んだほうがいいからね」

それは、少し違う気がするけど。

副隊長さんにはきつと解らないだろう。護りきる、ということとは自分も生き残ることが前提だ。散る潔さはいららない。どれだけ汚濁にまみれても、残らなければ意味が無い。あのヒトは「騎士」だ。「戦士」では無い。だから、自己満足に浸って死んでいくだろう。残



されたものの危機も知らず。

「だから、私はウォルフさんがいいです。…あ、でも、レーエンさんが男性だったら、そっちのほうが良かったかも」

笑いながら言う「もー、このコはっ！」とレーエンさんが抱きしめてくれる。タイミングよく戻ってきた、ウォルフさんとエルグさんが何事かと呆れた顔をしていた。

「もしも」を考えるのは嫌いだ。喪った者は還ってこないし、過去だって覆すことなどできやしない。それは「今」の自分ではなく別の次元の違う「私」だ。

人生の上書きなど、ゲームの世界だけ。今の私は「リーリア」であって、「私」じゃない。

## 5 (後書き)

週末暇なしなので。

お約束の過去の話は、別の「閑話」としてアップします。

## 6 (前書き)

Side ウォルフ、というところ。  
そのいち、です。

今回も色々飛ぶので、読みづらいと思います。ごめんなさい。

「遊びだったら許さないよ」  
剣を喉元に突きつけ、眦をあげるレーエンに俺は両手を挙げることで応えた。

過大評価をするつもりは無いが、彼女の腕では俺は倒せない。エルグというサポートがついたとしても、だ。  
だが、ここで彼女と争うつもりは毛頭無い。そして、彼女の言葉に異を唱えるつもりもない。

「遊びじゃないなら、いい」  
エルグの言葉にレーエンが剣を引くと大きく息を吐き出した。まあ、無理も無いだろう、俺に剣を向けるということがどういうことか、知らない彼女たちではない。

しかし、それを押してまで行動に移すほど、こいつらは彼女を気に入っている、ということになる。普段の彼らからは到底考えられない事だが、自分にも思い当たる節がある為か何もいう事はできない。

「今更、愛だの恋だの青いことを言うつもりは無いけどさ」  
おい、何を枯れたばあ…もとい、年老いたご婦人のような事を言っているんだ？俺から見れば、お前たちだってまだまだ若造だ。  
「遊びじゃなきゃいいんだ。リーリアだってそんなことを望んじやない」

「そうだな…リーリア自身も言っていた…繋ぎ止めてくれて感謝する、とな」

妖魔が消えて、大気に溶けた瞬間、自分の掌を見つめたまま動かなかった彼女を思い出しぞっとする。声を掛ければ反応はするが虚ろな瞳は何も映してはいなかった。ただ、言葉に反応するのみ。それは、まるで糸の無い操り人形を見ているような不気味ささえあった。正直怖かった。無反応に近い彼女を見ていて、恐怖と同時に腹立たしくなった。何故、自分たちを見ないのか。泣きそうな顔のレーエンも口を一文字に結んだエルグも…俺も彼女の視界に入っていないかった。

彼女を呼び戻すため、といいながら強引に事に及んだのは、彼女の瞳に再び自分たちを映したいからだっかたも知れない。

今回、俺たちが受けた依頼は、ここ暫くで急に増えた妖魔の調査だった。相手が相手のため俺たち3人が組まされ、リーリアが選ばれた。

彼女に白羽の矢をたてたのはステアだ。グランドの筆頭魔道師は、その立場の視点から彼女を旅の表向きの顔にすることを薦めたのだ。

「大丈夫だよ、彼女にはとんでもない護りが付いているからね」

それが誰かは教えてはくれなかったが、彼女自身、その守護者を呼ぶことは稀であることから、ぎりぎりまで俺たちに護るようにとも言い添えてはいた。

彼女と俺の髪と瞳が似たような色合いだから、兄妹の擬態が組める、といったのも実はステアであった。

そんな奴のことだから、リーリアに魔族の知り合いがいる事位承知の上だったろう。実際、シェロンの宰相補佐の奥方とも知り合いのようだったし、使い魔に化けてまで彼女を護っていたのは半魔だった。

そして、彼女から聞いた話は、ある意味俺たちの依頼人たちが想定した話を裏付けるものであった。

「やはり、ヒトが絡んでいるか」

苦虫を噛み潰したようなエルグの声に知らずため息が洩れる。急な妖魔の増加に何らかの組織が関わっている。

それを探るべく専門の冒険者を何人が向かわせたが、彼らの消息を聞くことはなかった。遺体すら見つかっていない。

『ヒトはどこまでも愚かだ』

魔族の友人の言葉がふいに過ぎる。

『どこまでも高潔であろうとするものも居れば、どこまでも闇に堕ちていく者も居る。だからこそ、神々は関わることを止めたというのに』

確かにヒトは愚かだ。己が欲望と目的の為に平気で他者を踏みにする。

そして、それを阻止しようとするものもヒトなのだ。魔族は基本他者には興味を持たない。彼らが興味を示すのは、伴侶と家族、ごく僅かの友人関係。しかし、それすらも持たずに一生を終える魔族もいるときく。

そんな彼らが最後に許す相手としてリーリアを選んだというのは、彼女と、あのマーサとかいう魔族とよほど強い絆で結ばれているのだと考えられた。

「…気になるな」

ぼそり、と呟くように言うエルグに俺とレーエンはそちらに視線を向けた。

「フランドル公のおっしやるリーリアの守護者だ。…傍についていた使い魔の二人、半魔と言っていたな？」

エルグの言葉に俺は頷く。自分たち獣人は種族にもよるが総じて「鼻」がきく。彼らから純粹な魔族の匂いはしなかったその代わり、かすかに匂う「ヒト」の気配。

「あのと時の会話で片方が『ブラン』と呼ばれていた。俺の知るなかで、その通り名を持つ半魔はただひとり」

「『白虹の炎魔』か!？」

記憶にある名前を思わず叫ぶ。

こくり、とエルグが首を動かす。流石にレーエンも顔色を無くしていた。四大半魔と呼ばれる実力者。神々の傍らに在る事を許された者。

「そして、もうひとり…あの色合いを持ち白虹と対等に話す、となれば考えられるのはただ一人…『漆黒の風魔』」

言葉に詰まる。四大半魔のうち二人に護られていたとは。そうなれば、リーリア自身が何者か、という疑問すら起きる。

「でも、さ」

大きく息を吐きながらレーエンが言う。

「なんていうか、友達、みたいな感じだったよ、リーリアも『姫君』なんて呼ばれていたけど、結構遊ばれていたみたいだったし」

確かに。最後の彼らのやり取りは主従というより友人同士がふざけたようなやり取りだった。

「だが、ステアが口を割るとは思えんな…アイツに訊いてみるか？」二人とも俺に魔族の友人が居ることを知っている。しかし、彼らは同時に首を振った。思惑はそれぞれ異なりはしたが何となく夫婦とはこのいうものか、と後で思い出して口を緩めてしまったが。

「リーリアがどういった存在かは知らんが、魔族は決して口を割るまい」

「アタシはリーリアのほう的大事だから。必要ないさ」二人の言葉に俺も頷いた。本当に必要ならば彼女のほうから話してくれるだろう。

いつの間にか自分たちの懐の中に、すっかり入り込んだ少女の顔を思い出して俺たちは静かに笑いあった。



## 7 (前書き)

ウォルフ、その2です。

獣人の戦士が跪き、頭を下げる。

その意味を彼女は知らない。

俺も語るつもりは無い。

月明かりだけが知っている、俺自身の誓い。

「部屋を代わる？」

此処暫く、彼方此方と連絡を取るために、ばたばたしていたが、漸くそれも落ち着いたので、久しぶりに部屋でくつろいでいた俺に、お茶を淹れてくれたリーリアはにっこりと笑うと頷いた。

「勿体無いじゃないですか。私一人泊まるのに、こんな広い部屋もベッドも必要ありませんし、それにここ、ウオルフさんが自費で差額分払っていらっしやるんでしょ？なら、経費内で落ちる、普通の部屋にしたほうがいいんじゃないかな、と」

時々、彼女の経済観念が良く分からなくなる。

今淹れてくれたお茶は、グランド特産の「リヨクチャ」だ。普通のお茶と異なる淹れ方をする「ソレ」を、彼女は事も無げに慣れた手つきで淹れてくれる。その味は、グランドの貴族であるステアの家  
の侍女ですら、足元にも及ばない。

だが、リヨクチャは希少性が高く、普通の家庭ではまず見ることができない物でもあった。下手をすれば、一生存在すら知らないものもいるほどだ。

旅芸人の一座で育ったリーリアも身近にリヨクチャがあったとは思えない、しかし彼女の手際は、昨日今日でできるモノでは到底無い。

「別に構わないと思うが？こうして俺は寛いでいるわけだし？」

「でも、ウォルフさんお休みになられないでしょう？」

「ちゃんと別の場所にいるぜ」

リーリアも俺が夜、何処に行っているか位解っているはずだ。それを匂わせると、彼女は大きいため息をついた。

「休んでいらっしやらないでしょう？」

言い返そうとして、俺は彼女の言葉の中にある意味合いに気が付き絶句した。

「何らかの事情でこの部屋を取っていらっしやるのなら、私は自費で部屋を取りますから」

飛び込みの、しかも時間をわきまえずに着いた俺たちに、顔見知りの宿の主人は呆れながらも部屋を用意してくれた。

…有無を言わず高い部屋をあてがわれた、なんて文句は言わない。

「…ウォルフさんさえよければ、同じベットでも構いませんよ」

俺は再び言葉を失った。自分が俺に何をされたかわかっていないはずが無いというのに。

「だって、ウォルフさんにとって、私って『そういう』対象じゃな

いでしょう？あの時は緊急時だったから…違いますか？」

「リーリア」

思わず、目の前に座る相手をまじまじと見てしまう。

「男と女の関係や…ましてや、恋愛対象になりえない。でしよう？」  
穏やかに笑う彼女から憤りは感じられなかった。ただ穏やかにある  
がままを語っている。

「そんな崇高な男じゃねえよ」

くすり、とリーリアは笑い、それ以上は何も言わなかった。

「…けど、そうだな」

立ち上がり、向かいに座る彼女を掬うように抱き上げると、そのま  
まベットに倒れこんだ。

「ここんどこ、忙しくて、ゆっくり寝ちゃいなかったから、少し寝  
るか」

「いや、別に私はゆっくり休ませて貰っているので必要ないんです  
が」

彼女自身の言葉通り、慌てる気配も警戒心の欠片もない声が頭の上  
から聞こえる。

「別にいいじゃないか。今日は完全休養日だ。ごろごろしてようぜ」  
ゆっくりとやってくる心地よいまどろみに、俺はその身を任せた。

「仕方ないなあ」と小さく呟く声と、衣擦れの音とともに体の上に  
掛け布が掛けられる気配がした。

これほどまでに穏やかな気持ちで眠りに付くことができるのは、何  
時振りだろう。

戦士にとって、背中に庇う相手、というのはとても難しい存在だ。背中を預けるに足りる相手は、少なくともはあるが俺にもいる。ステアしかり、エルグやレーエン然り。

しかし、単純に護るためだけに背中を見せるといのは、一つ間違えれば自分の命を預けるようなものだ。無防備になった背中を見せ、しかも敵と戦う。

そんな存在には一生巡りあう事などないと思っていた。

29年生きていれば、それなりに恋愛経験だつてある。しかし、そのどれもが自分にとって共に戦う相手でありはしたが背中を預ける事はなかった。ましてや、護るためだけに背中を見せるなどという愚考は、俺にとって考えもつかない事だった。

半分ふざけながらも、彼女に跪いた事を驚いていたのは俺自身だったが、あの時すでに無意識に思っていたのだろう。彼女こそ、俺が命を預けるに値する相手なのだ。

愛とか、恋とかいうものではない、もっと深い信頼と信用を与えるべき相手。

誰よりも近くて、そして誰よりも遠い場所で俺は彼女を見守ろう。

「グランド、ですか？」

「ああ、ステアが一旦来るようにと、使い魔経由で連絡を寄越してきた」

ふーん、まあスポンサーさまですからねえ。聞いたわけじゃないけどソレくらい解ります。

「で、だな」

すっごくいいにくそうなウォルフさんにレーエンさんが呆れたように息を吐いた。

「ここから陸沿いに行くのと遠回りになるんだ。途中山越えもあるしね。で、今来た道を引き返して、ロウエンから船で行こうと思ってるんだ」

あー、そういうことですか、お気遣いありがとうございます。

「私のことなら大丈夫ですよ、それにロウエンに行くからって副隊長さんにお会いするとは限りませんし」

会って気まずいのは私より副隊長さんだと思う。まあ、罪悪感が無いわけじゃないけどね。色々考えもしましたし、でもやっぱり答えは一つしかない。彼と私では決して相容れない。私が自分の主張を変えるつもりが無い以上、彼に歩み寄ってもらおうしかない。傲慢な考えだとわかっているが、どうしようもない。

そして、彼は自分の主義を変えないだろう。歩み寄るために努力はしてくれるかもしれない…でも、彼には無理だ。

最終的に私を放り出して自分だけ生き延びろ、などと。

「それもあるが：元来た道を引き返すんだ。意味は解るな」

心の中が一瞬ぎり、と痛む。目を閉じ、ゆっくり息を吸うと静かに自分の掌を見つめた。

「大丈夫、とは言いません。でも、行きます」

来た道を返す、というのはマーサが死んだ場所のすぐ近くを通るということだ。そう、ウォルフさんは言いたいんだと思う。

「あと、馬車は置いていく」

へ？と目を丸くするとレーエンさんが説明してくれた。少しでも行程を早めるために、最小限の荷物だけでロウエンに向かうとのこと。荷物は別の便でフランドル公のところ運んでもらうらしい。うーん、宅急便みたいなものかしら。

「エルグが一頭、レーエンとリーリアで一頭」

計算が合いませんね。首をかしげてウォルフを見ると、彼は唇の端を上げた。

「俺の荷物はレーエンたちの馬につけてもらう。エルグ一人より、お前たち二人のほうが軽いからな。俺は獣化して行く」

おおおおお、その手がありましたか。っていうか、アレですか？豹のお姿になられると。

よっぽど、きらきらの目で見ていたんだろう。そんな私に、エルグさんが大きいため息をついた。

「リーリアは閨以外で裸の男と戯れる趣味があるのか？」

へ？

「獣人の獣化、というのは服を着ていない状態と同じことだ。…ま

あ、毛皮を着ているから、裸といえないわけではないが、人型に戻れば、何も着ていない姿となる」

ずざざざざあ、と引いた私に罪は無いと思う。レーエンさんはキラキラ笑っているし、ウオルフさんは可笑しさを堪えるように、うつむき加減だし、エルグさんは苦虫を噛み潰した顔をしているし。「俺は別に構わないぞ。今更恥ずかしがる仲でもあるまい？ なんなら俺の背に乗っていくか？」

「いいえ！結構ですっ！」

獣化したウオルフさんは綺麗だった。

向こうの世界でブラウン管の先、とか動物園でしか見たことの無い生き物は、自分の知っている物より一回り大きな…豹、というより虎の大きさを持っていた。肉食獣の持つ優美でしなやかな筋肉の動きは、時を忘れて見惚れてしまう。

じっと見入る私に困ったような表情をすると、彼はするり、とその体を寄せてきた。

「…少しだけだぞ？」

エルグさんは明後日の方向を見て、レーエンさんはひたすら笑っているけれど。

か…かわええつつ！

自分の前でお座りをした大型肉食獣に理性など吹っ飛びましたよ、こんな機会二度とない！

至福です。向こうの世界じゃありえない体験をさせていただきまし



た。はい。

馬の旅は…もう、何も言うまい、ですね。あの場所に近づいたら感傷にひたるかな、なんて心配はこれっぽっちも無かったです。ええ、それどころではありませんでしたよ。

話には聞いていましたし、小説の描写なんかにもありましたが、わりと話半分、って思っていたんですね、ええ。自分がいかに甘かったか思い知りました。

レーエンさんが下手なんじゃありません、後ろに私がいるからって相当気を使って進んでいくのださると思います。でも、急ぎの旅ですから、のんびり馬に慣れる、なんて事していられません。…お尻の皮が皮めくれる、って誇張でも何でもなかつたんですね。こういう状態になるって、考慮に入れられていたのか、薬は山ほど購入されておりました。しくしく。

それでも、わりと穏やかに…本当に何事も無く、過ぎて行った。馬での強行軍のせいとか、野宿はなしで。

シエロンという国は、街道に力を入れているので、主要な街道であるなら、多少の無理をすれば野宿の必要なく進めるのだとレーエンさんが教えてくれた。

妖魔の襲撃を警戒して、基本夜はしっかりとした宿に宿泊する。こういった場所は二重三重に結界が張り巡らされているから、多少高くついても強襲される確立が低いのだ。

でも、低い、というだけで皆無ではない。

王都まであと、2、3日という場所でそれは起こった。

街や村の周囲や城壁、個々の家々や宿に掛けられる結界は、対魔法用のもので、実際の物理的進入には、物理的対応…つまり、施錠などによるものだを教えてくれたのはエルグさんであった。

だから「やあやあ、こんにちは」と、入ってくる相手に「どうぞ、どうぞ」と門扉を開いてしまえば、それで終わり。開けた側に責任がある、という事になる。

通常の魔族ならともかく、理性を失った妖魔は、ある意味魔法が垂れ流し状態にあるので結界に引つかかるが、ヒトや別の手段で入ってきた…もしくは入らされた妖魔には意味はないのだ、と。

旅の途中、本来なら素通りするはずだった小さな村で、村長に呼び止られた私たちは、この近辺で2、3日前から妖魔と思われる「モノ」が現れると訊かされた。そして、できればなんとか退治してほしい、とも。

しかし、自分を含め彼らもギルドに属する存在だ。二重に依頼を受けることはできない。そう言おうとした時、どこからか悲鳴が聞こえ、女の子と小さな男の子が駆けてきた。

「おかあさんがっ！おかあさんがあ」

ここで、無視できる人たちで無いこと位知っている。

子供たちが駆けてきた方向に向かって走り出した彼らを目で追い、私は小さく息を吐くと村長に向き直る。

「この子供達をお願いします。それから皆さんを安全なところに非難させてください」

「あ…ああ」

はつとしたように、村長は顔を上げ、近くに居た人たちに次々と指示を与えた。流石に伊達に年は取っていないし、責任ある立場にも居ない、ってことね。

膝を折り、子供たちを抱きしめた。女の子は急に安心したのか大きな声で泣き出し、つられたように男の子も泣き出した。

「偉かったね。流石お姉ちゃんだね」

首筋にしがみつきひたすら無く少女の頭を撫で続け、服をぎゅっと掴んだ男の子を片腕で抱きしめる。

「この子供たちをお願いしますか？」

頷くと、村長さんは傍に居たヒトに子供たちを託した。ほつと息を吐き、ウォルフさんたちの行った方に向かおうとした時、村長さんの暗い表情と同時に首筋に冷たい感触が当たった。

「申し訳ないが、貴女にはここで大人しくしていただく」

背後から聞こえる声は、静かではあるが有無を言わせぬ響きを持っていた。

「そつだ…暫くの間でいい、ここで大人しくして下さればいい。もし、動かれるようであれば…殺すな、とは言われているが傷つけるな、という命令は受けていませんからな」

何故だろう、不思議と恐怖はなかった。殺さない、という言質を取ったからなのか。でも、痛いのは正直ごめんこうむりたい。

「我々は言われた通りにいたしました。お約束は守っていただけ

のでしょうな」

「無論」

思わず顔を上げて、村長の顔を見ると、目が合った相手は気まずそうに顔を背け去っていかうとする。

「待ってください、一体」

「できれば、口も閉じていただきたい、『黄金きんの歌姫』」

剣を収めた相手は、そのまま腕を首筋に回した。背後から抱きしめられているように感じられなくもないけれど、相手から漂う気配は、そんな甘さなど微塵も感じさせない。

「豹のウォルフ、か。また厄介な相手を」

その言葉に、思わず息を呑んだ。パニックになりかけた頭を必死で落ち着かせる。考えろ、考えろと自分の中で呪文のように繰り返す。

向こうはこちらが何者か知っている。

このタイミングで、妖魔が現れる。この町は規模は大きくないが、王都まで早馬で3日ほどの距離だ。落ち着いて考えれば妖魔が出た時点で、王都なり、一番誓い騎士や兵士の詰め所などに助けを求めるのが普通だ。それをわざわざ、通りすがりの相手に助けを求める事がおかしい。

畏だと気が付くのに、時間は掛からなかった。

一瞬、ここに音叉があれば、と考えた自分に自嘲する。ヒトの世に関わることができない制約を持った相手だからこそ、手放した。今更助けて欲しい、などと身勝手極まりない。

一度働き出した思考は、留まることを知らないように動き続ける。無事に戻ってきたウォルフさんたちがこの状況を見たら。ヒト相手に後れを取る彼らではないけれど、妖魔と戦った後、しかも人質を

とられた状態で、思うように動けない事は明らかだ。

…それに。

男が口にした「黄金の歌姫」。確かに、それはリーリアの幾つかある通称の一つではあるが、それが世に広まるのは、この先数年後のはずだ。今の自分は駆け出しの歌謡いでしかない。一体彼らの背後に居るのは何者なのだろう。私たちの何を知っているのだろう。

黙って、ひたすら待ってチャンスを掴むのも一つの手では有るけれども、でも。

悔しい。

ぐっと手を握る。

身の程を知らぬ力など必要ないと言ったのは自分だ。その言葉に嘘は無い…無いけれど、こんなときだけ、自分勝手な事を考えてしまふ。力があつたら。少なくとも自分を守るくらいの力があつたら、と。

どうして、どうして、と考えるも仕方が無いことを、自分で望んだ結果であることなのに、思考はそこでループする。

ミツケタ！

その瞬間、入り込んできた声ならぬ声。

喚ぐ。我ラハ、此処ニ居ル

馴染み深いそれに、思わず声を出す。

「ウイン！」

## 9 (後書き)

更新が遅くなって申し訳ありません。近日中に続きをアップして、年内の更新を終了させていただきます。ご了承ください。



10 (前書き)

三章最終話です。

「氷結」

次の瞬間、冷たい感触と共に後ろの気配が無くなり、代わって柔らかな感触が私を包んだ。

「寂しいわね。呼ぶのは兄上だけ？」

耳元で囁かれる柔らかかな声。音として聞いたことは無いけれど、よく知る「声」…って、え？え？

「…アキ？」

「久しぶり」

にっこり笑う相手を思わず凝視してしまった。

「なんで、胸があるの！…ってか、女の人！？何で、どうしてっ！？」

「耳元で騒がない。…あ」

彼女が向けた視線の方向に目をやると、次の瞬間空気を切り裂く音と共に輝く紫電。

「派手にやったわね。夏人らしいわ」

「あれ、なっちゃんが？」

横で頷く気配と共に、静かな声が耳朶を打った。もう、こちらでは呼ばれることが無いはずの「私」の名前。

「リーリア、よ」

遠い昔、一度だけ彼の姿を見たことがあった。ほんの一瞬の邂逅ではあったけれど、彼だと解った、あの瞬間。

「ここでは、リーリアというの。ウイン」

「探した」

そっと頭に乗せられる手の感触に、思わず息を吐く。今まで存在として認識していても、実際に触れたことの無い相手だ。向こうも同

じように思ったのか、自分の掌を見つめて、目を細めた。

『風の四季王』

私は彼らのことをそう呼んでいた。一人遊びの話し相手、風に乗せて声なき声を運んでくれた、幼い頃からの友人であり、半身。

「リーリア、ね。うん、解ったわ。私たちの事はいつも通りでいいから」

アキの笑顔に頷きかけてはつとする。いかん、流されるところだった。

流れる黒髪、枯葉色の瞳。色合いだけなら確かに「アキ」に違いないんだけど。

「で、なんでオンナノヒトなの？」

「…まだ、そこ突っ込むのね。悪いけど、私にも解らないわ。気が付いたら、この姿だったし…それに私だけじゃないもの」

思わずウインを振り返って、男性の姿にほっと息を吐く。つていうか、これで女性だって言われたら、色々問題ありなんだけど。

「兄上じゃないわよ。春海、よ」

くすくすと笑うその声は柔らかく、耳障りのよいアルト。

「リンも？たしかに、十分女の子で通じるイメージだったけど…うーん」

いや、それもあるけど、アキさん性格変わりませんか？

不思議そうに首を傾げる彼女に、ソレを伝えると、「この性格も悪くないでしょう」と返ってきた。

今まで思考で済んできた意思の疎通が、実際口にしなくては通じな

くなってしまったのは少し寂しいけど、こつやって触れ合えるからいいか、と納得させる。

「リーリア」

改めて呼ぶウインに再び顔を向ける。「面倒だな」と小さく呟く声に、考えていることは一緒だと思わず口元が緩んだ。

しかし、こういう声をしていらっしやっただんですね、ウインさん。ウォルフさんとは又違う、好みの低い声。

アイスブルーの瞳に白と見まごう白銀の髪。どれほど色濃い服装をしていたとしても、彼のイメージは「白」だ。踏み荒らされていない処女雪。

「この男、どうする」

示された方向を見て、思わず目を見開いてしまう。よく、漫画やアニメでみる姿ではあるが、実際見てみるとかなりシユールだ。

人間の氷り漬け。

「生きてるの？」

「当たり前だ。しかし、この世界は便利だな」

くすり、とウインが笑う。その広げた掌には雪の結晶がきらきらと踊っていた。

…少し前にも言ったことはあるが、今のこの国の季節は夏である。念の為。

生きているなら、このままウォルフさんたちが戻って来るまで放っておこう、うん。

「イメージすれば力として発動する。属性は水、か。司る季節の持つ力に準じることになるな」

「因みに、私は風ね。夏人は火だけど、季節の属性からかしら、雷なんかを扱うのも得意よ」

いや、雷って夏だけのものじゃ無いと思うのですが…まあ、日本人としてのイメージは夏の風物詩の一つですけど。

「じゃ、リンは？」

「アレも基本は風だ。土属性も混じってはいるがな」

春一番。本当にイメージが日本的ですわね。

抱き寄せられる。柔らかなその感触に、改めて相手の性別を感じて思わずため息をつく。なんていうか、ないすばでいのおねーさんって感じですか。ちょっとむっとするのは仕方ないですわね。あはは。

「良かった」

ほっと、息を吐きながらワインが言う。

「突然、世界に俺たちが残された。お前が事故にあったのは分かっていた。俺たちは、いつもお前に寄り添っていたからな。だが、気が付くと、お前の居ない世界に俺たちは居た。お前が死ぬ時、俺たちも共に消える。俺たちが消えていない、という事は、お前の魂も何処かにある…そう思った」

「だから探したの。文字通り、風に乗って世界中のありとあらゆる場所を。貴女の生まれ変わりを。1、2度貴女存在を一瞬感じはしたけど、すぐに消えてしまった…貴女の私たちを呼ぶ声も聞こえただけど、何処にいるか分からなかった。…でもね、感じたの」

私の叫び。助けを求める声。それに導かれるように此処に来たのだと、彼らは語った。

「俺たちを定着させる。呼び名ではなく、真名で。お前が最初につけた、その名で我らを呼べ」

「冬樹」

イメージは雪景色の草原。吹雪に晒されながら、大地に根を張る一本の樹。

その途端、目の前その存在が変化した。確かに、実体があつて触れもしたし、その声も聞くことができたが、どこか希薄だった気配がしつかりと大地に根を下ろした、そんな感じだ。

「実」

文字通り、豊穣の秋。たわわに実る果実。一面の稲穂。

「二人も呼んであげて。貴女とは離れてしまったけど、私たちは繋がっている。貴女のこの世界の名が、私たちを通して彼らに聞こえたように、彼らの名も私たちを通して彼らに繋がるから」

「夏人」

びしり、と空気が再び震える。さっきよりもだいぶ近い。「あの馬鹿」とウインが呟く声が聞こえた。

「春海」

何故か、彼…いや、彼女か…の名を呼ぶとき、いつも何処からかピバルデイの曲が聞こえる気がするのは刷り込みだろうか。

正確には「春水」なんだけど、字面的にこっちのほうがかッコいい、と言ったのは本人だ。

ふいに、風が体の回りを取り巻く。かすかに花の香りがするソレに誰がやったか気が付いて、思わず頬が緩む。

声が聞こえ駆けてくる人影が見えた。「空間移動できるのにね」と、抱き寄せたまま笑う声に、一緒になって笑う。

さあ、皆に彼らを紹介しなくては。

「私の守護者達です。名前は」

## 10 (後書き)

年内最終更新です。

ノリで始めたこの作品ですが、多くの方にお気に入り登録をしていただき、感無量です。

来年は、仕事始めがとんでもないことになるのが目に見えておりますので、それが落ち着いてからの更新とさせていただきます。

本年は本当にありがとうございました。

来年もよろしくお願い致します。

それでは、皆様よいお年をお迎えください。



## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n2127u/>

---

ヒースキングダムの歌姫～おっかさんの漫遊記～

2011年12月29日10時57分発行